正誤表

頁	行	誤	正
叙 九頁	八行	Fri edrich	Friedrich
一〇頁	表末欄	Primery	Primary
二九頁	一行	せらる	せらるゝ
同	十四行	―陰	〔陰〕
三六頁	十六行	作と用の	作用との
四四頁	四行	建設し建設し	建設し
四六頁	十四行	提契的	提挈的
五七頁	十四行	廣がる	廣かる
八二頁	十三行	心狀狀態	心理狀態
九六頁	九行	了れるに至れるなり	了れるなり
一〇〇頁	二行	Language	Languages
同	十一行	〃	〃
同	十三行	〃	〃
一〇二頁	十三行	Language	the Language
一〇四頁	十五行	〃	〃
一四四頁	十六行	をとす	おとす
一五九頁	十行	最流正的	最純正的
同	十五行	系及びを	系及び
一七〇頁	一行	しむべき	せしむべき
同	十一行	動詞	動辭

右ノ外符號及ビ清濁ノ誤若干アリ。推讀ヲ請フ。

學術研究報告第七

昭和四年七月

第二高等學校教授 岡澤鉦治

新言語學綱要

第一部

人間の進化と言語の進化

仙臺

財團法人齋藤報恩會學術研究總務部出版

文學部講座

60362

目次

第一編　緒論

一　言語の概念と人間の進化につきての研究　一
二　地層及び古生物學等の知識と人間の進化につきての研究　八
三　言語的考古學研究の地位より見たる人類考古學其の他の知識　一五
四　本能の概念及び本能の階段　二一

第二編　人間の思索的本能並びに人間言語の性質及び進化

五　人獸本能上の異同問題　三二
六　前章のつゞき　三八
七　抽象作用の異同問題　四一
八　直接抽象と間接抽象　四八

九　前章のつゞき　五五
一〇　間接抽象と思想內容の展開　六三
一一　前章のつゞき　七一
一二　具體的言語發展の三紀　八一
一三　抽象的言語の發達　八七
一四　抽象的言語發展の六紀　九九
一五　高尙なる意味に於いての「言語」の概念　一〇五
一六　語根發展の時代　一一七
一七　根辭發展の時代並びに國語の類別　一二〇
一八　言語大成完結紀の鼎立的展開　一三六
一九　鼎立時代の關係的範疇概念の內容性　一四九
二〇　言語四分時代の概說　一五五
二一　前章のつゞき　一五九
二二　前章のつゞき　一六四
二三　前章のつゞき　一六八
二四　言語更新時代の將來　一七二
附　錄
(一) Incorporating Language につかて　一八一
(二) 形態論上のことにつきて　一八四

叙

言語學は、語が示す如く、「言語」の學なり。「言語」の學なりといへども、たゞ「言語」と言ひ得べき或るものに觸れての或る研究或る知識といふのみのものならむには、呼んで「言語學」とすべからず。何となれば、「言語」と言ひ得べきものに觸れたる研究知識といふのみのものならむには、言語以外のものの研究知識に對しては、言語の學なり言語の知識なりと言ひ得べけれど、其は、「言語學」が正當に要求すべき、言語其のものの學にあらずして、たゞ「言語」の一部分につきての知識なるに過ぎざるが故なり。「言語」其のものの學とは、「言語」といふもの其のものを擧げて、——(言ひ更ふれば、言語の全體を擧げ、もしくは、代表的に見るべき或るものを持して、之に依りて全體を提げ得べき氣分を以つて其の要領を攬り得べき樣に)——「言語」といふものは云々のものなり、云々の性質を有し云々の規則を有すといふが如き知識を成して、よく組織的の體系を成すものをいふにて、「言語」と言ひ得べき性質を有するものに觸れたる或る知識研究といふべきのみのもの、例へば、或る國語もしくは其の一部分の研究を目的としたる知識ならむには、その、「言語」といふもの其のものを目的として、「言語」といふものは云々のものなり、云々の性質を有し云々の規則を有すとして、「言語」其のものの本體を會得し得べき知識の體系を成すものならざればなり。或る國語もしくは其の一部分の研究知識を以つて言語學といふべきにあらざるを、他の物につきて譬ふれば、なほ、「人」もしくは「犬」もしくは「馬」の如きものは、皆動物の一つなるには相違なかるべけれど、人の研究、犬の研究、馬の研究、或は其の一部分につ

きての研究が、「動物」といふものを擧げての要領を攬るべき知識に、あらざるを以つて、之を「動物學」と呼び難きが如し。

然れども、暫く其の動物學の例につきていはば、動物の種類にも限りなく、研究の手段方法にも涯りなく、必しも、今の知識を以つて其のすべてを盡せるものとは言ひ難けれど、今知り得らるゝ材料及び今に於いて取り得らるゝ研究方法にて推したる知識も、之を以つて動物全體を擧げ得べしと思惟するならむには、よく、——（少くとも今の主觀として）——動物は云々のものなり、云々の性質を有し云々の規則を有すとして思念し得らるべきが故に、時に取つて確に動物の學たるを許すべく、溯つて、貧弱なる資料の下に建設せられ研究方法も遠く今に如かざる動物の概念を以つて立ちたる、往昔の動物學時代につきていふも、其の氣分だに、動物其のものの學問として考へられたるならむには、また、時代的に動物學たるを許さるべきものといはざるべからざるべく、今の動物學を以つて往昔の動物學を笑ふは、五十歩百歩として未來の人が今の動物學を批議することなきを保し得られざる以上、身の上知らずの嗤笑を後世に招くことなしといふべからず。他の知識學問も亦斯くの如くなるべく、言語學もまた斯くの如くなるべき事を思はざるべからず。この故に、いまだ甚開けざること言語學の如きものに於いては、其の研究資料に於ける範圍の廣狹、研究方法に於ける選擇の精否につきて、急に備れるを或る時代に求むべからざるは明なり。されば、言語といふもの全體に亘るべきものとしての、其の性質規則の研究、兎も角も組織的知識を成すものならむには、必しも、時に取つて知り得難き、すべての言語を收容したる資料の上に、研究方法の精要を盡すを要め、始めて「言語學」の名を許すべしとすべきものにもあらざるべし。何となれば、斯くの如く誅求する時は、其の資材と研究法との備はるには、百年を待つべきか千年を待つべきかも、殆ど明ならざるものあるべくして、其の資料を具備せしめて之を整理する方法の要契をだに、果して了知し得べきものなりや否や、また知り得べからざるべきが故に、まづは、時代々々の知識境涯相當の知識を以つて、其々、時に取つての提案とし原案として、之に改正を加へ補欠を行ひ、以つて、一方には、順次に其の學を進歩完成せしめ、一方には取つて直ちに其の與材たる言語繰縦の上に貢献せしめざるべからざるものあればなり。斯くの如くなれば、其の知識が、理想的には、よく客觀の條理を究め客觀の規律を認むるを目標とせざるべからざるにかゝはらず、其が到底不完全を豫想すべき時代相當境涯相當の推究たるを免れざるべきものなる以上、或る意味に於いて、主觀的の立脚地に於いて研究せられさるべからざる因緣を有するものといふべく、言はば、或る主觀的地位に立つて、出來得べき丈客觀的の研究を庶幾するものなりとすべきなり。これ、實に、いまだ大に開けざる學問に於いて、いづれにも脱離し得ざるべき、一般的の傾向なるのみならず、尤嚴格にいへば、如何に完備したる筌の知識なりとも或る意味に於いて、同一傾向の下に立たざるはなきものといふことをも得べきなり。

この故に、言語學は、或る國語もしくは若干の國語を以つて目標としたる研究なるべきものならずといへども、又、必しも、あらゆる國語を資料として、器械的にあらゆるものより歸納したりといふ形式を取るを要せず。要するに、言語其のものの性質規律の要領を攬つて、之を以つて、逆さまに、觸れ得らるべきすべての言語を支配し得べきものなるを觀じ、之を執つて、よく言語其のものの性質上自然の目的を助長完成せしめ得べ

きを認むべしとせば、所謂及ばずといへども遠からずの眞知識として、假定假容せらるべきものなるべし。言ひ更ふれば、言語學は、眞の科學的の研究資料(すなはち、實驗的に研究し得らるべき資料)と、眞の科學的の研究方法(すなはち、實驗的に證明する研究條件)とを以つて立ち得べきものにあらずして、成し得べき丈は科學的の研究法に訴ふべく、少くとも、科學的に研究し得る知識と背馳するものならざるべきを要するにかゝはらず、必然に、哲學的(すなはち辨證的)の推定法を交へて、よく渾然たる一體系を成すものなるべき本來性を有し、之に安んずるを以つて不可とせざるべき信條に立つべきものなりと言ひ得べきなり。もし、之を不可なり。不當なりといふべからむには、言語學の研究家は、今に於ける世界全體の諸國語に徹底的に精通し、更に少くとも、言語發展以來のすべての國語、今は傳ふるところなきすべての國語にも徹底的に精通するを要するのみならず、更に更に、遠き盡未來のあらゆる國語の性質及び變遷にも悉く精通するを要し、又、之を自由自在に自家の腦中に排列せしめ進退せしめ得るを要すべく、——(そは、斯くの如くなるにあらざれば、あらゆる言語よりして實驗的歸納的に言語の性質規則を拈出し得べきにあらざる形式的論理を成すべきが故に)——そが、說明を需たざる不可能事件なるに論なく、かの純正科學の屬といへども、或る學問の體系を具ふるには、實驗の及ばざる其の究極の點に於いて、辨證的の補充概念を用ゐて、眞心證的の信念を利用せざるを得ざるを以つていへば、斯くの如き傾向は、人間としてのあらゆる知識に於いて、避くべからざるものなりといふべきなり。之を以つて、斯學の如き、よく要を得れば、必しも資料の多きを求めず備はれるを求めず、時代相當境涯相當に正確を期し精要を得るを以つて足れりとすべきなり。

この故に、往昔に於いて行はれたりし如き、或る一國語或は二三の國語を資材としたる研究なればとて、其の境涯上、之を以つて、始めにいへるが如き意味、或は之に近き意味に於いて、言語の眞理を闡き言語の理法を得たるものとする主觀を持する者ならむには、これもまた、時に取つての——(すなはち、言語學史上の)——言語學的知識たるを失はざるものとせざるを得ざることと成るべし。これ、まづ知り置かざるべかなざる事なりとす。

此等の意味に於いて、余は、言語學は、到底、一種の言語哲學といふべきものたらざるを得ざる傾向を有することを提唱せざるを得ず。もし、時好に拘はれて、強ひて言語をして言語科學といふべきものたらしめむと欲せば、勢、範圍を縮少して、部分的のものならしめ區局的のものたらしむる外なかるべきこと、科學其のものが、實驗本位實證本位の關係より、勢、部分的區局的のものたらざるを得ざるが如くせざるべからざることと成るべく、かくて、こゝに拘泥すれば、言語學の言語學たる所以は、到底現出せしめ得べからず。この故に、強ひて、言語學を科學——(純正科學の意味に於いての科學)——の屬とせむとする、拘はれたる思想、主義の下に、辨證的總合的の內容上體系上の深刻なる研究を等閑にすることと成れば、其の氣分の下に、部分的には信を取るに足るべく、區局的には眞を傳ふるに足るべき研究をば起し得らるべきも、言語其のものを擧げて、言語其のものとしての性質規則を攬る上には、全體の上に要領を得べき收獲を望み難く、空しく、相互の間に統一なき支離不調なる部分的區局的の知識を集合せしめて、外部より僅に形式的なる體系上の聯絡を保たしむるを以つて倖とし得べきに過ぎずして、人生欠くべからざる須要の機關としての言語の、言語としての性質規律

を明にし、之に遵うて起すべき理想の、未來を指導すべきものを認むべき途を見出さずして、霧海の迷路に彷徨する外なからしむるを致すに止るべし。其の間、準備なき自家の素地を忘れて起す、負氣なき企圖——（言語其のものの研究としての深刻なる辨證的の耕耘を怠りて、拘はれたる科學氣分の部分的區局的研究のみの知識の、必然の空亡を徒手に補塡し、必至の欠陷を坐上に修治せむとする無謀の計劃）——自然の運命として、切角に信を取り眞を傳ふべき部分的區局的の知識を包むに、素養なき常識とも言はば言ふべき臆議臆斷を以つてするに歸着することと成るべし。これ、實に、今の所謂言語學（Science of Language）の一般的傾向を成すものにして、十九世紀以來、特に其の中程以來に發展したる、西洋の語辭學（Philology）專門家の言語學體系の弱點、質にこゝに存すといふべきに似たり。蓋し、この辨證的科學とも言はば言ふべくして、辨證的研究を主位に置きて、寧ろ實證的研究を從位に置くべき——（後者の知識が前者によりて統轄せらるべき意味に於いて）——言語學につきて、實證的研究のみを主持し、辨證的研究を粗にすることと成る方針によりて進渉する西洋學者の欠陷は、一面、實に科學萬能時代の餘弊的趨向として見るべきものなれど、其は、また、他に斯くの如き方向に彼等の步程を向けしむべき別途の理由ありしなり。

按ずるに、言語學的知識の萠芽は、近代に起れるにあらず。其の原頗る遠く、其の發展の濫觴を文典的知識と論理的知識との提携せられたる研究に見る。言擧げせぬわが國の古昔は暫く論せず。之を西洋に徵すれば、系を希臘の Aristoteles に引き、——（印度の Panini はこの系線に列すべきものならざるべし）——降つて、十七世紀の佛蘭西に於いて、Arnaud-Lancelet の Grammaire générale et raisonnée de Port-Royal を出し、十八世紀の英國に於ける Harris の Hermes, or a Philosophical Inquiry concerning Universal Grammar を經、十九世紀に入り、疑似の著作、所謂 General Grammar, Universal Grammar, Philosophical Grammar の名の下に、前後して英獨佛の間に散見することと成れるが中に、獨逸に於ける Heyse 及び Becker の文典學を成し、後者は、頭角を Organism der Sprache 等の著に出して、一時盛名を傳へ、前者また、小 Heyse に依りて、其の徒 Steinthal の手に出されたる System der Sprachwissenschaft を成し、一種文典本位の言語學を提供したり。これ、西洋言語學の古き系統なり。

文典本位の言語學、果して言語學と言ふを得べきか。曰はく、斷然として之を許し得べし。何となれば、此等列記するところのものは、自國語を主として、少數同族類族の言語より歸納したるものにして、大に時代的境涯的の欠點を有すれども、上文に述ぶるが如き氣分の下に、言語の眞理言語の眞範疇として之を論述するものなるが故に、時代的境涯的には、明に其の資格を享有するものと言ひ得べければなり。況して、抽象的に之をいへば、人間の言語は、言語としては文（Sentence）形を成す思想の表現なる單位文の結體、及び之を組成する單位語（Word すなはち Unit-word）によりて成立するものにして、既に一定の國語を有することと成れる以上の人の思想は、常に、其の言語によりて訓練陶冶せらるゝものなるが故に、必然に、其の言語及び言語の範疇的形式、すなはち文典上の樣式に依りて支配せらるべく、從つて、人の思想表現の言語としての、其の言語の性質及び範疇の概念を成す所以の機關たるものの研究は、明に、言語學の中核たり樞軸たり得べきものなるが故に、そは言ふ迄もなかるべき事なりとす。

然れども、此等言語學の系統には、殆ど先天的に、左の三條の缺點を有せり。すなはち、

(一) 其が少數なる一語族の國語より得たる知識にして廣く、すべての國語を統括すべき、標準的知識の資格を完くせざりしこと

(二) 其等の研究者の國語が、不幸にして、原始時代の言語の、心理的論理的に自然なる範疇的概念を有したりけむ狀態より、餘り多くの訛轉を經來り餘り多くの加工性を有し來りしものとして、語想の關係を尋ねて、すべての國語を統括すべき標準的の範疇概念の基礎たるべきものを歸納するに適するものならざりしこと〔この事につきては、本稿の熟讀を要す。〕

(三) たゞ文典上の知識より抽象せられたるのみの言語上の知識は、構文上の性質規律以外に、廣く言語の性質規律を啓發するものとしては、準備上の不完全を告ぐべきものなること〔此は、(一)(二)の場合と提挈して特に其の必然性を強くしたること〕

これなり。而して、この(二)の缺點は、民族心理の關係上、其の國語にて生長したる西人には、先天的、自然的にして、不思議の感を起さざるものなるが故に、今にいたる迄、殆ど其の缺陷を覺知すること能はざる狀態にあるなれど、(三)につきては、意識的或は半意識的に之を覺知することを得べきものなるが故に、自然其の方の補缺的研究に進出せむとする傾向を起したりしものなるが、之より先、一方には、(甲) Humboldt 及び Schlegel 等によりて貢献せられたる、異人種の諸國語に關する知識につきての訓育あり、一方には、(乙) Bopp の比較文典的 Grimm の比較語辭學的の發明說あり、就中、後者大に學者の注意を惹き、比較語辭學 (Comparative Philology) の旗色大に擧り、比較文典 (Comparative Grammar) の鼓聲堂々として一代を動かし、Brugmann-Delbrück の Vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen 出づるに及んで、壯大の觀を極め、此等が、おのづから(甲)の發展と提挈して、(一)の缺點に對する補缺的の功用を致すことと成りしものにて、大に言語學界に貢献するところありしは、言を需たざれども、此等は、固より、言語學より見て、部分的のもの準備的のものにして、言語學其のものには、あらず。前者に於いては、あらゆる國語の、形態學上の分類によりて整調せらるべき貢献を致し、Steinthal の(三)と提挈せしめたる Abriss der Sprachwissenschaft と成り、Schleicher の Zur Morphologie der Sprache と成り、Whitney の Language and the Study of Language と成り、Friedrich Müller の Grundriss der Sprachwissenschaft と成りて、大に言語學界刷新の氣運を致したり。

然れども、此等起るべき必要ありて起り、成るべき條理ありて成りたる研究と貢献と、皆大に學界を稗益して、斯學の觀を改めたる趣きあるは、論なきものなるにかゝはらず、此等が、舊來の、正當に言語學界の中樞たるべきこと前述の如くなる文典學派と適當なる提挈を保つこと能はざりしは、其の言語學をして、よく大成することを得ざらしめしものにして、其の適當なる提挈を保つに及ばざりしには、實に(二)の缺點によりて、西人が立つ國語の性質に基する彼等の民族心理が、彼等の國語もしくは其の同族類族の言語より得來る歸納的の研究によりて得たるもの以外に出でて、自由にあらゆる國語を整調すべき標準的の範疇概念を建設するに堪へざるに歸するものにして、往昔の文典學派の研究も、畢竟は、同一の原因によりて適當なる範疇概念を見出し得ざるに苦しみ、標準を彼等の論理的知識の内に求めむとする、似て非なる錯誤の手段に訴へて遂に成功せず、上

記甲乙の學起るに及んで、殆ど世に忘れられむとするにいたりしものにして、語想關係の題目上の研究としては、No reason without Language; no language without reason の金言を標榜して立てる、Max Müller の Science of thought あれども、其の著も、抱負の割合ひには大造を示すこと能はざるに止り、Paul の Prinzipien der Sprachgeschichte の如きも、僅に外部の接觸を試みむとして、得ずして已み、すべて西洋の學界は、語想關係の新局面の開かるべき、適當なる基礎なきことに依つて窮し、語辭學言語學方面の研究は、すべて形體的聲音的方面の、恰も現代的時好の科學的研究といはば言ふべきに近き研究を致すべき資材を成す方面にのみ、逼促せしめられざるを得ざることと成りしなり。さればこそ、比較文典の類、多方面に頻出して、大に學界を賑し居るが如き、いづれも、有用のものなれども、いまだ、思想表現の機關としての言語を統理すべきものとして、當然に要求せらるべき、思想本位の範疇を擬して大に諸國語間組織形態の異同を統一的に判別詳明すること能はず、たゞ、近親語類族語の、範疇上の傾向を等しうし、從つて形態上組織上の對照を器械的に擬議し得べきものに於いて、小池中の飛躍を試むるに過ぎざるに甘せざるを得ざる、必然必至の運命に支配せられ居るものなれ。之を、上文言へる所と對照すれば、言語學界の大勢に於いて、所謂「思ひ半に過ぐる」ものあるべきなり。

廿世紀に入りて、漸く形體的聲音的方面のみの乾燥なる研究に倦み、語想相關の方面に心を轉じ、文典的方面を思想的に觀察せむとする氣分を生じ、かの Bertrand Russell の如きも、其の著 Principles of Mathematics (vol.I.p.42) に The study of Grammar, in my opinion, is capable of throwing far more light on philosophical questions than is commonly supposed by philosophers など言ひて、此は言語學上の事ならねど、漸く尊重せらるべきを念慮する者も起りたることを示し、主として教育上に適用する爲のものながら、Jespersen の The Philosophy of Grammar や Sheffield の Grammar and Thinking や Pillsbury-Meader の The Psychology of Language や Sonnenschein の The Soul of Grammar やの類輩出して、世人の注意を惹き、やゝ文典學派の言語學を再興せしめむとするかの如き風潮を起しつゝあるに似たれども、其の民族心理の關係上、近き未來に於いて大なる言語學的基礎を据ゑ得べきものとして、大に期待し得べきものとは、見えざるなり。

今余は、傳統上不敏なる資質を持し、志は聊大なれども才は甚疎なる歎きを懷く。況して、經歷上頗ぶる不幸不遇の地位に立ち、研究上最不順不便の境涯に座するをや。然るに、敢へて、志しを斯學に染めたる因緣により、負氣なくも學界の形勢に慨するところあり、いさゝか献芹の誠を致して、一點の光明をこの暗黑界に投せむと欲して、識者の鑑を待つ。また、僭越の罪を免れざるべきかな。

本稿の研究資料につきては、多大の便益を齋藤報恩會の補助事業に受けたるが故に、こゝに、報恩會に向つて深厚なる感謝を表し、更に、本稿の出版及び校合の事に關して、畏友、同會研究部主事小倉文學士の庇蔭を蒙ること、頗ぶる多かりしを感謝す。

昭和四年七月五日、本稿第一部校合の業を終へて識す。

著　者

新言語學綱要

第二高等學校教授　岡澤鉦治

第一部　人間の進化と言語の進化

第一編　緒論

一

言語學とは、勿論、人間の言語の學なり。言語とは如何なるものぞといへば、誰もみづから知り居ることと思ふべけれど、さて、正しく其の定義を與へむことは、現今の學界教育界の知識狀態にては、十人が十人百人が百人、殆ど皆成し難かるべきなり。既に人の言ひ舊したることなれど、すべての學問すべての物事の正しき定義すなはち、正しき概念は、正しく其のものを知ることにつきての最初の知識なるべきと共に、また最終の結論なるべきが故に、其の研究のよく闢けたる後にあらざれば、之を知り難き理なればなり。むづかしき定義などどうにても可し、實物だに解り居らば、といふ人もあるべけれど、其のものの正しき概念なくして、其のもの

を正しく會得し正しく取り扱ふことは成し得べき理なきことなれば、すべて、其の樣に氣早なる思ひ取りをする人は、事理の深き研究など到底出來得まじきにて、簡易なる筋道を辿り當坐の用をば足し得べけれど、込み入りたる問題に觸れて、誤謬に陷り失敗を招くことなく、正しく解決し得む望み、遂にあり得まじく、眞理を闡明し學問の奧義を究めむなどいふことは、決して求め得べきにあらずと知るべし。從來、我國人が――（元來生氣あり活力ある民族なりながら）――外來の知識を請け賣りすることにのみ慣れ、獨創的の研究氣分をつくることを忘れ居りし結果、流石に、最近には、歐米人の研究の刺激にてポツポツと研究らしき研究を出す人も出づる形勢とは成りたれど、大體の人は、いまだ其の氣分には成り居らずして、學問といふものにつきて頗ぶる眞摯の情を缺き、却つて質實の研究を嘲らむとするが如き惡風あるが故に、まづ、其の注意を惹く爲の一言を述べ置くなり。

されど、「言語」といふものの、正しき定義すなはち正しき概念は、すべての方面に研究熱の盛なる歐米人にも、いまだ成し遂げられ居らざるにて、そは、この「言語」といふものの正しき概念を得ることの甚難かるべき理由ありて、其の理由を成す難關を打ち破るべき機運が、此迄いまだ學界に到着せざりし故なり。今其の理由を成す難關とは何ぞといふことを說明せむに、たゞ「言語」とのみいふことならむには、言ひ更ふれば、廣く「言語」といふべきもの全體を指すならむには、更に言ひ更ふれば、人間の言語のみならず、思想感情を表白する機關と成るものの全部を指して、之に共通したる名目として「言語」といふ語を示す場合ならむには、禽獸昆蟲にも、程度こそ違へ、其々に思想もしくは感情を表白する機關としての聲音もしくは態度を有し居るが故に其をも悉く擧ぐることと成るべく、人間の場合にても、所謂「言語」の外、動作態度其の他繪畫彫刻音樂等にても苟くも或る思想感情を寓示する場合のものは、一切其の廣義の「言語」に包含せらるゝことと成るにて、現に、さる樣の廣義に「言語」といふ語を使用し、其の概念を主持せむとする方より、舊來「言語」を有する點が人間の禽獸と異なる所なりと考へられたりし思想も、今は成立し難きもののやうに認められむとする程に成り居れど、事實上、人間の言語は、確に他動物の言語などとは相異なる點ありて、正しく人間と他動物とを區別すべき一特徵たり得るにて、そが、たゞの思想感情表白の機關にはあらで、思想感情表白の機關たると同時に、別に或る他の特性を具へ居るにて、其の或る特性を具へ居りながら思想感情表白の機關と成り居ることに依りて他の言語と相別るべき「人間の言語」が果して如何なるものなるかの正しき會得は、他の、たゞ思想感情表白の機關とのみ認めらるべくして、其の意味に於いての廣義の「言語」として認めらるべきものとの差別點の、人間と他動物とを區別すべき一特徵たり得べきものを認むることに因りてのみ成し得らるべきものなるが故なり。

廣義の言語の內、動作態度繪畫彫刻音樂などの如きものとの對照のみならむには、聲音（もしくは文字）にて思想感情を言ひあらはすものと言ひても、機械的には區別することを得べし。されど、禽獸昆蟲の聲音にて或る思想感情を言ひあらはすものとの區別は、決して斯くの如く簡單なる解決を成し得べきものにあらず。何となれば、人も禽獸昆蟲も、皆廣義の動物の一つなれど、人のみは、確に他の動物と思想上の際立ちたる相違點ありて、特殊の生活を營み特別の地步を占め居ること、實際上何人も疑ふまじきにて、其の特殊の生活を營み特別の地步を占め居る所に、其の人間の言語も、亦他動物の言語と異なる點を有し居るものなれば、其の人間の

他動物に對する思想上特殊の點を明にしたる上ならでは、人間の言語の他動物の言語との異同は分明にすること成り難く、之を分明にするにあらざれば、人間の言語の果して如何なるものなるかといふ。正しき會得をつくり正しき概念を立てて、之を指し示すこと、すなはち、其の定義を示すことは、成し得べからざる道理にて、其の特殊の點を明にすることは、直ちに、人間の他動物より區別せらるべき特徴を發揮することと成り、今の時代的知識として容易の事にあらざればなり。こゝに於いて「言語」すなはち「人間の言語」の正しき會得は、同時に人間其のものの他動物との相違點の發揮と提挈せざるべからざることと成り、必然に「人間の進化」といふ問題と相觸るゝことと成る。「言語の定義につきては「一五」を見るべし。」

現代の知識が、大體進化論的趨向に依りて支配せらるゝことと成り居るは、新知識ある者の正に承認すべき所なり。勿論、誰の進化論進化說といふことにはあらで、進化論的氣分に支配せらるゝが今の時代的知識なりといふことなるが、人が、固より、現存する他動物、例へば「ゴリラ」「チムパンジー」「オラグ」の如き類人猿より進化し來りたるものならざるは、今更言ふ迄もなきことなれど、此等類人猿の祖先と共に、形式上一類を成すべき或る形體と生理狀態とを有したる或る者より進化し來り、其の者は、又、類人猿より更に下級なる或る動物と、形式上一類を成すものより來れりしこと疑ふべからずして、段々と其の祖先に溯る時は、更に更に劣等なる或る動物と形式上同類的階段を經來りしものなることゝ成るべきは、漸々發展し來りたる生物學古生物學史的地質學等が示す徵證に依りて、今に於いて否むべきにあらざること、將來更に他の準據ある未知の研究起りて根本的に之を覆す場合あるにあらざらむ以上、現代の人智に於ける思索狀態に於いて、明に容認せらるべきものなるべし。

然れども、今の進化論を執る者が、人間の溯源的の祖先が他動物と同類を成すべき形體と生理狀態とを有したりと認むべきに過ぎざる前提に依りて、直ちに、同一祖先より出でたる分系なりといふ結論を起すは、暫く、眞實らしき假定として之を維持せむこと、敢へて不可なかるべきものなれど、其の間には、論理的に他の結論を起すべき解釋法を加へて之を更新變化せしむべき餘地あるものなるが故に、この假定的結論を以つて、直ちに決定的のものと臆斷し、之を基礎として、更に他の方面に演繹的の結論をつくらむとするは、頗ぶる早計にして危險なる推論なるべし。されば、今の生物學古生物學の知識のみよりすれば、よし、さる思索を起し易きにもせよ、人類と猿類とを一括して、共に「靈長類」と呼び――（この「靈長類」といふは、今の日本人の譯語にして、原語の Primates すなはち「長上類」は（必しも、さる意義なしとするも）――猿類を以つて全く人間の同じ仲間なりとするが如き豫感を與へ、其の觀念より、逆さまに、人も猿類中に入るべきものとして思念せしめむとする暗示たらしめ、みづからも、知らず知らず其の氣分の内に沒入し、人間そのものをも動物的にのみ考へむとするに到らしむる傾向あるが如きは、學問の研究上、頗ぶる愼重の態度を缺きたるものなるに似たり。これ、大に學者の反省を要すべきものならざるべきか。すべて、學問の研究は、徹底的に大膽なるべく勇悍なるべきものなれど、其の知識を建設したる資格に對する權限を省みて、苟くも越權に亘るべき進行は、固く愼まざるべからざるものなるべし。

他の事にて譬ふれば、生理學藥物學醫學醫術等の力は、今の處、生理的には、確に人間の全生命を支配する

ものといふを得べし。然れども、其の掌る所は、決して、人間のあらゆるものを含むにはあらずして、全く此等と別の立脚地に立てる精神的社會的の或る知識或る作業が、また其の立脚地より人間其のものの殆ど全部を支配し殺活せしむることを觀じ得べく、そが決して誤謬にあらざることを許し得べき場合多かるべし。されば眞の人間の會得眞の人生の解決には、悉く此等のものを綜合して其の要を攬らざるべからざるは勿論なるも、觀じ方に因りては、精神的に其の生活を有意義ならしむるものなるを認むべき人生に於いて、生理學醫學藥物學等の物質的方面に人體を支配する知識よりも、精神的社會的なる心的方面の人間そのものにつきての知識を主位に置かざるべからざる場合あるは、何人も否むこと能はざるべきなり。學者、果して、此等の關係を念うて今の進化論に想到すべき點なかるべきか。

余は、生物學古生物學史的地質學が、元來物質的方面に立脚するものなるが故に、其等より來りて眞實らしき假定說を成す進化論が、人間の地位性質を論定する上に、之と互充的に研究せらるべき、人間心的方面の或るものに依りて互充せらるゝ機運に達する迄、勉めて、越權に亘らざるべき用意を存すべきものなるを念ふ。余は、實驗的に證明し得らるべき材料につきて實驗的の證明を與へ得らるゝ知識を主持して、よく自己の領野を守るべき科學者が、動もすれば、其の領野を越えて、守る人なき他の領野を蹂躙するが如き推測的或は臆斷的の肯定を敢へてし、其の見識氣分に荒むが如きことの無かるべきを望むと共に、之を互充すべき研究の盛に起りて、隆盛なる今の科學的知識と提携して相扶益すべき氣運招來の責任の存在を反省すべきことを、所謂科學者以外の者に要求すべき時代なるを信ず。

かくて、人の人として他動物と撰を異にする、生活を成し、價値を有することが、主として心的方面にあるは、何人も否むべからざるものなる以上、物質科學より起りたる進化論の過去の成功に對して、人の心的方面より來る進化論的研究の、物質方面より來れる進化論を扶益すべきものの起らざるべからざるは、必然の趨勢ながら、いまだ何等の見るべきものをも出さざるを見て、男兒正に脾肉の歎きなきを得ざるべきに際し、時に取つての陳涉吳廣も亦其の庸才不相當の興起を容赦せらるべきを信ずる余は、人間の人間たる所以の「本能力」が如何なるものなるかを發揮して、人間の概念を正し人間の價値を明にし、其の本能力が如何にして發展進化したるものなるかの提案を以つて、負氣なくも時代に貢献せむとする宿昔の志を持すると共に、其の本能力の發展進化が、實に言語の問題に觸るゝを認め、また、其の言語と他動物の言語との異同が、實に、人間特有の本能に依りて思想感情發表の機關たる廣義の言語に、特殊なる條件を具備せしめて、こゝに人間の言語といふものを成立せしめたるものなることを認め、其の消息を知るにあらざれば、人間の言語の正しき概念も、人間の言語の理法典則も、正確に知り得べからざるものなるを認むるが故に、余は、余が新研究成績の第一部として、まづ、「言語」に關係ある、人の本能力なる、知的方面の本能力の發展進化の事より入りて、言語の性質と其の進化とを明にせむことを期し、題して

『人間の進化と言語の進化』

といひて、まづ之を發表し、相次いで

『構想的機關に關する形態論並びに其の範疇』

なる題下に於いて、いまだよく耕されざりし、わが國語を主位に置きたる言語の形態論的範疇の對照的研究の端緒を示して、之を第二部とし、更に

『言語の根本原理並びに其の活用に關する原則』

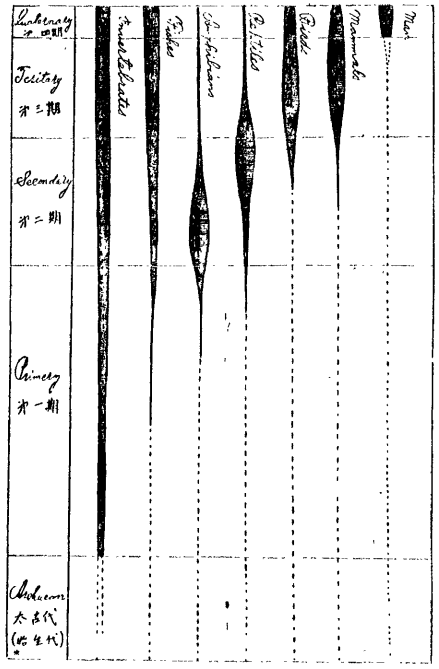
なる題下に、其の原理原則の要旨を統論し、『日本語系統論』並びに『國語問題の學理的解決法』といふものを附錄として、之を第三部とし、順次發表し、以つて、余が『言語學綱要』を完結せむとすることを、こゝに開陳するものなり。其の日本語系統の論は、第一部第二部の題下にも、其々の問題に觸れて論述する所あるべきなれど、特に附錄として之を述べむとするは、別に統括的に論明するを學說宣傳上の便宜なりと信ずるが故なり。

二

今、余が研究に入らむとするに先だつて、少しく古生物學考古學的方面の進化關係の知識に對して、余が研究の立脚地を示すに必要なる限りを言はむに、人に依りて異同ありといへども、大體に於いて、地質學者古生物學者は地層の構造を若干の「界」(Group)に別ち、其の内をまた若干の「系」(System)に別ち、之を堆積の歷史より見ては「代」(Era)といひ、「紀」(Period)といひ、其の歷史的觀察より、「地球成立の時代」にして、人に譬ふれば、出生時代少年時代の、今に於いては、全く假設的に思念する外なき時代を除きて、全く科學的に云爲し得べき時代を五つに別ち、其の最初の時代の、僅に部分的にのみ推知し得べきものを「太古代」(Archenozoic era＝Archean era)といひ、次ぎを「始生代」(Proterozoic era＝Algonkian era＝Precambrian era)といひ、次ぎを「古生代」(Paleozoic era)といひ、次ぎを「中生代」(Mesozoic era)といひ、次ぎを「新生代」(Cenozoic era＝Cainozoic era)といひ、其の間に種々の紀を別つ。この内、生物の發展に關して、始生代は最初の化石を見るべき時代なれども、眞の研究限内に入るべき資格十分ならざるが故に、古生代以下を取り、更に新生代を前後二紀に別ち、以つて四期と成し、古生代を「第一期」(Primary epoch)とし、中生代を「第二期」(Secondary epoch)とし、順次に「第三期」(Tertiary epoch)「第四期」(Quarternary epoch)として、化石に依りて生物の發展を研究云爲するを便なりとし、又、屢「第一代」「第二代」「第三代」「第四代」(代＝Era)と呼ぶ。其の内、第三代すなはち第三期は、地質學上より四紀もしくは五紀に區別するなれど、第一代、第二代の紀別と共に、こゝに用なければ擧げず。第四代すなはち第四期は、又、二紀に分割せらる。其の二紀に別つに二種あり。一は、前紀を「氷河紀」(Pleistcene period＝Glacial period)といひ、後紀を「後氷河紀」(Post Glacial period)又「新代紀」(Holocene period＝Present period＝Recent period)といひ、此の後紀の概念を以つて、地質學上の眼界に入る最近世迄を包含するものと定む。他の一は、考古學的觀察を加味し、氷河紀後氷河紀を一つに「氷河紀」(Pleistcene period or epoch)に入れ[内部をGlacial～Post Glacialとに別つが故に、つまりは同じものなり]其の下に、別に「新代紀」(Recent epoch)[epochといひperiodといふ、人に依つて一ならず]を立つ。更に、この後者の「氷河紀」を前者の如く「氷河紀」「後氷河紀」とし、之に後者の「新代紀」を加へて、五紀の別を立つる者もありて、すべて、人に依りて異同あり。此等各代紀の年數につきても、推定甚區々にして一定する所なく、殆ど人に依りて異なるがなかに、其の二三の例を擧ぐれば、地層堆積の厚さ(thickness of deposits)より推して、第一期を千八百萬年とし、第二期を三百七十五萬年とし、第三期を二百五十萬年とし、第四期を十二萬五千年とするもあり。(Boule氏の說)第一期を二千五百萬年とし、第二期を三千五百萬年、第三期を三百萬年、第四期を五十萬年とするもあり。更に「ラジウム」の放射能に基づける火成岩の變化(Alteration of Radium Minerals)より推定して、第一期を四億五

千萬年とし、第二期を一億八千萬年とし、第三紀を六千萬年とし、第四紀を百萬年とするもあり。(H. F. Osborn 氏の說)固より、其の說を立つる者にありても、或る關係より推測するのみのことにて、みづからも正確を保し難きを信じ居るものなるに過ぎずして、其の差異斯くの如く甚しとはいへども、兎も角も、悠久の年代なるを知るべき手懸りとしての十二分の根據たり得べものどもなりとす。

年代の事は、斯くの如く不明にして、たゞ其の悠久なるを保するに過ぎざれど、各地層中なる化石物存在の關係は、各代紀に於ける其の化石的生物の發展生存及び消長の動かすべからざる徵證を成すものにして、其の動物の化石より得たる研究の概觀を一紙片に示すべき略圖を Boule 氏の書より引けば、



人類
哺乳動物類
鳥類
爬蟲類
兩棲動物類
魚類
無脊椎動物類

※「この組織にては始生代は太古代中に入るゝなり」

この、古生物學的資料より得たる斯くの如き現象に依りて展開したる該方面の科學的知識の價値の大なるは爭ふべからざることにして、此等が生物學的に漸々に發展し來れる進化論と提携して、互に相證實するものあるにもせよ、又、事物の變化推移は、分子原子の末に至る迄、一として離合集散進化退化の形式ならざるなきこと、あらゆる知識の上に見出され行くことより推せば、進化論的觀察を成存(＝成立存在)し繁榮し流行するあらゆる事物に適用せむとすることが、時に取つて、最研究の道を得たるものにして、全く現代思想の準則として歸依すべきものなるに似、之に觸るゝ者をして、宇宙の眞理實にこゝにありの感得を起さしむるものあるにもせよ、元來、化石の如きものは、到底無言の死物にして、其の意味の着色は全く想像と辨證とに依る外なく、生物學的資料の上の辨證論なる進化論も、大體に於いて正確に近きを信せしむるに足るにかゝはらず、其の見解の下に研鑽せらるゝ生物學的知識も、いまだ研究の進行中にありて、日に成功に向ひつゝありといふのみのことにて、いまだ全局に徹底せざること遙なる上に、心的方面の進化論的研究、いまだ全く緒に就かざる程度にある以上、全體より見たる進化論は、實に、いまだ「論」といひ「說」といふ階段に止るものにして、生物を一系一貫に置かむとする今の進化論が——(部分的なる進化關係の研究には、純科學的知識たるを認むべきものの存在を許すべけれども)——斷じて、科學的資料の整調の爲、もしくは、部分的に證明し得らるゝ進化現象を統括的に考定せむとする爲の一種廣義の哲學的知識たる以上のものなりといふべからざるを信せざるべからず。

余は純正の科學は、實驗的知識の組織的結晶にして、廣義の——(純正哲學に對しての)——哲學は、辨證的知識の組織的結晶なるべきを信せざるを得ざるが故に、かくいふなるが、其の實に於いて、いづれにまれ、元來

「學」そのものは、直接間接に、實際的の體驗經驗より得たる抽象的知識の組織體にして、其の對象は、又、必ず或る限度の範圍に限定せらるべき條件を有するが故に、之に依りて或る實物或る事實を直接に體得し得べき性質のものにはあらず。而して、科學といひ哲學といふにも、更に其々の條件上の異同あるが中に、大體上實驗より來る直接の分析總合を要求すると、辨證を重ねて間接的に其の論結を維持すべきとの區別が、其の科學と哲學との思索法の間に存するは疑ふべからざることなるべし。かくて、人の思索が、實證せむとして資料上實驗し得べからざる點は、辨證に訴へざるべからず、辨證せむとしても資材上辨證し得べからざる點は一種の悟入的信念——（さては一種の信仰）——に訴へざるべからざることを知る時は、實際問題に方りて强ひて、制限を研究の上に加ふる必要こそはなけれ、便宜其々相當の門に入るを汲むべき理由こそなけれ、既に、知得の方法に階段あり限度あるを認むべからむ以上、進化論に沒頭し之を信じながらも、實驗的知識は實驗的知識、辨證的知識は辨證的知識、信念信仰は信念信仰とし、更に其々の立脚地中に、假定は何處迄も假定、決定は何處迄も決定として、其の知得の價値資格を明にせざるべからざること明なりとす。この故に、所謂科學の部として考へらるゝものの內にも哲學的科學といふべきものもあるべく、科學的哲學といふべきものもあるべく、そが決して不都合なるものなるにあらざるべきは、思索の地位上許さるべきものなれど、其の證明法の立脚地と證明者の立脚地とは明に區別せらるべきものにして、其の證明法の內部の備不備と正不正とは、又、其々の立脚地に合せて、嚴格に批判せらるべからざること知るべし。余は、進化論が、元來科學的資料寧ろ物質的資料より得られたる哲學的思索といふべきものにして、其の哲學的思索の信條に建設せられたる知識が、漸次、部分的に科學的知識として醇化し行きつゝあるものなるを信ず。然れども、あらゆる生物界もしくは物質界として立つ對象は殆ど際限なき延長を有するが故に、其のすべてに亘りたる進化論の科學的醇化は到底急速に成功し得られざるべきものなるを以つて、現在及び近き未來に於ける進化論の地位は、遂に科學的哲學といふべきものならざるを得ざるべし。況して、物質的資料よりは心的資料に重きを置くべき場合、すなはち、人間の人間としての進化を論ずる場合に於いて、人間の祖先たりしものの、他動物と著しき近似性を有したりしものと考へらるべき或る者が、果して、如何にして人間としての地歩を正確に占め得來れりしものなるか、如何にして他動物との裁然たる生活狀態を保つべき心理的立脚地を得たりしものなるかの證明が、雰碎なる化石の形體上の關係や、之に伴なふ遺物の狀態やの上に加へたる臆測より來る、外部推定の「スケッチ」的圖形に依りて成し得られたるものと信ずるを得べきか。人間の人間としての成存以來の進化の狀態、其の心的發展に伴なふ展開を主持すべき進化の狀態が、又、下にいふが如く同じく地中地上の無言の死物たる遺跡遺器を本位として、兎角物質的方面にのみ拘束せられ、心的方面の資料より歸納的に推究せられたるものならざる、所謂考古學的知識に餘り多くを信賴し、或は、基礎いまだ甚不精整にして、たゞ時代的なる進化式の氣分に依りて臆推斷定して、累々と假定に假定を堆積する、所謂社會進化論の現狀に放任して、其の解決を樂觀し得べきものなりや。これ特に、吾人の立脚地より見て現在の進化論的知識の最大欠陷なるを認めざるべからざる所なり。

人或は言はむ、さる方面の事は心的科學の領野にして、心理狀態の事は、全く心理學專門家の權限に屬し、其の部面の人の責任に歸すべきなり。其の專門ならざる者は、坐して其の成績の擧がるを待つ外なかるべしと。

心的科學とは何ぞ。心理資料の上の科學的知識の義か。はた、分科的なる廣義の哲學的知識の義か。そは暫く措きて、今の心理學が如何なる方向を選びて進みつゝあるかを念ふべし。言ふ迄もなく、今の心理學は、漸々に科學化せむとしつゝあり、又、應用化せむとしつゝあるなり。實驗心理といひ動的心理といふ、勢、材料を目前現實の界に限る傾向を成し、勉めて、實驗的統計の詮考に就き、辨證的推究の思索に遠ざかり、舊來の哲學籍より去つて新榮の科學籍に轉移せむとしていまだ歸化し了らざるものにあらずや。又、今の比較心理學といひ今の民族心理學といふもの、其の名目は名目として、今果して、如何なる發達の程度にあり、如何なる範圍に彷徨し如何なる步調を取り居るものなるかを知らば、今のまゝにては、近き將來に於いて、この問題の上に期待すべき十分の結果を豫想し得べきものと言ひ得べけむや。余は、決して、此等學問の今の趨向を惡しといふにあらず。其が其の傾向の下に漸々進步の路程にあるを見て、確に一種學界の慶事なるべきを信ず。然れども、余が敢へて僭越の罪を忘れて、其の特にこの問題に關與する所ある比較心理學民族心理學すら、今の處、殆と此の問題の解決に沒交涉なるを肯信し、敢言せむとするも、信に已むを得ざるものあるなり。豈、研究家出身關係の學籍如何を以つて、空しく眞理實相の研究を猶豫し、百年黃河の澄むを待つべしとせむや。余が心界の化石に比すべき言語の或る徵證と心的現象並びに人事につきての新なる觀察の一種の辨證とに依りて、一方には、人間の他動物より區別せらるべき本能力を闡明し、一方には、言語的考古學研究――（舊來の言語的考古學すなはち Linguistic Palaeontology の名を有するものとは、頗ぶる其の立脚地を異にするものなり）――の門戶を開かむとする必要を感じて、步を其の方面に進めむと力め居るも、亦偶然にあらざるべきなり。

三

遠く歷史時代を超越したる、人間原始時代の加工的事業の遺物として、今に傳へらるゝものの主位に置かるべきは、所謂「石器」なり。而して其の石器は、上記地層上の第四期にありては、氷河時代以來、既に其の使用の十分なる痕跡を傳へ、其の氷河時代と後氷河時代との間には、著しく巧拙粗密の差異を存し、石器よりしても其の二紀の區別を分明にし得べきが故に、考古學者は前紀を名づけて「舊石器時代」(Paleolithic period)といひ、後紀を名づけて「新石器時代」(Neolithic period)といひ、或は、舊石器時代の前に「始原石器時代」Eolithic period の目を置く。而して、人間的の骨相を有する化石を地層上の第三期末に見出し、其の第四期に入りては、始めより石器の部に入るべきものを出し、舊石器時代中、既に洞窟中に彫刻せられたる畫像が、――（斯くの如きものの存在は、明に概念作用の發展を示す。第二編參照）――漸々骨角象牙等の器具に及びたる遺留の證跡を示すよりいへば、人間らしき人間の發達が、實に悠漠たる舊石器時代にありしは明にして、石器及び彫刻の狀態に依りて、彌々展開の度を進めたるを見るべき新石器時代以來とするも、記錄を有する所謂有史時代迄の間に、非常に悠久なる年代を藏するものにして、其の間にありて、思想及び生活法が全く禽獸と隔離すべき懸絕の境涯を成すものと成り、遂に人間の特徵と見るべき完全なる加工的の社會狀態に進み、以つて、國家をも成し記錄をもつくるに到れりしものにて、驚くべき心的史的の課程を其の間に營みしこと論なきものにして、其の間の推移をば、輕々しく、一場の夢の如くまた走馬燈の如くに考へ、忽ちにして有史時代に殺到したるが如き想像を

持し、獸類と最劣等の野蠻人と、半開野蠻と宣告して成るべく獸的に觀察せむとする色彩眼に缺席裁判を致すが如くに定義づけられたる過渡期〳〵の代表者とを撰定點綴し、其の間に直線を畫くが如き聯絡關係を、主觀的に構成し、以つて、社會進化の條理を知り得たりとする者あれど、斯くの如きは、有史以前に於ける心的史的の課程の如何なるものありしかを知るべき、資料の存否と方法の如何とを知らざりしより來れる、早計速斷の過誤にして、恰も、人間存在の極めて古かりし徵證と生物發展の歷史とを藏むる地下の資料が、史的地質學古生物學の發展前に認められずして、早計速斷の判定を、人間及び生物の起源に加へたりし舊夢の如きものなるなり。

思へ。人が、既に進化に依りて成れるものとすれば、人の思想も人の言語も、皆進化に依りて成立したるものならざるべからざるは明なるべし。されば、古來西洋に行はれたりし言語神授說の如きが、決して進化論的思想界に許容せらるべきものにあらざること、言ふ迄もなきものなるを以つて、今に於いて神授說を信ずる者は、宗教家の一部の外、殆ど影を學界に絕ちたるにあらずや。この故に、或る民族が使用する言語は、其の民族が之を進化的につくり上げたるか、之をつくり上げたる他の民族より傳承して之を使用し來りたるものなるかならざるべからず、其の傳承し來りたるものなりとも、之を受用し之を利用して失墜することなく授受し來りたる以上、之を操縱するに堪ふる才能思想を有したるものなることを許さざるべからざるは論なし。況んや、之を發展せしめたる者にありては、自明的に、之を發展せしむる才能思想を有したりし者なるを證するにあらずや。然るに、特別の文化を有し來りたる民族は言ふ迄もなく、半開を以つて目せらるゝ民族、野蠻を以つて目せらるゝ民族に至りても、其の言語の構成法を檢按すれば、其の國語には語根語幹（Root, Stem）の類を有し、種々の微妙なる關係的條件を區別すべき語義上の補助成分として「文典上の形式」（Grammatical form）と稱せらるゝもの其の他の、思想發表法上の符徵たる、冠性根辭（Prefix）〔頭根辭〕履性根辭（Suffix）〔尾根辭〕の類を有す。此等は、皆、極めて高尙なる概念作用の結果として生產せられたること論なきものにして、曾ては、思想發展生活展開の必要條件として、人間の思索が、殆ど、言語の發展に集中せられたる時代ありしを證するものなるが、其の高尙なる概念が、如何に高度なる抽象作用の上に、始めて成立すべきものなるかは的確に想見するに堪ふべきものにして、注意を言語に集中せざる時代と成りての後世に於いては、相當なる思索家なりとても、容易く、斯くの如き符徵を側定し得べきにあらざるのみならず、其の組織の須要なる條理を、把握することのみだにも、——（今のみづから思ひ上りたる學者にても）——決して容易なるものにあらざるなり。其の發展進化の史的關係につきては、次篇に至つて詳に論述すべけれど、既にかゝる思想發展の證跡が、言語に依りて保存せられ居る以上、其の結果を遺したる原因の存在を認容せざるべからざる論理の推究法は、極めて古き時代に於いて、人間が、みづからかゝるものを成立せしむべき才能と思想とを領有したることの自明なるを示すに餘りあるものとす。然れども、進化論的思索の漸々勢力を得て一世を壓倒する潮流を成す現代なるにかゝはらず、この點に注意して、言語と思想との發展進化の跡を推究したる者絕えてなく、爲むことを試みむとする傾向をだに認め得べき狀態に遂せず。かくて、かゝる方面に毫末も注意せざる、今のわが國人に論なく、大なる研究心を以つて言語思想の方面に活躍し居る歐米の學界に於いて、大家名家を以つて目せらるゝ人とても、一もこの方面に於ける努力の存在を認むるを得ざるは、一は、歐米人の民族心理が、其の民族心

理に依りて成立せしめ推移せしめられたりし言語の性質と、其の民族心理其のものとに拘束せられて、この方面に或る弱點を有し居るに由ることなれど――（後篇に具說する所に依りて明なるべし）――（偶以つて、其の概念研究の難きを知ると共に、之を發展せしめたりし創古の人間の智能が――（少くとも、其の內の或る者の智能が）――如何ばかり進歩し居たりしかを知るに足らむ。然るに、毫もかゝる方面の事を省みず、省みむとすることをだに解せず、妄に上述の如き態度を持して憚る所なき論者の如きは、其の說、元來、進化論的思想の崇拜より來れりしものなるを諒とすべきは明なれど、其の實は、進化論主義の謀叛人たる地位に陷りたる者といふべきにあらざらむや。

凡、進化論の發展に伴なひ、人が、獸類より發展し、もしくは、獸類と近親的關係を持して發展したるものなりとする氣分を潮來せしめてより、やゝもすれば、自然的生活を成す他動物、すなはち狹義の動物と、加工的生活を成しみづから自己の境涯を展開せしむる人間との、性質上區別せられざるべからざる區劃の存在を忘れ、直ちに、他動物と同一筆法を以つて人間の進化を議せむとする過失に陷る傾向、學界を風靡し居るなれど、人間の進化が、元來、斯くの如く簡單に研究し了せらるべきものにあらざるは、其の加工的にして、他動物と相異なる生活を持して、悠久なる年代を經來りたることのみにても明瞭なるべきことなるが上に、其の加工的生活の必然性は、更に、其の人間たるものの思想、能力、生活の發展を、甚亂調ならしむべき特有性を成すものにして、人文の進み生活狀態の展開するに伴なひ、其の亂調の度は、更に更に甚しく、民族國家の殊別なるより來る懸隔の差異の大なるに加へて、同一民族同一鄕黨の間にありても、思ひを凝らし能を盡して、よく時代の代表者と成り一世を指導すべき地位に立つ者と、醉生夢死して何の心力を盡すことなき者との間には、天地雲泥の相違あること、何人も認め得らるゝが如くなるを常律とするものにして、其の不整一が人生の避くべからざる現象なりとすれば、時代相應の事情より來る或る程度の差異はありとも、極めて古き時代とても、大體上、全く同一の法則を以つて推さるべきものなるを疑ふべきにあらざるが故に、人間の進化といふことにつきては、寧ろ、常に加工的に一世を進展せしむべき、其の優秀なる者に引きつくる氣分を持して研究せらるべきものなるべく、上述の如く、勉めて劣等化せむとして、出來得べき丈優所を沒却して、低劣なる水平線にのみ就かしめむとし、成し得べき丈獸畜的方面に古代人を推し落さむとするが如き態度は、大に回避せらるべきものなるべし。（退化退歩沈滯等の現象につきての論究は、固より別途の問題に屬す。）

人間進化の始めに於いて、長く石器時代の續きたるは、徵證上明なることにして、金屬使用の時代は、石器使用時代の悠久なりしに對して、いまだ甚遠き年代を有するにあらざること疑ふべからざれども、人事の亂調不整一の關係は、金屬時代の出現にも、民族に依りて大に前後あるべきを見るのみならず、同一民族同一國民の間にありても、階段專門等の關係に因りて甚しき前後の異同ありしこと、理論上の推定よりするも、近き人事の類推よりするも、固より明なることなるが故に、人類考古學者及び考古學者等が考ふる如く、例へば、Boule 氏の書に擧げたる

Holocene or Recent（新代 紀代）
- Historic（有史時代）……Manuscript（記錄）（歷史時代）
- Pre-history（史前時代）
  - Period of the metal（金屬器時代）
    - Iron age.（鐵器時代）
    - Bronze age.（青銅器時代）
    - Copper age.（銅器時代）
  - Neolithic or polished stone period.（新石器時代ニナンチ研磨石器時代）

様の系統圖に依りて示さるゝ時代の前後、すなはち――（舊石器時代を前期として之を別にし）――有史時代を編入したる新代紀につきて、之を史前時代と有史時代とに別ち、其の史前時代を銅器時代、青銅器時代、鐵器時代に別つが如きは、全く、發展の關係的順序を示すに止り、實際の年代實際の史跡に、無條件なる直接の擬議を許すべきものならざるが故に、之を實際の史跡、實際の時代に擬議するには、頗ぶる愼重の態度を取らざるべからざることを知るべく――（Boule氏等の説に依れば、西人の知り得らるゝ最古の歴史の領有者なる「カルディア」埃及等に於いて、西洋紀元前四千年代〔＝三〇〇〇－四〇〇〇〕に於いて銅器の全盛時代を見、同三千年代に青銅器の全盛時代を見、同二千年代以降鐵器の全盛時代を見るも、青銅器の始めは四千年代の後半にあり、鐵器の始めは既に其の前半にあり、銅器の始めは同五千年代にあるべしとすれど、必しも、此等を以つて、人間が其々の金屬を使用したる時代の原始を示すものと斷じ難し）――且つ史前時代といふが、既に史傳を欠く時代なる以上、史傳を有するに到れる時代、すなはち有史時代は、人間發展の甚古きに比して、比較上極めて近き時代に屬するが故に、其の史前時代中、（甲）甚悠遠にして、地下の遺物以外、今は絶えて他の消息を傳へざる時代として、舊石器時代を承けたる懸隔の時代と、（乙）史傳時代より溯りて或る程度迄其の民族（もしくは其の國家）の消息を推知し得べき近接の時代――〔此は名目にていへば、「原史時代」（Prolohistoric period）といふにも當るべけれど、指す所、おのづから異同あるべきものと知るべし〕――とを區分して取り扱ふべき必要あるは容易く認められ得べけれど、其が必しも金屬の使用如何を以つて區別せらるべきものにはあらずして、此等考古學的資料が、名が示すが如き考古の資材として極めて貴重なるべきものなるにかゝはらず、其の資料出現の時代使用の前後等の甚亂調なるべき關係上、この無言の素材は、意味の着け方に依りて、如何樣にも解説し得らるべきものなるが故に、單獨に斯かるものを取りて、之に依りて、埋れたる人間原始の史跡を任意に斷定せむとすることの極めて危險なるは、分明の事なるべく、之と互充的に人間の原始時代を指示すべきものは、實に、人の人としての本能の如何なるものなるかの知識を基調として、言語と思想との發展を合法に辿るべき研究にあるものと知るべし。程度こそ違へ、史傳時代及び之に先行する口碑時代の、地上地下の遺物より來る考古學的資料の研究に至りても、其の史傳口碑其の他の或る關係より推し得べき種々の知識と對照し、交互斟酌して最愼重なる態度を取るべくして、妄に、獨立の地歩に立つて、主觀的の判決と、之を演繹したる排他的の斷定とを加へむとする、早計速斷の結論を避くべきものなること、準じて知るべきなり。

四

余は、既に屢、人の人としての本能（すなはち、人の人たる所以の本能）といふことをいへり。この「本能」の概念は、余が主張に關して最重要なる關係を有するものにして、よく之を正し置くにあらざれば、よく所説の旨趣を了得すること能はざるべき恐れあるものなり。然るに、この「本能」といふ概念は、由來、誰も默契的に知り居る如くにて、其の實、必しもよく會得せられ居るものにあらずして、從つて、其の説明も、亦人に依つて同じからざらむとす。この故に、今まづ、其の本能といふものが、果して如何なるものなるかを説かむとす。按ずるに、「本能」（Instinct）は、先天的に或るものに具はり、思慮せずして動くことによりて自己を指導する能――（すなはち力）――にして、經驗上より得たるものによりて自己を指導する能――（すなはち力）――と對照せられ、其の經

驗上より得たるものによりて自己を指導する方を「知能」(Intelligence)とすることと、定むるを以つて、世の「本能」につきての概念の一般的傾向に合ふべきものと認むべきが如し。然れども、世人の頭腦に映ずる、この對照の概念には、二重の錯誤を包含し居るものの如し。其の第一の錯誤は、「能」すなはち「力」そのものと、其の能より起れる結果との混同あることにて、其の第二の錯誤は、上述の意味に於いての「本能」と「知能」とを對照することの、それ自體の不倫なることなり。まづ、其の第一錯誤よりいへば、本能あるが故に、本能的の作用動作思念——(こゝに思念といふは、飢渇飽滿倦怠等の情感の本能的なる思念を指す)——を起すものなれば、其間には原因結果の區別あるにて、其の「原因」と「結果」とは、同一視すべきものにあらず。なほいはば、其の能の存在は「原」にして、其の力の發動は「因」、其の歸着たる作用動作もしくは思念は「果」なり。其の「原」と「因」とを一つにして見れば、「本能」と其の「發動」とが原因なりとして、認めらるべけれど、もし、其の「原」と成り「因」と成るものを更に「原因」「結果」の對照として見るとすれば、其の存在は「原」にして、別に「因」と認むべき或る感應關係——(すなはち刺激に對する應動)——の下に、發動といふ「果」を起したるものと認むべし。されば、本能の存在と發動とを一つとして之を原因と見、作用動作もしくは思念といふ結果を起すものと見るにても、既に大略の觀なり。かくの如くなれど、無意識なる場合、もしくは、意識はすれども或る經驗上の知識にて自覺的に自己を指導すべき心的作用の營爲あることなき場合には、愼密なる注意を加へざれば、其の因果の推移上の經過、殆ど分折的に考へらるべき餘地なきが如くにして、其の間に確然たる限界線を劃し難きを感ずべきふしもあるべきが故に、其の原因結果を混同して、共に之を本能と認め易き傾向を起すにて、實際、斯くの如く粗雜なる思念、世に行はるゝこと多きを認む。されど、そは、明瞭に本能の發動と本能發動の結果たる作用動作等との混一にして、論理上の錯誤なるは明なり。次ぎに、經驗上より得たるものによりて自己を指導すべき心的作用を營爲するは、すなはち、思索作用を營むにて、思索作用を營む能すなはち力は、其の營爲を成す能はざるに對して、之を成し得らるゝ能すなはち力なるなり。然れども、かゝる場合には、其の能より、まづ思索の心的作用を起し、其の結果として、更に或る作用動作もしくは思念等を惹起することと成りて、其の間に分折すべく區劃すべき階段の關節を見出し易きが故に、自然其の思索を「原因」とし、之よりして或る作用動作もしくは思念等の「結果」を出すものとして考へらるゝことと成るべき傾向あるなるも、其の思索には、其の思索てふ結果を生む原因の能力——(すなはち、先天的に其の身に具はりて思慮せずして動くことによりて「思索し得べき樣に」自己を指導する本能力)——の別に存在し居るなれば、要するに、世の所謂本能知能の對照を成すものの對象は、低級なる心的狀態の極めて單純なるものに對して、高級なる心的狀態の複雜なる方より來りて多くの曲折を有するものが、その意識の海も波立ちて自覺の作用も活潑と成り辨別せらるべき關節多き現象を成すを認めたる迄にて、思索するにも爲ぬにも、出來ぬものは出來ぬなれば、之をすることを得るは、之を營爲し得らるべき能力、すなはち、其のものに取りての本能力として、出來得ぬものに對して出來得るものの地步を保つ特徵の發現を有するに過ぎざること、所謂本能のみに依りて立つ種類の者と、人間の如くなる者とを對照して、其の異同を如法に觀察すれば、自然に明なるべきものなりとす。然るに、既に、第一の錯誤にて、能力と能力の發動と能力發動の結果とを混同して、其の非を解せざる心より、まづ、其の單純なる本能力發動の結果、すなはち本能

的の作用動作等に對して、この複雜なる曲折に依りて成れる作用動作等を對照し、直ちに、單純なるものの本能力もしくは其の發動の一塊視せられたるものに對し、複雜なるものの、作用動作等の原因と認めらるべき思索作用を對照比擬し、其の複雜なるものの裏面の本能力の存在を忘れたること、これ、實に第二の錯誤と認むべき重大なる過失にて、實際、西人の間に行はるゝ「本能」「知能」の對照は、かくの如き二重の錯誤の上に、徒らに其の罍塞を築きつゝあるものなるが如し。「本能」其のものの論にはあらで、たゞ、結果としての作用動作のみの區別ならむには、直接に本能より來る簡單なるものを本能的作用もしくは動作といひ、間接に本能より來るものをば、そが直接に本能より來らざる意味にて、非本能的作用もしくは動作、又は、知能的作用もしくは動作といはむも、たゞ便宜的の種別としては、必しも不可なかるべけれど、こゝの論に與らずと知るべし。」されば、「本能」「知能」といふ今の語が、元來、洋語の譯語なるにもせよ、其の指示せらるべき對象の性質を正しく表現せしめむとならば、其の譯語の漢字其のまゝ、「本能」には、廣狹二義ありとし、其の廣義なる「本能」は、或る種類の者に必然的に具はり居りて、其の種類の者の其の種類の者たる所以を成す、本然の能力にして、其の狹義なるものは、低級にして單純なる者の、自覺なき心的狀態程度なるが、其の本然のまゝ、或る結果に導かるゝ其の能力——（もしくは、之に準じて思念せらるべきもの）——を劃限していふこととし、「知能」も、亦、本能の一種にして、自覺的の知得を起し之を運用し得る本能なりとすることとし、すべて、斯くの如きことにつきては、實際の性質眞實の事理を主とする心にて、無益なる語彙の歷史を拾つべく、寧ろ原語としての Instinct, Intelligence の概念をもこの意義に改訂して相對照せしむべき程の抱負あるべきなり。「されど、なほ自覺的の知得を起し之を運用し得る本能といふのみにては、よく人の本能に擬し得べきものにあらず。人につきては「しる」といふ「知」よりは「さとる」といふ國語特殊の意味にて「覺」の字を取るべきものあれば、此等を概括し居る意味に定めて「智」の字を採り「智能」といふべき必要をも認め居れども、今は暫く常習に從ふ。」かくの如くにして「本能」「知能」の對照も始めて安定なる立脚地を得べからむのみ。

凡そ、生物と無生物とを問はず、物、皆、內的或は外的の或る關係より、起り或は起さるゝ、或る相對的感應の力あること、下にいふが如し。其の相對的に感應するものとして認めらるべきもの、これすなはち、其のものの本能なり。然れども「本能」の語は、在來、生物特に動物にのみ適用せられ居るにて、今いふ必要も其に止るものなれば、暫く、其の範圍につきていふこととせむに、其の本能として認めらるべき力の感應關係には、其々の分に應じたる階段的の區別ありて、甚單純なるものもあり、甚複雜なるものもあり、こゝに、其の單純なるものより來る作用動作等は、たゞ本能的にのみ動くが故に、——（當然に）——本能に依りて動くものと見ゆるに對し、其の複雜なるものより來る作用動作等は、明に或る思索を成す心的狀態の經過を內省的に認め得べきが故に、其の思索を起さしむる本能が其の影に潛み居りて思索せしむるものなるにかゝはらず、其の思索のみを認めて其の原に溯らず、直ちに之を——（寧ろ其の立脚地當然に）——本能ならずとし、知らず〳〵、本能の發動に依りて其の思索を起し得るものなるを知らざる錯過に陷り易きことと成るなり。かくて、上述の如くにして學界を過ちしものなるが、すべて、「力」といふものは、力のみとして直接に認むること能はず、其の力に依りて起る現象に依りて認知する外なきこと、何につけても明なることにて、すべての研究上、力の發動する

現象に依りて、一方に、其の結果として具體的に識得せらるべきものを直接に認知すると共に、他の一方に、發動の現象に對する主體の存在を溯源的に覺知せざるべからざることに注目し、切に、認識上の混雜を起すことを避け、苟くも、其の混雜せられたる認識の對象につきての曖昧模糊の概念を基としたる不法の演繹を以つて、事理を推さむとすることを戒めざるべからざることを知るべし。今、單複種々の階段と本能とにつきて、圖解的に本能の發動に關する曲折を示せば、粗、左の如きものとなるべし。

〔とゝに「力」といふは、物理學的にいふ「力」とは異なりて、寧ろ其の「エネルギー」〔精能、能勢?〕に近く、つまりは、物体物質等の「エネルギー」に對すべきものを、人間其の他の生物氣休等に互りて、其々に存在するものと認めたりとして考ふるを庶幾しとすべし。〕

(1) With sensation, mood, and will in the higher stage.
(2) With sensation, mood, and will in the highest stage and knowledge of the former stage in illuminated manner.

※〔かゝる立脚地より見たる、かゝる方面の術語は、固より西洋傳統なる在來の哲學心理學の術語の概念(すなはち譯語としての術語の慣用概念)と一致し得べきにあらざるが故に、おのづから種々の異同を有し、寧ろ、通俗的の漢語の字義と國語の意味とに重きを置きたる制定なりと知るべく、配當の英語の如き、固より正しく適合すべきものにあらざれども、後日の英譯を豫想するが故に、假に配置を試みたるのみ。譯語としての術語にだに相合はざるべき慣用の歷史ある外國語を利用せむとの無理なるが上に、余が選擇の不用意より來れる杜撰も、亦あるべし。後日審査改訂すべきなり。〕

今、少しく、この圖解につきて說明せむに、元來、感應の存在は、意識の有無に關せざるものにて、若し、進んで其の存在を究めむとならば、かの化學的分子の如きも、更に陰陽電子の如き細原子に分解せられ行くべきことの認められ來り、其の細原子も、また殆ど人間の實驗を超越したる細微細小の原子より起りたるべき辨証の可能性

を哲學的に有し得べきものなる以上、溯源上の最后最終の始原子、言はば造化の力の原基ともいふべきものの、內部に共存する或る動向性の、他の始原子と和合し又は分離すべきものを有し、——（今の科學にては、陰陽の電子、光量子、「エネルギー」量子以上の溯源を豫想すべからざるにもせよ）——其が內的關係外的關係に因りて、相感應し相和合し相分離することを累進せしむる間に、所謂量子電子とも成り、又進んで原子とも成りしなるべきにて、今の科學の領野と殆ど全く領野を異にする方面に發展したる〔例へば、今の科學者の承認如何を度外として、靈界的方面ともいふべき側の〕量子電子原子的のものもあり得べきをも想像しつべきものにして、更に〈其等の累進變化を重ぬる間に、直接に吾人の五感に入るが如き諸現象と其の活動とを認め得ることと成れりしものなるべく、其の動向性を、作用の主體として思念するものが、すなはち「力」すなはち「能」にして、其の溯源的の最后最終の始原子にありては、其の「體」と「力」すなはち「能」とが、殆ど、分離して思考すべからざる微妙の境にあるものなることを理想し得べく、其等微妙の境にある始原子を始めとして、吾人の悟入辨証實驗に依りて認得し得らるべき、あらゆるものも、直接五感に入るすべての現象も——（そが幻覺もしくは誤認ならざる以上）——皆、其の成存變化の間斷なき動向性の發揮を示すものにして、——（かゝることは、こゝに深入りして論ずべきことならねど、かくの如く思念するにあらざれば、萬有幽顯を統一的に理解することも、本論に必要なる「本能」の起因と其の性質との徹底的の理解も、共に不可能の事と成るべく、また、かゝる思念は、信認不信認を別の事として、如何なる論鋒を以つてするも打破すべからざるものなるべきを信ずるが故に、一言するのみ）——種々の立脚地より起る其の動向性の發揮せらるゝ所、其の動向の動機を認めて、之を感應と呼びつべく、其々の立脚點相當に其の特徵を有する所、其の動向の發揮——（寧ろ、發揮せらる動向性）——を捉へ、體化して、之を「本能」といひつべきものなれど、今は暫く、世間の習慣に從ひ、生物寧ろ動物に關する部分につきてのみいふものにして、此の圖表は、たゞ本能と其の發動の結果との關係を示すものなるが、一方に於いて、又、無意識的の反射作用を成すと認むべきものより順次高級なるものに進む關係をも知り得べきものにして、其の本能の如何は、其々の生理狀態にも伴なひ、生活狀態にも伴なひ、宛然として生物進化の階段的關係をも表はし得べきものなるべく、其の內、低級の階段に屬する本能は、——（こゝにいふが如き大體上の本能につきては）〔勿論或る特殊の生物の、其の類を成す所の本能がすべて上級のものに享有せらるといふにはあらず〕——すべて上級の階段なるものにも享有せらるべきものなれど、其のものとして立つ特殊の本能は、其のものとして立つべき中心と成るべきが故に、他の能力は、勢、其の中心と成るべきものの勢力に依りて統一せらるべく、從つて、統一せらるべき程度の自然の同化作用を受けて、其相當の變徵を起すべきものなるを以つて、或る意味に於いては同一なりといふべきものなると共に、或る意味に於いては、同一ならざる性質を有するものといふべし。例へば、無意識階段と見らるべき最低級の動物、もしくは、意識階段と見らるべきも其の內の最劣等と認むべき低級の動物の上に起る、反射動（すなはち甲）、もしくは、反射的感得作用、（すなはち乙）が反射作用乃至動作の成立を見る或る場合、すなはち、飲食男女關係——（寧ろ陰陽關係）——〔陰陽關係といへば、必しも性慾的作用のみならずして分裂生殖のものに關する作用狀態の上にも適用せらるべきが故に〕——の充欲的作用——（飢渴生殖力の飽滿等より來る反射動の結果）——を起すと同じ關係が、人の階段、すなはち（丁）（戊）にも認めらるべきが故に、飲食男女

關係等の反射作用乃至動作は、廣義の動物の殆どすべてに共通のものなりとして見らるべきものなれど、人は人として立つべき(丁)(戊)系の本能を中心とするが故に、此に當るべきもの、すなはち、食慾性慾の事が、(甲)(乙)等に屬する飲食男女關係等の反射能及び其の結果の作用動作とは著しき相違ありて、其等が、皆、人間的の本能に依りて制限せられ居ることと成り、多くの場合に於いては、殆ど殊特の性質を有するものと成り居るが如きことこれなり。

なほ、此等本能力の事につきては、余が次期研究の結果として發表する豫定なる「人間本能論綱」に詳論すべきが故に、こゝに多くを言はざれど、余がいふ「本能」は、或る階段或る種類のものをして、其の階段を保ち其の種類を成さしむる所以の特殊なる基調的能力をいふものなりと知るべし。されば、人は、人としての階段に立ち人といふ種類を成すものなるが故に、其の階段を保ち其の種類を成す所以の(丁)(戊)等に當る本能力を有すると共に、廣義の動物の一たるを失はざるが故に、其の廣義の動物の階段に立つべき關係上(甲)(乙)等に當る本能力をも有するものと認むべきものなるを知るべし。「こゝに(丁)(戊)等に當るなどいひて、(丁)(戊)等のなどいはざるは、此等は、たゞ、階段の區分を示したるものにして、其の内容を的確に示したるものにあらざればなり。」餘は、之を以つて推すことを得べきなり。

なほ、圖解中にいへる「消極的意識作用」は、受け身的に起る意識作用にて、「積極的意識作用」は或る刺激によりて發動的に起す意識作用なりと知るべく、又、上文「感應」につきて「内的外的の關係より起る」といふ事をいへるにつきて、更に一言すれば、感應の起る動機には、左圖の如きもの

感應
- 外的
  - 刺激に對する消極的感應(一)
  - 刺激に對する積極的感應(二)
- 内的
  - 自身に對する感應(三)
  - 自我に對する感應(四)

ありて、外的とは、外部よりの刺激に基するをいひ、内的とは我が内部よりの刺激に基すと認むべきをいふにて、(一)(三)は(二)(四)に對して比較的低級の階段に起るもの、(二)(四)は(一)(三)に對して比較的高級の階段に起るものにして、刺激に對する「消極的感應」といふは、外部の刺激を受け身的に受くる方より來る感應にして、有意識なる(乙)に當るものの外、無意識なる(甲)に當るものを包含すべく、同じく「積極的感應」といふは、外部の刺激に依りて我が發動的に與すべき感應にして、(丙)に當るものの外、(丁)(戊)をも包含すべく「自身に對する感應」とは、肉體の我、及び、精神的の我なりとも肉體と提挈して一體に見られたる我にして、自我と對照せらるべき場合の我が身より來る刺激の感應をいひ、「自我に對する感應」とは、全く精神的の「我」にして、思念し居ることを實感し居る肉體提挈の「我」と對照せしめらるゝ、其の「我」を對象として、之より來るものと認むべき刺激の感應なりと知るべし。而して、この最後のものの場合は最高度なる人間の思索にのみ起るものと知るべきなり。

「圖解中、超越的感得作用と成るものの系につきては、その「悟入作用」といふものが、こゝに「覺識」といふものと共に――（この漢字は、慣用法上の意義がこゝに示すべき正しき概念を損ふ恐れあれど、他に適當な

る語なき故に暫くいふなり）――簡單にこゝに說明し得べからず、又、說明すべき關係のものならざるが故に、其の適當なる場所として、「人間本能論綱」に讓ることとすべし。」

第二編　人間の思索的本能並びに人間言語の性質及び進化

五

人と人との間にも、他の心はよく解らず。正直に言はれたりとも、「言、意を盡さず」の上に、聽く方の主觀にて、或は消極的に或は積極的に、之を制限し又は潤色して聞くことあるべし。況して、

詐りのなき世なりせば、如何ばかり、人の言の葉うれしからまし

の歎きある人言、更に況して、言葉にも表さざらむには、氣色にて推測する外なかるべし。「たで喰ふ蟲の好き〳〵」、氣前も感情も等しからぬが上に、其々の引く方に心を向け居れば、氣分も思想も全く折り合はぬことと成り、裏と表との如くなることもありぬべければ、月觀るにつけても、心も魂も打ち込む雅び男に、

かくばかり惜しと思ふ夜を、いたづらに、寢てあかすらむ人さへぞうき

と咏む人もあれば、倦け者のしだらなき心に、

世の中に、寢るほど樂はなきものを、うき世の馬鹿は起きてはたらく

と歌にも成らぬさへづり言をいふもあるべし。かゝる簡單なる生活の上にも、かくばかりの區別はあるを、複

雜なる社會の事相につけ、思想感情に天地雲泥の相違あるべきにつけても、人の心は知り難きなり。智能の程度も測り難かるべきなり。かくて人は、加工的の生活を成し、夫々に思索を利用し居るが故に、一方には懸隔の門戸雜多なれど、他の一方には、同じ人間同士の事、其の思索の力にて類推揣摩しても、或る程度迄は、他人の上をも測り得らるべきを、他動物につきては、そが自然的の生活を成すが故を以つて、大體に於いて同種の間の變化少きにかゝはらず、人より見ては、全く種類を異にし居るものにて、特に心的狀態の殊別なるを條件とすべきものの心理狀態の事なれば、測り難きこと更に甚しかるべし。されば、他動物――（人間を除外したる狹義の動物）――の心理狀態につき、彼此と研究する所ありて、難問題に合せては、やゝ眉目を存する狀態に其の知識を耕したる人もあるなれど、其を考ふべき人間みづからと他動物との異同の要點だに、いまだ明ならざれば、他動物にも心ありといひ、心なしといひ、云々のものは知能あり、云々のものは知能なしなど言ひ定むるも、其等の研究、などが杓子定規の誹りに落ちざらむ。其の研究の無益なるにあらず、否、極めて有益なるを認むべきなれども、定規の定らざるを惜むべきなり。固より、全然異なりたる異種の心理狀態、正しく測るべき定規の得らるべきにあらざれども、せめては人と他動物との異同の要領を得て、まづ、研究者と研究の對象との大體上の關係を見定め得べき立脚地に立ち、其の上に想像もし推定もしつべきものなるべく、其の關係につきて、彼我異同の角度を示すべき主觀の定規とも成りぬべきものを得むこと、差し當りての緊急要務なるべし。

人と他動物とが、實に、自然的生活を營むと加工的生活を營むとに因りて、事實上に截然たる區劃を有することは、何人も爭ふこと能はざるべし。こゝにいふ、自然生活とは、純然たる自然力の支配に依りてのみ行動し、毫も自己の意志より起りたる營爲をすることなきをいふにはあらず。他動物とても、程度こそ種々雜多にて、其の間にまた雲泥の相違ある階段ありて、明に意志ある營爲を行ふ者あるは、論なけれども、概して之をいふに、其の營爲は、皆、自然力に支配せらるゝ其の成存の必要に伴なふ不可避の行動にして、少くとも、自然力、もしくは他の壓迫又は保護の下に起る變化なりといふべきものにして、みづからの工夫に依りて自己の境涯を移動せしむべき進化的步程を發動的に起すこと能はざるをいふなり。この事は、斷じて例外なき、他動物の人間に對照せらるべき共通の特性なり。今、之を「自然的の生活」といふことと定む。但し、すべてのものに亘りて「境涯的向上本能力」ともいふべく、精力を集中する所、周圍の關係に依り、步を移して將に上級に轉せむとする傾向はあるべし。かゝる傾向なければ、如何ばかり環境の事情は具はるとも、進化といふことは、斷じて望み得べき事にあらざればなり。されど、他動物に於ける其の境涯的向上本能力といふべきものは、到底、周圍の事情に依りて動かされつ動きつする程度に止りて、遂に周圍の事情に克つて特發的に自己を展開進化せしむる點に達すべき强さを欠くなり。然るに、人間は之と異なり。固より、加工的生活の行はるゝに伴なひて、其間の進退の程度甚亂調なるが故に、其の內より標準視せらるべきものを摘出して、其の差異の點を觀察する外なけれども、人間そのものも、亦或る程度に於いては、他動物と同じく自然力其の他の環境に依りて支配せらるゝにかゝはらず、特發的に自己を展開進化せしむべき能力を有し、以つて自然力を利用する加工的の生活を營み得らるゝなり。こゝにいふ「加工的生活」は、斯くの如き意味に於いての生活として、上の「自然的生活」と對照せらるゝものなりとす。而して、人が、其の環境の事情に克つて自己を展開進化せしむべき力量を示し、功果を擧ぐるは、一に、之を境涯的向

上本能力の強きに歸せざるべからざるべし。見よ、吾人の生活が、一として生れ落ちたるまゝの自然なることなきを。又、見よ、他動物の生活が、特發的に其の境涯を移して進化的に自己發動の展開を起しつゝある徴候なきことを。されば、發動的に自己を展開進化せしむる能力を有すると然らざるとが、其の間の能力の相違にして、自然的生活と加工的生活とが、之に伴なふ生活狀態の相違なること知るべし。

この二つの能力の異同の心的狀態の上に著しく認め得らるゝ現象は、思索作用の有無なり。然れども、思索作用といふもの、既に、進化に依りて成り進化に依りて得來れるものなる時は、過渡狀態の思索作用の存在すべきは、理の睹易き所なり。人獸、既に、肉體の上に於いて一定の規矩に入るべき通有性を存すとすれば、心的方面にも、或る程度の類似あるべきは、推定的にも自然の事なるを見るべく、事實上、亦、少くとも或る場合に於ける近似を認め得べし。この故に、完全なる思索作用に對する過渡時代の思索ありとすれば、比較的人間に近き獸畜には其の程度の思索的作用あるべき理にて、實際も亦斯くの如くなるを斷ずべき現象を存すれば、「知能」の意味に於ける Intelligence は他動物にも存在すべきことと成りて、其の完全なる思索作用と過渡時代の、すなはち擬似の思索作用との區劃を、嚴正に識別することを得ざる以上、兩者の異同は、甚曖昧なるものと成るべく、歐米人の間にも、何の取り留めたる研究もいまだ世に出でざること、宜なりといふべきなり。かくて、事實上にも、「知能」の意味に於いての Intelligence が他動物にも認めらるゝことと成れば、人と獸畜との理論上の區別は、頗ぶる成し難きものなるべき觀を呈すべし。知能の意味に於いての Intelligence はありとも、靈智の意味に於いての Intelligence は他動物にはなし、其處に眞正の思索作用と擬似の思索作と用の分も別るゝなりといはば、信に、然もありなむ。然れども其の「知能」と「靈智」との區劃は果して如何。之をしも嚴正に區劃すること能はずして、用語の區別に依りてのみ器械的に裁定せむとするならむには、其の眞相は決して明なるべきにあらずして——（況して、漢語としての「知能」「靈智」の語も、共に Intelligence の譯語なりとすれば、其の原語もやゝ相近き兩義を有すればとて、其の準據の、曖昧にして又甚不明瞭なるものなるをや）——古來「靈智」ある所、人間の獸畜と異なる所なりといひ、言語——（人間の言語）——ある所、人間の獸畜と異なる所なりといひ、社會的生活を成す所、人獸の異なる所ぞと言ひ來りたるも、事實は、其のいづれにても通るべけれど、理を推して解說せむとすれば、いづれも、共通性の擬似現象の他動物にあるものとの限界明ならざる方より、正確なる知識、準據たるべき條件としては、學問上殆ど今日に認められ難き狀態と成り、類人猿と人間とを一視同仁的に觀察せむとする思想の勢力を增し行くと共に、現實生活の人の操守にまで影響する社會現象を促進せしむるに安んずる外なきこと成るべし。されば、人間を類人猿の圈內に入れざらしむとするには——（そが、果して眞理より見て正當の事なりとすれば）——其の「知能」と「靈智」との區別ともいふべき、人獸の區劃線が、如何なる點にあり、如何なる本能の異同を成すかを明にし、從つて、人間の言語社會生活等の、他動物が有する擬似のものと異なる所以をも明にするを要することと成るべし。上にいへる、自己を發動的に展開せしむる能力の有無は、事實上、自然的生活と加工的生活とを別つものとして、比較的に難なかるべきものにして、之を經とし、境涯的向上本能力の強さの異同を緯とすれば、人間の他動物との區劃はほゞ明なるに似、事實は其の通りなれど、此とても、結果を成す現象より起す、形式的の漠然たる細墨を示すのみにて、其の內容上の性質、甚分

明なりといふべからず。もし、疑ひを挾む者あらむには、事後成敗の論に依りて優劣の性質を擬議するに類すとし、或ば、其の起因を以つて偶然にありとし、或は、其の現象を以つて一時的のものとし、久遠の未來に於いては、如何なる轉倒を見むも知るべからずといふ事あらむとすべし。この故に、余は、進んで其の内容上の性質を闡明し、其の内包上の性質に依りて、思索關係の、人間の本能力を標示し、人間の加工的生活の外延が如何なる範圍に亘るべきものなるかの原理に及ぶと共に、自然に發揮せらるべき言語の性質の論究に入らむとす。「其の本能の他の半面にして、所謂「靈智」の主部たる覺識關係のもの、又、社會生活の原理たるべきものにつきては、本稿の題目に直接の關與なきを以つて、之を「人間本能論綱」に讓らざるを得ず。」

六

今、其の說明に入らむとするに先立つて、讀者に向つて、如何に、獸畜中の或る者の心的狀態が人間に近きものありて、相當なる思索作用を有するに似たるかを、豫め念頭に印し置かむを求めむが爲に、著名なる實話として、

印度の或る街に、其の飼主に、曳かれて、日常往返する路上の一裁縫師の家に、食物を惠まるゝ例なるに慣れ、毎に其の長き鼻を店頭に差し入るゝ習ひなりし、或る象が、一日、其の店の惡戲者に因りて、食物を與へらるゝ代りに、其の差し入れたる鼻頭を針にて突き害ねられたりしかど、其の時は何の怒り狂ふこともなくて、次ぎの時、豫め多量の泥水を鼻の中に吸ひ込み置きて、其の店頭に來るや、一時に之を吹き出して、貴重なる裁縫の注文品を汚し、大なる損害を受けしめて、其の仇を復したり。

といふことの傳へらるゝを揭げ、そが獸類として、如何ばかり思慮ある行動なりしかを思ひ、果して複雜なる思索作用なくして成し得べきものなりや否やを思考せむことを望み置くべし。讀者の多くは、又、

「ビーヴァー」(Beaver)と稱する齧齒類の水邊に棲む狸類似の獸が、其の鋭利なる齒を以つて、相當に大なる樹木を齧み倒し、更に曳き行くに堪ふる大さに齧み切り、小川の邊に運びて、之に木條、泥土、石塊及び艸株等を加へて、其の流れを堰き上げ、汎濫せしめて艸原を池と成し、其の邊に、やはり齧み切りたる樹木條枝等を以つて小屋の如きものを構へ、こゝに其の族類を育するのみならず、其の常食とする楊柳樺楓等の樹皮を、冬期用に貯積する爲に、其等の樹木を、同じく適宜に齧み切りて其の池中に沈め置く

といふが如き事實を知るべし。これ亦、果して、相當なる思慮なく思索なくして成し得べきものなりや否やを思考すべきなり。讀者は、又、有名なる清少納言の「枕の冊子」に「翁丸」と呼ばれたる、犬が、「名婦のおもと」と呼ばれたる猫に關して罪を得たることにつきて、左の如き記事あることを想起せむ。

をのこども召せば、藏人忠隆參りたるに、「この翁丸うち調じて、犬島につかはせ、たゞ今」とおほせらるれば、集りて狩りさわぐ。……犬は、かり出でて瀧口などして追ひつかはしつ。「あはれ、いみじくゆるぎありきつるものを……かゝる目見むとは思ひかけけむや」とあはれがる。「おもののをりは、かならず向ひさぶらふに、さう〳〵しくこそあれ」などいひて、三四日になりぬ。晝つ方、犬のいみじうなく聲のすれば、「なにぞの犬のかく久しくなくにかあらむときくに、よろづの犬どもはしりさわぎとぶらひにゆく。みかはや

うどなるものはしりきて、「あないみじ、犬を藏人二人してうち給ひ、しぬべし、ながさせ給へるが、かへりまぬりたるとて、てふじ給ふ」といふ。……「死にければ、門のほかに引き捨てつ」といへば、あはれがりなどする夕つかた、いみじげにはれ、あさましげなる犬の、わびしげなるが、わななきありけば、「あはれ、まろか、かゝる犬やは、このごろは見ゆる」などいふに、「翁丸」と呼べど、耳にも聞き入れず。「それぞ」といひ、「あらず」といひ、口々申せば、「右近ぞ見知りたる、呼べ」とて、下なるを、まづ、「とみのこと」とて召せば、參りたり。「これ翁丸か」と見せさせ給ふに、「似ては侍れども、これはゆゝしげにこそ侍るめれ、また、翁丸とよべば、よろこびてまうでくるものを、よべどよりこず、あらぬなめり、それを打ちころして捨て侍りぬとこそ申しつれ、さるものどもの二人して打たむに生きなんや」と申せば、心うがらせ給ふ。暗うなりて、物くはせたれどくはねば、あらぬものにいひなしてやみぬるつとめて、御けづりぐしに參りて、……犬の柱のもとについゐたるを、「あはれ、きのふ翁丸をいみじう打ちしかな、死にけむこそ悲しけれ、何の身にかこの度はなりぬらむ、いかにわびしき心地しけむ」と、打ちいふほどに、このねたる犬ふるひわななきて涙をたゞおとしにおとす。いとあさまし。さば、これ翁丸にこそありけれ、よべはかくれしのびてあるなりけりとあはれにて、をかしきことかぎりなし。御鏡をもうち置きて、「さば翁丸」といふに、ひれふしていみじうなく。御前にもうち笑はせ給ふ。人々まゐりあつまりて、右近の内侍召して、かくなどおほせらるれば笑ひののしるを、上にもきこしめして、渡らせおはしまして、「あさましう、犬などもかゝる心あるものなりけり」と笑はせ給ふ。うへの女房たちなども、來まゐり集りてよぶに、今ぞたちうごく。……さて後、かしこまりかうじゆるされて、もとのやうになりにき。なほ、あはれがられて、ふるひ泣き出でしほどこそ、よにしらずあはれなりしか。人々にいはれて、なきなどす。

この文は、當時の事實談にして、少しも誇張したる形跡なし。この翁丸の動作の如き、普通の人間と異なるまじき曲折したる心理狀態を有したるに似たらずや。「もし、眞僞の不詳なるものを擧ぐれば、馬に猫に其の他野獸の或る者に至る迄、人間らしき心情を有する類例極めて多く、其の一半は、確に正しき事實なるべきを想ひ遣ることを得べし。」獸畜の內、或は種類的に、或は個體的に、異常なる心的狀態の發達を示すことある、斯くの如くなる時は、よし、そが、上にいへる境涯的向上本能の特殊なる變徵的活動の力に依るものなりとするも、甚慢るべからざる思想狀態にあるものといふべく、人獸の劃線、果して何れの所にか引かれむとする、の感なき能はざるべきなり。

七

凡そ、無意識狀態の反射作用なるものを除き、苟くも、意識ある者にありては、よし認識狀態につきての自覺なきものなりとも、言ひ更ふれば、無意識的に意識するものなりとも、既に對象につきて之を識別することを得るものなる以上、少くとも、暗々裏に其の對象の或る屬性に刺激せらるゝ感得を有することは、明なりといはざるべからず。これ緒論中(四參照)にいへる「反射的感得作用」と成りて、低級なる氣分を起すものなり。一歩を進めて、明に有意識的に意識して對象を識別し、完全なる氣分と意志とをつくり得る狀態に達すれば、

其の對象の識別を自覺して――（いまだ、內省的に自己の心的狀態を觀察すること能はざるにもせよ）――之を有意識的に選擇取捨し居ること明にして、――（もし、選擇取捨の心理狀態なくんば、必ず或る程度の選擇取捨の上に定まるべき心的指針なる、「意志」といふものの存在すべきにあらざること、論なし）――有意識的に選擇取捨することありとすれば、對象の屬性を、或る程度に於いて抽象して思考することなしといふべからず。こゝに於いて、まづ、「抽象作用」といふことにつきて辨を費すべき必要に觸るゝこととなる。

抽象作用とは、認識する主觀より見て、其の對象の間に存する識別點たるものを注意して、其の對象の屬性として感得する一種の心的作用にして、もし、物に接して、物と物との區別、物の存在と不存在との區別、物の位置の差異もしくは變動の區別を知り得ざらむには、わが身外の一切につきて、何の感覺も無かるべし。苟くも、身外の事物現象につきて、有意識的に之を感得するものとすれば、物の區別、物の存在位置の異同もしくは變化等につきての或る刺激を受け、之に依りて、其を認得し居るものなり。この故に、內省的に、すなはち反省的に、其の心相を識得すると否とを問はず、苟くも、物象を有意識的に感得する以上、――（よし、無意識的に遂行せらるゝものなりとも）――抽象作用の活動なしといふべからざるなり。

然れども、抽象作用の完全に發露するは、實に、吾人人間の上に存す。されば、暫く、人間の立脚地に立つて之を觀るに、物と物とを區別すべき或る特徵たるもの、すなはち、所謂屬性なるものは、本來、其の物以外に別に存在するものにあらざるが故に、其の屬性なるものは、實は、屬性其のものとして實在するにはあらず。言ひ更ふれば、分折的に考ふる場合に於いて、對象たる物の內に具はり居るを認むるなれど、物其のものの存在以外、獨立的に何物かの存在するにはあらず。この故に、屬性は、實に、屬性其のものとして實在するものにあらざると共に、物もまた、屬性を離れて存在するものにあらず。物の存否（＝有無）位置等も、亦然り。人は、物の存在する時と存在せざる時との、場合の異同に依りて、主觀が受くる刺激の異なるより來る、認識上の關係より、「有」「無」の思念を起すなれど、對象たる物の外に、「有」といふ「關係的屬性」の存在するにもあらざれば、「有」「無」の思念と無關係に、「物」の思念せらるべきにもあらず。位置の變化も、亦斯くの如く、人は、物の存在につきて感得する認識上の刺激より、位置そのものの異同もしくは變化を感ずるなれど、「位置」といふものが、物以外に實在するにもあらざれば、「位置」と沒交涉に、「物」の存在するにもあらず。かくて、「屬性」「有無」「位置」等、此等廣義の「屬性」を成すものは、――（有無位置等は物其のものに固有するものなるにはあらざれども、屬性其のものの概念、既に認識上の便宜にて人間が加工的につくり上げたるものなる以上、「有無」「位置」も、亦、物につきて必然に思念せらるゝものなるに依り、やはり、之に準じて、概念上、「有無」は一種成存上の關係的屬性、位置は一種占有上の關係的屬性として認めらるべきことと成り、其のものに固有する屬性を「內屬的屬性」といふべきに對し、「外屬性的屬性」として思念すべきことと成るは、認識上、自然の事なるべし）――其の實、物以外に存在するものならざれども、苟くも、物の刺激を受けて物を感得する以上、また、其の對象たる物件が、すべてに於いての唯一の對象ならざる以上、――（唯一ならば、區別する必要を感ずる刺激なきが故に、屬性を認むるといふが如き、分解的の認得を起すべき理なかるべし）――勢、物より來る刺激の特徵に依りて物を區別する心的狀態を惹起せざるを得ず。その心的狀態の十分に發展したる所、吾人が認

むる如き種々の屬性の完全なる概念――（概念の內容は、よし不完全なりとするも、概念の成立狀態として完全と認むべき概念）――も具はり來りて、實際は物のみなるべき對象につきて、之を分析して感得する「屬性」の概念に依りて、「屬性」といふ、一種の概念的範疇をさへ畫き出し、實在の物件に準じて、盛に分解綜合して事物の性質を思索し研究して、對象たる物其のものにつきての概念をも、建設し建設し破毀し更新し改造し行くことと成り、又、物に屬する屬性の一つと認むべき作用動作事件等にても、更に其の次階の屬性を見出し、屬性を對象として其の次階の屬性の分解と綜合とを行ひて、其の作用動作事件、一括していへば、「事」の概念をも、建設し破毀し更新し改造し行くべき對象とすることと成るが故に、「事」そのものも、廣義の「もの」として思念せらるゝに至り、「もの」といふ語の內に、「事物」を概括して指稱することと迄も成り來り居るなり。――（これは、言語の實際の意義用法につきて、わが國語の「もの」の內に「事」を含め事を指す場合多く、英語の thing も同樣なる類を想起すれば、直ちに體得せらるべきなり。）――かゝる關係は、同一方法を以つて、順次、次階の屬性にも波及し居ること、また自然の事なりとす。〔されど、心的狀態の發展いまだ大ならざる狀態に於いては、かくの如く、無中に有を生ずる思索的生產の「概念」といふものの存在は、認め得べきにあらず。この概念の存在如何といふことは、後文漸次に論述する所に依りて分明なるべけれど、人類にても、兒童又は低能者、もしくは、生活狀態の關係にて、思索上の刺激を以つて常に心性を訓練することなき者にありては、其の存在の曖昧もしくは不完全なる狀態にあること多きは、容易に認め得らるべきものにして、獸畜以下の者に至りては、勿論、完全なる概念を有する能はざること、下文の論定に依りて明白なるべきなり。〕この完全なる概念をつくり得らるゝ場合に於いて、或る屬性――（物より獨立して實在するにあらざる屬性）――を實物より抽き出して思考する作用を、吾人が普通に使用する意味に於いての「抽象作用」とす。他動物、果して斯くの如き抽象作用あるべきか。

他動物に斯くの如き意味に於いての抽象作用ありとは、常識上、まづ許容し得べからざる感あるべし。然れども、上にいへる如く、明に意識して對象を識別し、其の識別を成すべき條件の、或る刺激の特徵たるもの――（すなはち屬性）――につきて、意識的に之を受用して或る「氣分」を起し、又、之につきての選擇取捨に由りて來るべき心的指針としての「意志」をつくる程度にある以上、すなはち「積極的意識作用」を有する階段を成す以上、（緒論四。參照）或る條件の下に抽象作用の行はれ居ることを否定せむとするは、決して成し得べきものにあらず。而して、前章に擧げたる三種の例につきていふも、そが或る條件によりて如何に制限せらるべきものなるかは暫く措き、或る程度の、否、宛然として、頗ぶる複雜なる抽象作用の、確に行はれ居る觀を呈し、明に相當なる抽象作用の存在を徵證し居るを許すべきものといはざらむや。かくて、之を許すべしとする時は、性質の異同訓練の異同に依りて大なる差異こそはありもせめ、大體に於いて、哺乳動物の全部或は一部が、極めて單純なると稍複雜なると、常住なると隨時なるとの別はあるべきも、やはり、或る程度の抽象作用を行ひつゝあるものにあらずとは、何人も主張すべき權能なかるべし。

卵生以下のものに至りては、余は、そが果して如何あるべきかを知らず。たゞ、今の處、全くの臆推として之を言へば、其の內、意志の甚強く、生活法の頗ぶる加工的なるが如きものにありては、上記の三例が、部

分的には、恰も人の如き心的狀態あるかの觀あるも、全體に於いては、大なる邂逅あること明なるが如く、或は種類的に、或は個體的に、積極的意識作用を有するものありて、時に、哺乳動物の右に出づるが如き、或る特殊方面の異常の發展を、境涯的向上本能力の振張より起し來るものあるべき—(實際上、容易く其の例證たるべきものを指點し得べし)—も、大體上、哺乳動物とは或る程度の差異を存すること確なるべく、卵生動物中、すべて、卵に對して、產出後母體が或る責任を充たすものと然らざるものとに依りて——(よし其の行爲は、全く、其の階段に合せての本能的動機に成るにもせよ)——積極的意識作用を營み得らるべき素質のもの、すなはち、馴練其の他の關係に依りて積極的意識作用を營み得らるゝ可能性を有するものと、然らざるもの、すなはち、消極的意識作用に由りてのみ立つものとの、心的階段の限界を成すべきものなるべしと思念せらるゝなり。但し、この事が、全くの臆推にあらずして、相當の辨証的理由を存すること、「人間本能論綱」の發表に依りて知らるべし。

かくて、抽象作用が、人間以外、他動物特に獸畜にも營爲せらるゝことありとすれば、其は、果して如何なる程度のものなるか、上述人間の抽象作用と同一性のものなるか否かを研究せざるべからざること成るべし。何となれば、果して、同一性質のものなりとすれば、其の抽象作用は、之に伴なひて誘起せらるべき或る結果、もしくは、提契的に成立すべき或る必然性と、相需ちて思念せらるべき必然の關係的條件あるべきが故に、(十參照)之を檢按の標準とし、之を執つて獸畜を質す時は、既に、明に心的狀態と生活狀態生活法とを異にし居る以上、必然の勢として、獸畜は人間の如き性質の抽象作用を有せずといふ結論に達すべきこと、下にいふが如し。然れども、抽象作用を以つて目すべきものが、人間が有する完全なる抽象作用、すなはち、世の所謂抽象に限るべき理由なしとすれば、假設的にいふも、程度の異なる、從つて性質に異同ある或る抽象作用ありて、他動物も之を遂行し得るものなりとせむ提案を出す餘裕は十分なるを知るべく、既に上述の如く、或る意味に於いての抽象作用の存在を否むべからざる條理の樹立する以上、又、上にいへる如く(四參照)大體上心的狀態の上階の者が下階の者の本能を兼有する原則的傾向の適用せらるべからむ以上、人間其のものにつきて、完全なる抽象作用の外に、なほ抽象作用といふべきものありや否やを檢按し、之を以つて、抽象作用なかるべからずと認むる獸畜の現象に比較して、正當なる推究を成すことに依りて、論理的に、獸畜が、程度と性質とを別つべき一種の抽象作用を有することを証明し得べき、十分なる可能性あるを知るべきなり。

余が研究の結果に依れば、抽象作用には「直接抽象」(Direct abstraction)と「間接抽象」(Indirect abstraction)との區別ありて、獸畜類は、其の直接抽象を營み得るのみにして、人間の如く、間接抽象を營むこと能はず。この「間接抽象」といふが、世にいふ「抽象作用」に當るにて、この間接抽象を營み得る力が、思索方面に於いて、まづ、人間を他動物より劃別すべき最初の本能力を成すものにして、之に依りて概念作用をも起し、人間の言語の如きものをも成立せしむることと成りしにて、其の言語利用の本能が、間接抽象の本能及び之に依りて起る概念作用と主伴を成して、互充的に其の用を成し、人間を人間らしきものに發展せしめたる本能の、其の半面を成すものなり。人間には、更に、この思索方面に關する本能以外、又、之と互充的に人間を人間らしくせしめたる、他の半面の本能ありて、思索方面に對して、情的方面に關するものとも、言はばいふべく、

覺識方面に關するものとも、言はば言ひつべきものあれど、そは「本能論綱」に論明すべきこと、既にいへるが如し。又「言語利用の本能」といふことにつきては、後章にいふべし。」この故に、此より、其の二種の抽象作用の說明に入りて、人間の人間としての本能が他動物と全く異なることを明にし、兼ねて、獸畜が有する抽象作用の性質を明にし、獸畜の永恒に人間の如き進化を成し得べからざる所以を指示し、過去に於いて進化の徑路を異にせざるべからざりし所以を發露せむとす。もし、其の余が論究にして大過なきを得たらむには、現今行はるゝが如き人獸一元論、すなはち、人獸一系分枝論が、愼密なる反省を以つて再考せらるべき必要あるを見るべく、少くとも、學問上の思想として、或る範圍まで其の緊縛を緩和せざるを得ざるべきものなるを見るべし。

八

さて、余がいふ直接抽象とは如何、間接抽象とは如何といふことを言はむに、まづ、抽象的思念の會得につきて、之を兒童に徵せむに、兒童に事物を敎ふるには、概して實物的示敎を要とし、抽象的の知識を與へむことは、成るべく回避せられざるべからず。抽象的の知識を授くとも、殆ど直覺的に事物を會得せしむるに近き符徵的示敎を以つてすべきものにして、純然たる抽象的の示敎、況して、複雜なる抽象的思想の、曲折したる辨証に需つが如きものを以つてすれば、特別なる天才ならむ外、決して解し得べからざることを見るべし。やゝ低能なる者、もしくは、學問又は實際の事に當りて思考作用を訓練し居ることなき者にありては、如何に成年を超えたりとも、兒童と同一もしくは五十步百步の間にありて、すべてに於いて、抽象的の知識の了解せられ難き傾向あるべく、よし、相當に思索上の訓練ありて十分に抽象的知識の會得に堪ふべきものなりとも、注意の集注を欠く時にありては、當然に會得し行べきことをも會得し難きこと多かるべし。これ、何の故ぞといへば、兒童は心的狀態いまだ十分に發展せざるが故に、低能者は心的狀態の低級なるが故に、訓練なき者は、其の方面の心的狀態、慣性的に委靡してよく活動することなきが故に、斯くの如くなるものにして、要するに、低劣なる者は、完全なる抽象作用を營み難きが故に、其の營み難き方面の知識の示敎を咀嚼することも、また困難なるを以つてにして、低劣ならざる者の、思索に心を馴らす者にても、注意か集注せられざる時は、其の方への心的運動、一時低劣の境にあるが故なり。すべて、人の得たる知識——(知識は、實物示敎の場合の外、全く抽象的のものにして、實物の示敎なりとも、そが嚴格なる意味に於いての知識なる以上、其の大部分が抽象的のものなるは明なり)——を受け入るゝは、我がみづからにて其の知識を建設するより易きものなれば、人の示敎を受くるに、なほ會得し難しとすれば——(注意集注に關する場合を除き)——みづから之をつくり出さむことの難かるべきは、論なかるべきなり。

今、かゝる者が、如何に、事物を自發的に會得するかを考ふべし。かゝる者の多くは、直覺直感に訴ふること、勿論多かるべし。然れども、其の直覺直感が、たゞ反射的に之を得て、消極的の一種の氣分をのみつくるかといへば、決して然らず。彼等は、盛に、良否の選擇を成し、好惡の選擇を成し、去就の選擇を成し、明に積極的作用に依りて、稍高級なる氣分と意味とを樹立せしむるのみならず、其の間に、屢、內省的感得に因る

思索作用生起の端緒を發露しつゝあるなり。(緒論四參照)而して、其の選擇上の與材と成るものは、殆ど皆、實物的なる對象の或る屬性の刺激にして、其の選擇作用は、實に、其の刺激より來る「反應的感得」なること明なり。(同上參照)既に或る屬性の刺激に依りて反應的感得を成すとすれば、其の反應的感得は、直ちに屬性の意識的認得を遂行し居るものと認めざるを得ざるものなるが故に、――(抽象するにつきての氣分は、無意識的なると、有意識的なるとの場合あるべけれど)――兎にも角にも、或る程度の屬性の抽象作用を成し居ること明なりといふべし。人間の胎兒の胎内に於ける形體上の發展につきての階段的、順序が、低級なる動物狀態より高級なる動物狀態に移動するに似たる連鎖を存するを以つて、人間が、下層動物の狀態より最高動物の狀態としての人間に迄進化したりし徵証とすべしとすれば、之を逆に、兒童の順次に向上し來る心的狀態の或る樣式を取つて、――(此は、漸次に進行して完全なる人と成るべく、彼は、自己の限定せられたる範圍の頂點を超ゆること能はざるが故に、同一程度と見ゆる場合にも、混同すべからざる差異の横たはるを條件とすべきこと、恰も、同じ人間の内にても、後日大に發展すべき才智もしくは技能を遺傳的に享有する者と然らざる者とが同一級の小學生徒たるに方つて、殆ど差異なき成績を示すことあるも、よく注意して物色する時は、當然に存在すべき或る特徵の潛伏もしくは發露し居るを認め得べきものなるに比すべき關係を想うて、大に警戒する所あるべきは勿論なれど)――人間以下の他動物の心的狀態の樣式に比擬し得べきものあるは、疑ふべきにあらざるべし。こゝに於いて、上にいへるが如く、他動物中の抽象作用の存在を認むべきものと、兒童等のこゝに逃ぶるが如き心的作用とを比擬して、ほぼ類似の抽象作用を有するものなりとせむこと、特別なる反証を見出さざらむ以上、暫く、正當なる認定として許さるべきものなるべし。(其の間の心的差異につきては、聰明なる兒童と、老熟にして平凡、或は平凡以下なる大人との心的狀態の比較に於いて、種々の條件上より互に長短の點あるに似たるものあらむこと、特に注意せらるべき點なるべし。)

すべて、かゝる程度の心的狀態に於いて行はるゝ、抽象作用は、全く、對象の屬性より受くる刺激を直覺的に感得する心理現象なるを以つて、有意識的に、すなはち、自覺的に其の心理現象をつくる場合にても、其の對象と直面して、其の刺激の屬性を注意して之を感得し、或は他の對象と比較して屬性の異同を――(勿論、「屬性」といふ概念を持してにはあらず)――直覺的に感得するものなるが故に、普通にいふ抽象作用、すなはち、上にいへるが如き、或る事物の概念をつくり得る場合に於いて、或る屬性を對象の物件より抽出して思考する作用とは同じからず。これ、すなはち、「直接抽象」にて、之を直接といふは、對象物件より直接に其の屬性を抽象するが故にして、下にいふ間接抽象の作用、すなはち、間接的關係を意味する抽象作用――(主觀がつくる對象物件の影像より、其の屬性を抽象する抽象作用なること、下にいふが如し)――と對照せしむる爲なるなり。

既にいへる如く、上階の者が下階の者の能力を併有する一種の原則的傾向ある時は、かゝる抽象作用は、全く成熟したる人間の、完全なる抽象作用を營み得る者の上にも、對象との相關的對象の上に起ることあるべきにて、又、實にこれあるなり。例へば、埃及、すめりや、あつしりあ等の象形文字、もしくは晉符文字の全く世に忘れられたりしものを、或る手懸りより工夫して、幾千年の後に讀み解きし人はあれども、普通人の場合

には、既に英語などにて羅馬字に馴れし人の、始めて獨逸文字に接したるが如き場合にて、大に類推の便宜ある時にても、其の文字中の或るもの、又は、其の草書體の文字を見ては、或る程度の異同をば直ちに感得すべけれど、特別の工夫を加へて思考するか、異同につきての或る説明に接したる後にあらざれば、正確に之を了解すること能はざるべし。況して、曾て聞見したることなき梵字もしくは土耳古文字にて書きたる書籍を始めて披見するものとせむか、漠然たる或る印象をばつくり得べけれど、其の異形の文字間の區別を啓發することだに、容易く爲能はざるを思ふべきなり。更に、其の梵字と土耳古文字とを對照するとせむか。其の差異あることをば直ちに感得し得べけれど、如何に違ふかを會得し説明すること能はざるべく、一度、其の實物より離れたりとせば、其の實見したる感得の印象を其のまゝに再起せしむることだに能はざるべく、殆ど忘れたる夢の如く、范として、たゞ異樣の文字どもなりきといふ印象をのみ存すべきなり。然れども、一度、其の分解的の説明、すなはち、其の字形の屬性たるべきものの説明に接するか、或は自己の工夫にて特別なる勞苦を積み、之を了得するに至りなば、――（いづれにせよ、其の文字の屬性につきて抽象作用に成功して其の結果の概念をつくることを得むには）――其の文字につきての明確なる印象を、其の書冊と全く離隔したる場合に於いても、わが思念の力に依りて現出し、之を思索するを得べきなり。

この、同じ文字を對象としながら、一つの場合には、（甲）其の對象より直感的に或る感得を成すに止るが故に、之を離れては、屬性の明確なる印象を存すること能はず、たゞ對象物件に觸れて其の刺激を器械的に感受するものとして、自然に感じ得らるゝ丈の區別を知るのみにて、今一つの場合には、（乙）完全なる抽象作用――（勿論、其の思索の形式の完全をいふにて、思念内容の完不完をいふにあらず）――を成して其の概念をつくるに依り、明確なる印象を存して、對象物件を離れても、よく、其の屬性の概念によりて、其の物の概念をつくることを得べきに注意すべし。文字の例のみならず、すべての事物につきて、印象の强弱より起る記憶の强弱以外、こゝにいふが如き、會得上の明確不明確より來る印象上の性質が、二つの系統を成して、思索作用と抱合し、常に心界に出沒して、人の種々なる思想を成し居るは、容易に認められ得べきなり。

この明確なる印象を存すると否とは、會得上の明確不明確を指すものにして、臆念の强弱に由る記憶の印象如何をいふにはあらず。記憶が、會得上明確なる印象の下におのづから强く、會得上不明確なる印象の下におのづから弱きことと成るは事實なれど、或る感得を其のまゝに心中に再現する心的現象なる記憶は、主として、臆念（すなはち、印象する主觀の念力）如何にあるものにして、臆念の强弱を示す記憶の明確不明確は、直接にこゝに關與するものにあらざれば、今説明する會得上の明確不明確より來る印象上の性質の區別とは混ずべきものにあらず。記憶、既に、感得其のまゝの再現なる以上、（甲）の場合にても、或る關係より對象の强き印象を起す場合には、其の對象たる物件の記憶を其のまゝ念頭に存し得べきが故に、――（上文の如く複雜なるものを對象とする例にては、其の對象の明確なる會得なくしては、明確なる印象をつくり難けれども、然らざる場合には、直感的の印象を其のまゝに維持して念頭に再現せしむることを得べきこと、例へば、梵字につきて何の會得なきが故に其の字形上の屬性を解せざりとも、護符等に於けるが如き一二字の簡單なるものならむには、不明確なる印象を、其のまゝに其の字形の强き印象として心裏に保つことに依りて

其のまゝに想起し得べきが如し）――事實上は、實相に觸れたる場合ならずとも、之に觸れたる場合に準じて、其の不明確の屬性を念出するを得ることあるべく、かゝる場合の心的狀態にては、なほ、其の實相に觸れ居ると同一に、對象物件に觸れ居る關係の思念性質を有するものとして認むべきものなるべし。

この甲は、すなはち直接抽象作用にして、乙は、すなはち間接抽象作用なり。間接抽象といふは、思索上、其の對象たるべきものに依りて主觀の思考力が起す、分析綜合の心的作用を以つて、髮髴の間に、一種想像的の潤色を、其の實在的の對象に加へて、之を影像化したるものと成し、其の實際の對象を注視しながらも、其の影像化したる心的所產の對象より其の屬性として感得思念せらるゝものを抽象する抽象なるが故に、其の抽象は、實在的の對象より直接に抽出せらるゝにあらずして、其の實在的の對象よりは間接に、其につきての主觀的影像より抽出せられたるものなるに由りていふなり。この抽象作用、すなはち普通に抽象作用といふものにつきて、かゝる說明を與へ、かゝる名目を加ふるは、一見、好奇にして迂闊の想像を逞うするが如き觀を成すことあるべけれど、上文にいへる如く、事實上、主體を離れたる屬性の實在することなく、屬性を離れたる主體の實在することなきにかゝはらず、――（よし、客觀的に其の對象を了得すべき目的にして、又、其進步的の思索法なるにもせよ）――實在せざる「屬性」の存在を承認し、想像的加工的に之を取捨するものなるが故に、其の主體も、また同時に想像化せられたるものと成り、自然に影像化したる心的所產の對象と成り了るものなるを以つて、其の實在の物件に直面し居ると否とを問はず、結局、實在の對象よりは間接に、其の屬性を抽象する作用を成すことと成るなれば、其の實際の性質を發揮して眞理を提唱せむとする以上、勢、斯くの如くせざるを得ざるものなり。況んや、この間接抽象の意味は、たゞ空漠たる眞理呼はりをして直を賣らむが爲ならずして、當面の研究上、絕對に必要なるものとして、其の意味中に、人間の他動物に對する特異を蔽る、萬古の秘密を藏すること、後章に說く如くにして、之を離れては、人間の本能力を了得すべき方法あることなきをや。今順次に、直接抽象時代より間接抽象作用と概念作用との展開する史的關係を論述し、其が人間たる所以の第一の本能力たる所以を明かにし行かむとす。

九

人獸が、果して、普通の意味に於いての一元なりや否やを問はず、人間が、生理的にも心理的にも、低級の狀態より漸々高級の狀態に進みて、人間の人間としての地步を占むることと成りしは、言ふ迄もなきことにして、少くとも、今の人間の如き程度に達せざりし始原人が、獸畜の然るが如く、間接抽象を有せず概念作用を有せざる狀態にありしは、異論なかるべきことなるが、――（なほ、この事は後にいふを見るべし）――間接抽象を起すべき前驅として、上にいへるが如き直接抽象が、其の間に行はれたりしこと、上に述べたる所に依りて明なるべし。之に依りて、其の直接抽象時代を始原人の世とし、間接抽象を有するに至れりし時代以下を現樣人の世とすべし。然れども、間接抽象を起すに至りても、其の發展には、必ず順序あるべきにて、下にいふが如く、言語の進化と伴なはずしては、十分なる境涯に達すまじきものなるを以つて、勢、其の「現樣人の世」を別つて、また、過渡期と完成期とに區別せざるべきことと成るが故に、其の時代は、又「前紀現樣人の世」「後

紀現樣人の世」とすべきなり。この「後紀現樣人の世」は、すなはち、全く、今の人間と本質上の思索力の價値を同一視すべき人間時代なりとす。

勿論、正確に一致するものとは言ひ難けれど、余が大體の推定を加ふる所に依れば、この現樣人の世は、大體、上に言へる地質學上の第四紀に當るもの、すなはち、氷河時代頃よりの事と考ふべきものなるべし。何となれば、氷河時代が、ほゞ考古學者の舊石器時代に當り、其の舊石器時代に於いて畫像彫刻の痕跡を十分に遺留する以上、その畫像彫刻の類は、或る程度の概念作用の發展なくして成し得らるべきものならざるを以つて、其の時代に於いて或る程度の概念作用の發展し居りしこと明なればなり。而して、其の現樣人の前紀時代は、正に舊石器時代に當り、其の後紀時代は、また正に、新石器時代以下に當るべし。これ、舊新石器時代の間の遺留物の發展上の差異を引勘すると共に、人間的言語の發展の極めて古かりしこと下にいふが如くにして、間接抽象作用と提携して相起る概念作用の十分なる發展は、又、實に、之に適應して互に主伴を成す言語の發展と相伴なふものなるべきを、取り合せて考索すれば、斯くの如くなりとせざるを得ざるが故なり。

直接抽象の事につきては、既にいへる所なるが、こゝに今、極めて原始的狀態の豫想の下に、其の直接抽象の時代を考索すべし。凡そ、かゝる時代に方つて、或る物件の屬性につき、わが五感が或る外面の刺激を感得せむとするや、――（そが、特に我が身に衝突して、我を動搖せしめ、もしくは痛痒もしくは爽快を感せしむる場合の外）――我に、進んで就く氣分あるにあらざれば、所謂「見れども見えず、聞けども聽えず」の理にて、其の屬性を識別せむとするが如きこと起るべきものにあらざれば、苟くも、屬性の或る刺激に依りて物件の異同を感得する事の、積極的意識作用として起る場合ならむ以上、我よりも之に就き之を注意する進出の氣分あること明なり。されば、斯くの如くにして、正確なる直接抽象は始めて成立するを得たりしこと、亦明なり。

直接抽象といふべきもののいまだ起らざりし時代なりとも、動物がいまだ無意識の狀態なるべきを想像し得べき反射作用階段の時に於いても、物に觸れ物に刺激せられて反射作用を起すらむ以上、始めより、全く外物の區別無しといふべかざるが故に、或る意味に於いての對象の區別は成し得たりしものと言はざるべからざることと成れども、其の區別し得る範圍は極めて狹少に、全く刺激の觸感に依るのみにして、其のものとしての生活の必需生存の必要の「反射的本能」に依り（緒論四參照）其の身内に必然に起る、積極もしくは消極の、必要相應の本能的發動と、其の積極もしくは消極の必要を充實せしむべき對象との間の、自然的吸引もしくは自然的回避の呼吸發作を營むに過ぎざるものと見る外なかるべし。それより一歩を進めたるものとすれば、「反射的感應」の時代にて、（同上參照）極めて低級なる意識狀態に入ると共に、其相當に對象を認得することはありしなるべけれど、たゞ直感的に體得する、階段相當の本能力に依る識別にて、いまだ、屬性につきての――（意識的の）――注意を積極的に惹起するに及ばざるものなりしなるべきが故に、其の識別する對象も、反射作用時代のものの區別範圍に比しては、やゝ廣がるべきものにはあれど、やはり、大體上は、生活に對する必需生存に對する必要につきての吸引回避の發作區域に止るべきなり。然れども、如何に低級なればとて、兎も角も意識的に外物を感得すべき形勢と成らむには、また、生活生存の必要より自然に或る

對象を吸引し、もしくは回避することが、兎も角も意識的に成り行くことと成るらむには、自然に注意を外界の物象に惹き、或る情を以つて、意識的に應接送迎することと成るは、境涯に應じたる向上本能のやゝ強からむ以上、自然に起るべきことなるを以つて、かゝる方面に向上的歩調を向くべき遺傳的慣性をつくることと成るべきも、亦、自然の勢なり。この傾向が、代を逐うて漸々進歩する時は、自然に、物象につきて、其の對象たるべきものの屬性的部分を注目して、在來殆ど無意識的に意識したりし物象の區別をば、必要に應じて意識的に識別せむと試むることと成るべく、これ、實に、直接抽象を起す向上運動の發端なりしなるべし。斯くの如くにして更に歩を進むる間「反應的感得作用」より「積極的意識作用」と成り、(同上參照)時代は推移して、正に直接抽象の時期に入ることと成れりしなりけり。

然れども、要するに、直接抽象にありては、たゞ實物實相につきて、其の或る屬性の刺激あるを認むるのみのものにして、主體屬性を區別して、之を別途に置き、其の屬性のみを一種の品性として考察するが如きことは、いまだ成し得べからざることなるが、かくて、其の注意力が、漸々進歩して、遺傳的に其の趨向を疊加し、時代を重ね行く時は、今の人ならむには、其の屬性を分析綜合して考ふる場合をば、直感的に、或は、やゝ思ひを凝らしたる直感的會得ともいふべからむ樣に、感得することと成りたるべきは、疑ふべきにあらず。何となれば、既にいへるが如く、實在的には、主體を離れたる屬性なく、屬性を離れたる主體なきものなるが故に、之を別々にして認むることこそ成し難けれ、主體の存在を認むる方より、存在するものを主體すなはち物と認むると共に、わが視覺聽覺嗅覺味覺觸覺としての或る刺激を感ずることより、まづ其の或る屬性のみに注意を向くることも起り、且つ、積極的意識作用の上の長き經驗より、自然、思索的ならざる範圍にはあれど、直感的ながらも、異同の屬性より起る物象の分類的氣分を受得することと成るは、かゝる向上的歩程の者の境涯相當、十分なる可能性あるべきものなれば、こゝに、この二つの傾向の結合する所、屬性の概念より樹立せざる、屬性と主體とを、着かず離れずの間に置きながら、其の屬性の刺激よりの、物象區別の直感的思索ともいはばいふべき、一種の思慮の運用を開始することと成るべし。もし、かゝること無しとすれば、間接抽象の興起するに至るべき動機の存在は、認むべき樣なかるべきなり。されば、事實に於いて、間接抽象の展開を人間に存し居る以上、其の豫後的作用の先驅として、かゝることの存在せしを確認せざるを得ざるべきものなりとす。これ、實に、心的現象につきての直接抽象時代の頂點と認むべきものなり。

すべて、發動的の意識作用ある者にありては、精力の集る所、屢、本能的に上級階段に屬すべき或る作用の實行に就く可能性ありて、其が、境涯的向上本能作用に依りて行はるべきものなること、今の人間の上に於いて、すべての向上的歩程の上に、着手的の實行が、多くは、理解に先立つて行はれ、而る後、理解に依りて更に之を反省改造する順序を以つて、よく展開せしめられ、よく完備せしめらるゝを致すことの、毎に認め得らるゝより、推知するに堪ふべきものにして、理解すなはち思索的に會得することの不可能性を豫想する、この時代に於いて、勿論理解といふことは成し得べからざることなれど、其の境涯不相當に一歩を進めたる特殊の行動を其の傾向に取り得る場合の存在したらむことは、想像するに難からず。これ、間接抽象を起すことに依りて、其の時代の頂點的心理現象を反省改造して、發動的に其の境涯を新にすることを、永久に成し遂げざりし

ものと認むべき動物中に於いて、事に觸れ習ひに動かされて、驚くべき發達の心的現象あるに似たる作用を或る方面にあらはし、部分的には庸人を凌ぐが如き感あらしむる動作に訴ふることある所以にして、斯くの如きは、實に、境涯的向上本能が促す特殊狀態に依るものなるを想ふべきなり。上に擧げたる「象」「びーヅあー」「翁丸」の如きは、皆、其の例なりといふべし。之を、間接抽象作用を有する人間の思索作用と同一視すべからざるは、次きにいふが如く、間接抽象作用を有する思索、一度發動して心境を照らす時は、必然に心的狀態の變化を起し、加工的生活を營むに至るべき必然必至の條理あるも、他動物には、決して、斯くの如き徵候の存在を認めざるが故なり。

余が、人獸の一系分枝論の必しも眞理ならざるを思念するは、生物、特に動物が、其の最極の原始に於いて、殆ど皆一元――（一類一樣の單位）――は出づるとするは、今に於いて殆ど信せざるを得ざるものと思はるゝが故に、生物の進化退化と種類的分裂とが、或る系統圖を成し得べき關係に立ちて、或る意味に於いて共一なる系線を成しつべきものなるを疑ひ得まじきを許すべきを認むるなれど、よし、形體上生理上の性質等より如何に系統的連絡を認め得べきにもせよ、古生物學上の現象が、如何に發展消長の時代的關係を示すにもせよ、此等は、解釋の方針次第にて、（甲）樹式系統が示す如き、其の最極の始原を成す根幹より始め、順次に分裂する關係に於いて其々の、條枝より條枝と、相次いで順次に分裂したるものとし、條枝毎に一種元に出でたりしものなりといふ主張をも試み得べきと共に、（乙）其の最極の始原を成す一種元中、始めより或る程度の差異を存し、時代及び還境の關係上、由來並行的に、ほゞ同一境涯を經來りしものにして、其の時代環境の同一的境涯をつくりし關係上、形態と生理狀態と、從つて、――（或る程度以上に達して有意識的のものとなれば）――心理狀態迄、大體、同一と見なば見るべき樣にありしものなれど、其の各階段に應ずる境涯的向上本能力は其々に異同ありて、――（現在の立脚地より見たる）――終末に於いて、すなはち、其の歸着點に於いて、大なる相違を成すに到れるものとせむも、またよく唱道し得らるべき條理あるにて、余は、勿論、其の種類に依り其の階段に依りて、（甲）の解釋法に依るべきものと、（乙）の解釋法に依るべきものとの存在すべきを信ずるものなるが、よし、如何ばかり近似性を有する關係が相互の間にありとするも、植物と動物とが、全くの同一物より非並行的に分枝したりとせむこと、又、植物中の餘りに懸隔あるもの、動物中の餘りに懸隔あるものの間に、同樣の解釋を加へむことは、理性上頗ぶる從ひ難かるべきものにして、近似性あるものは、是非とも一系線的に統括して、各時代の一種元より分枝的に派出したるものと思考すべしといふ不可抗的の權威あるべきにあらざるべきは、理論的にも指摘し得べきことなれど、實際上、手近き例として、今の世上の人の間にも、他人の空似もあれば、親子兄弟の間にて、容貌膚色長短肥瘦等の體軀上の事にても、技能才幹情緒其の他の心的現象にても、甚しき差異ありて、決して一律に推すべからざるものあるを、たゞ見証し得らるゝ形體心情等の現象上の異同に依りて分類することとして系統圖をつくらむには、實際の史的關係としての系統とは、大なる相違を起すべきに徵しても、大に考慮せらるべきものなること明なりといふべく、其等は兎まれ角もあれ、動物中、上記の如く、明に庸人を凌く程の心的作用を行爲の上にあらはして、其の境涯の頂點的活動を成すものあるにかゝはらず、其等が、決して、間接抽象を營みて盛に概念作

用を起し、人間の如き加工的生活を營む過渡時代をだにつくり得ることなく、類人猿の最人間に近き動作を成すものといへども、亦固より然るのみならず、この直接抽象の頂點的活動を成すことも、必しも、形體生理等の人間に近き猿類に於いて、比較的多く且高く、人間に遠き形體生理の者程、少く且低きには限らざることに徴するも、所謂「思ひ半ばに過ぐる」ものあるを知るべし。但し、象犬等の場合には、人間に接近し自然誘導開發せしめらることあるに依るべしといふ人あらむも、其の者自身に之に應化する資質あるにあらざれば、かくあり得べきことにもあらざれば、――（況して、猿類にも、人が訓練し試驗する場合には同一の關係あるも、いまだ必しも上例を凌ぐ例証を成さざるをや）――そは、不通の論と成るべし。更に知能の問題のみならず、情的方面に於いて、人間に遠き卵生の鳥類にして、勿論部分的なれど、殆ど人間に近き高尚なる情致を有するものあるは、人の知る所にして、こゝにいへる所と共に、頭腦の構造に伴なふ生理的現象が、必しも心的現象の如何を限定するものとのみいふべからざる徴証を成すを思ふべし。――（此等情致に關することは、多くこゝにいふべきことならねば、「人間本能論綱」に於いて論及することとすべし。）――之を要するに、次ぎに說く如き間接抽象より來る概念作用より入りて加工的生活を營むに至れる人間が、猿類と分枝的の一種元より出でたるにはあらずして、其の形體生理の類似は、現樣人に到る迄の生活狀態の近似したるに起れりしにて、動物の最極の始原時代より、並行的關係を持して、種々の階段を進化的に經來れりしものなること、小くとも、人間に於いて眞理なりとする假定を成すべきものなることを、余は、今日に於いて確信し居るなり。然れども、よく研究したらむには、哺乳動物狀態以前の時代に於いては、或は、人間と成るべき原種が、全く他動物の原種中の一員に加ふべきものなりしを認むる必要あらむも、測るべからざるべし。さばれ、如何に讓步すればとて、哺乳動物時代に入りたる後は、全く並行的に進化し來りしものなるべきをさへ退讓すべき爵のあらむとは、萬一の豫想をだにもすること能はざるなり。余は、自家の研究より主持し得らるべきを信ずる、人間本位の心的現象より推していふなれば、其の主持する所を覆さるゝに至らざらむ以上、此等の見解の決して誤りならざるべき信念に立つ者なるが、自家の根據地より起す推定を以つて、遠く知識上の領野外に論及することの、やゝ不謹愼なるを知らざるにはあらざれども、學界獻芹の情、他山の石として提案すべきに似たるが故に、特にこゝに註記して、物心二系の進化研究につきて進化學者の覆考を促さむとはするなり。君子の示敎に依りて見解の誤りなるを知らむには、過ちを謝するに吝ならざるべきなり。

一〇

間接抽象は如何にして起れるか。既にいへるが如く、實在的には、主體を離れたる屬性なく、屬性を離れたる主體なきが故に、直接抽象時代に於いては、確然と、之を別々に認むることは成し得難かるべきものなれど、主體の存在を認むる方より、存在する物象を主體すなはち「物」と認むると共に、わが感覺と成るべき或る刺激、例へば、眼を射る光、鼻を衝く香、飲食するにつけての味ひ等を感受するより、其刺激する方を辿りておのづから注意せざるを得ざる或る屬性――（かゝる時、其の香其の味ひが、主體の全部と同一ならざるは、勿論實感的に認得せらるべきものなれば）「光」「香」などは、概念作用の自由なる時代には、別に一種の主體とし

て考へられ得べきは論なけれど、始原時代に於いては、必ずまづ、屬性的にのみ認められ來りたりしものなるべきが故に、こゝに例示するなり」――のみに注意を向くることも起り、直感的ながらも、異同ある種々の屬性より來る、物象の分類的氣分を感得興起せしむることとも成り、其の結果は、屬性と主體とを、着かず離れずの間に置きながら、其の屬性の刺激に依りて其の物象と屬性とを區別する、一種直感的の思索とも假りにいふべき、思慮の運用を開始することと成るべき必然性を有すること、――（ほゞ斯くの如きことが、兒童の心理現象及び動物中上にいへるが如き異能をあらはす特別の狀態等につきて、確認せざるを得ざるべき以上）――境涯的本能作用の强かるべき者の上に、誰か、存在すべからずといはむや。

着かず離れずの狀態なりとも、既に、主體と屬性とが、半、分離的に思念せられ、實在の物象につきて實際的に分類的差別を致す氣分既に興起したるものとすれば、自然、不完全ながらも、わが心狀の內省的觀察起り來りて、之と外界の對象とを結合して思慮することと成るより、始めの內は、程度こそ低かるべけれ、自覺的に思索する氣分をつくり得るに至るべき時機の到來することは、深く對象に注意することの進み行かむ以上、必然必至の勢なるべし。

一度、斯くの如き動機が利用せられつゝ行く間には、對象と對象につきて心中につくるその影像とが、對照して思念せらるゝ事と成る時代の到來すべきこと、これ、避くべからざる自然の結果なるべし。こゝに至れば、其の者は、既に、知らず／＼、或る程度に於いての概念を、わが心中に建設したるにて、其の心中の影像はすなはち概念、其をつくる心的作用はすなはち概念作用なり。元來「概念」といふ語は、英語 concept の譯語にて、其の con は「一緒に」の義、cept は「受け取る」の義にて、其の語義よりすれば、（甲）若干の屬性を一つに集めて對象の思念をつくるべき樣に、其の外界の物を心內に受け取る義として起れる語とも取らるべく、（乙）同種類に屬するものを一つにしてわが心に一つの物として受け取る義とも取らるべきものなれど、其の語義は（甲）に起りしものなるを承認し得べく、――（概念とて「物」の概念のみには限らず、屬性の思念も、間接抽象作用にて獨立的に心中に思念せらるゝことと成れば、やはり概念なることは、下にいふが如し）――始めに譯出したる人も、其の心にて「屬性に依りて概括したる思念」の心得にて此の譯語を立てたるものなるべけれど、其の語義の史的由來を離れて「概念」其のものの成立發展の史的由來よりいへば、寧ろ、（乙）義の方通り易かるべきものにて、對象につきての概念の起るは、全く、種類の氣分に依りて助長せられたるより成れりしものにて、或る同一性質のものどもを、其の性質の思念標準にて概括的に思考するものとすれば、其の思念內容は、すでに或る實物其のものの純粹なる思念にはあらずして、同一性質のものを一つにしたる特別の心的產物として立ち、眞の對象たる實物とは、自然に其の實狀を異にすることと成り居るなり。こゝに於いて、其の實物を離れたる思念、すなはち――（目的は實物の會得にあるにもせよ）――たゞの實物の感得にはあらで、明に、わが特製したるものなる一種の影像は、對象より全く獨立に樹立し得ることと成るに至れるを知るべし。一度、この、種類に伴なふ物の概念が特製せらるゝことと成れば、之と同時に、着かず離れずに實相の刺激性として受け取れる屬性も、大小長短方圓黑白、何にても、或る屬性が異種の物の內に共通なることを、實驗的に感得して、暗に屬性の異同の分類的氣分の出來居る位のものなりしを轉じて、物の種類概念と提挈して、同時に屬性の種

類概念を成すことと成り、之と表裏して、必しも、種類といふ氣分を持續せざる其の屬性の概念をもつくることとは成れりしにて、この屬性の概念捻出の作用は、すなはち、間接抽象作用の成立なり。直接抽象は、こゝに至つて何時しかに、間接抽象と脫化し了りたりしなり。

こゝに說ける所にては、或る物或る屬性の――（屬性には然らざる場合あること、こゝにもいへる如くなれど）――概念は、殆ど全く、必然に種類の概念と表裏することを條件とすべきに聞ゆべけれど、そは概念發展の最初の現象、又、一般的の現象なるのみにて、思索いよ〳〵進展する時代と成りては、この種類的概念より推移して種類を成さざる個體の概念を成すことあり。これは、或る種類中の小種類を成すもの、すなはち、或る屬性に依りて向小的に制限せられたる概念をも、又、或る種類どもを取り集めて大種類を成せるもの、すなはち、或る種類のものと他の種類のものとが、其の共通の屬性に依りて統合せられたる向大的擴張に依りて成れる概念をもつくり得べきこと、例へば「馬」の概念より、之を向小的に制限したる「雄馬」「雌馬」「老馬」「白馬」等の或る概念をつくり、又、他の家畜と共通性を成す屬性に依りて統合せられたる向大的の擴張に依りて「家畜」といふ概念をつくり、或は更に擴張したる「動物」といふ概念をつくるが如きことあるべく、此等は、なほ、明に種類の概念と提携するものと成り居れど、――（こゝに混同を避くる爲に一言せむに、種類概念といへば、何處迄も、分類的氣分の或る種類の階段的の概念にして、其の種類を系統的に思ひ浮べ、或る物の概念といへば、其の種類を成す性質の概念にして、其の物を性質的に思ひ浮ぶるなるが、そは、形影相從ふ如く、互に連想せらるゝものなるをいふなり）――更に之を極端に持ち行く時は、「白馬」といふ種類概念の內に、わが飼ふ或る一匹の乘馬、又「母」といふ種類の概念の內に、特別の個體なるわが母を、具體的ならずして、抽象的に其の性質に依りて考ふる概念として立つること――（必しも、他人の飼ふ乘馬他人の母などと暗に對照して隱然たる種類概念をつくり、之に依りてつくれる性質的概念を「我が」にて制限するにはあらずして）――あるに至るべし。これ、層々相重なる種類の建設に慣るゝ時は、或る種類の內にありて同種類の他のものと對照して考へらるべきものは、又、一つの小種類に準せらるべく、從つて其の性質的概念を建設することと成る心理狀態の類推を以つて、或る物につきて、其の屬性を綜合したる性質として思念することに依りて、單一なる實物より抽象せられたる性質上の概念をもつくり得べきが故なり。されば、個體も亦、時に、一種類に準じて思念せらるゝことありと知るべし。又、「日」「月」は、各一つなれども、「日」と「月」と「星」とを對照して考ふる場合には、やはり、同一狀態に、其の屬性を綜合的に考ふることに依りて、其の或る概念を種類を成すものに準じても考へ、性質をあらはす概念としても考へ得らるゝことと成るべく、斯くの如くにして、種類と個體とは、概念建設の上に何の區別ある條件をも成さざることと成り、斯くの如くにして、具體的に物を思念する場合と、この概念といふものとは、每に對照して思念せらるべきことと成り、概念は、或る具體的思念より其の必要なる性質を抽象して思念したるものなりといふ定義を以つて釋明し得らるべきこと成る。

かくて、或る種類中の或る一物を指して其の概念を立て得べき時は、便宜上、其の同種のものの若干數、例へば、二つ三つ四つ五つ等につきても、之を單位に準じて考ふる概念をさへ成し得べきことと成るべし。「二

人の母」「三人の子」「四人」「五匹」「一對」「一ダース」といふ概念を立て得べきが如し。――「複數」といふ屬性概念は、かゝる概念（もしくは其の概念が指す具體思念）の屬性として、感得せらるゝことに依りて建設せらるゝものなり。」――概念既に種類に關係なく思念し得らるゝこと成れば、又、他の一方に、あらゆる物象を統一して考へられたる「大宇宙」といふ具體的思念――（よし、想像の力にてつくるにもせよ、思念作用の性質上、具體的に思念せられ居るものなり）――より、其の性質を抽象し來りて、之を概念化して思考するが如きことをも成し得べきことと成るなり。

概念は、また、其の概念作用の發展に伴なひ、他の一方に於いて、又、種々の發展を成すことと成る。すなはち、人の思念思索の對象と成るものが、外界の物象にのみ限られずして、心中に現象するすべての思想を、內省的に觀察して、之を思念思索することに依りて、其の現象に抽象作用を加へ、以つて種々の概念をつくり得らるべきこと、これなり。此は、外界の對象すら、わが心的作用の潤色に依りてつくりたる影像に依りて、之が概念をつくり間接抽象を行ふことと成れらむ以上、內省的にわが思念として立つものを觀察し、之を其のまゝに認定し、或は抽象して概念とすることの――（動機の熟成する場合に於いて）――勿論自由なり得べき自然性を有するに依るものなるが、この內省の對象と成るべきもののうち、たゞ外界物象の影像たる思念を除き、特に心的現象の內省の對象たるべきものは、文典上の所謂「思想」を成す思念にして、其のうちに、まづ二つの別ちあるを知るべく、其の一つは、（甲）物象と屬性とを結びつけて、相需つて有機的結合ともいふべき樣に、一體的の結合を成す思念をつくるものにして、他の一つは、（乙）物象と物象、もしくは、物象と屬性との上に、更にわが判斷力想像力等をつけ加へ、此等相需つて、有機的結合ともいふべき樣に、一體的の結合を成す思念をつくるものなり。この有機的結合ともいふべき組織を成す思想の成立及び性質の事に關しては、後に至つて說くべけれども、この有機的結合の思想を成すものの內、（甲）を「寫影的思想」といひ、（乙）を「裁定的思想」といふこととすべし。この寫影的思想は、發展甚早かるべきものにして、之を今の言語にてあらはせば「雪白し」「日輝る」「馬草を喰ふ」といふが如きものなれど、原始には、たゞ、具體的にかゝる感得をつくりしものなるべきにて、今の吾人の思想狀態と同一なるものにあらざりしことは、言ふ迄も無かるべし。かゝるものが、――（其のまゝに、種類關係の概念に準じて思考し得らるべきにはあらざれとも）――一度、上述の「我が乘馬」「わが母」「日」「月」「大宇宙」の如き思念が概念化せらるゝと同樣に、其の具體の狀態に對照せらるゝ一種の概念を成すことと成るに及びては、漸く吾人の言語にあらはす思想に近づき來るべき順序に進むなり。かくて又、一度、かゝる思想形の概念を誘起する順序と成る時は、此等の粉本たる外界につきての具體的思念、及び、この心的存在の概念は、相交關して、思考の對象として種々に思念せらるゝことと成ると共に、（乙）の思想も順次に成立し、內省に依りて思考の對象と成ること繁く――（今の言語にていへば、この（乙）の思想は「人は動物なり」「人は動物ならず」といふが如きものにて、之を思考の對象とする場合にも種々あるべけれど、其の思想の結合を良しとか惡しとか考ふるを始とし、或は其の一部分の「人」を、「優れる人」とか「劣れる人」とか直して考ふることもあるべく、或は「動物」を「智惠ある動物」とか「惡しき動物」とかに直して考ふることもあるべく、すべてに於いて如何樣にもあるべし）――更に（甲）の

思想其の他の思念との交渉に依りて大に發達變化することもあるべく、――（例へば、裁定より起して推測想像等の思想とし、今の言語にていへば「日輝るべし」「日輝るならむ」「日輝らむ」に似たるものとするが如し）――やがては、此等の內部に起る構成的成分も、分解的に種々に思念思考せらるゝことと成る順序に進行し、思想形、及び、物象的の思念も、思索其のものも、順次に下にいふが如き樣に展開して、思考狀態の刷新と共に、言語の進化を促成することと成るなり。

なほ、こゝに一言の註記を要するは、この（乙）の思想形が、西人の所謂「斷定」（Judgement）に當るものなれど、Aristoteles 以來の傳統に依りて、西洋の學者は、概して大なる誤解を存し、人の思想形は、この裁定的思想に起り、概念作用も、實に此の思想を以つて始終するが如くに考へ、かゝる思想形を以つて思想及び概念の始めなりとのみ思ひ入り居るが如くなれど、かゝる考へ方は、思想の發展上にも、すべて着手的の實行は、境涯的向上本能の力に依りて、合法的理解に先立ち、後に合法的理解に依りて改造更新せらるゝ順序を蹈むものにして、其の理解が、必ず向上本能の着手的實行に後るべきものなるを注意せず、始原より反省的理論的に思想を發展せしめ來りしものなるが如く、漠然と考へ居る方より來るものにして、殆ど思想言語進化の論に與らざる臆說の敷衍のみ。蓋し、Aristoteles の如き、其の哲理上の思念の成立と表裏する論理的解說を主とする方より、おのづから、思想及び概念の成立を、理窟本位の自己の思想の內省的觀察に引き着けて說けるものにて、辨證的知識の成立、之に關する概念作用の展開等につきての內省觀よりいへば、實に其の說の如きものあらむも、廣く人の思想概念等の事につきて、其の始終を研究せむとするに方つては、斷じて斯くの如く區局せる中心に立てる學說を襲用すべきものにあらず。Aristoteles 說の系統を今日に守つて、其の傳統的崇拜の狂態に甘んずる者は、Darmesteter も正言したる如く、實際の言語につきて之を徵するに、すべて裁定的の思想を表現するに最重要なる繫合辭（Copula verb）が、何れの國語にても存在を意味する作用言（＝Principal verb＝動詞）より轉移し來りたることを示し――（わが國語にては、たゞ轉移したるにはあらざれども、繫合辭すなはち繫合動辭が作用言より起れることにつきて、裁定形が寫影形に後れたりし造語法上の證跡は、更に〳〵鮮明なりとす）――一も例外の順序を示すものなきことに依りて、歸納的に裁定的の思想が寫影的の思想に後れたるべき確實なる結論をつくり得べきものとして、其の徵證的現象の嚴存せるを、如何に說明せむとかする。〔言語のこの現象は、まづ、言語大成以來も、主として寫影的の思想を運用し、特に裁定的氣分を要する時にのみ裁定形を用ゐたる證跡を示すものなれど、たゞに、言語の成立時代以來いまだ曾て裁定形を本位としたる痕跡なきのみならず。現代に於いても、特別なる辨證的思索にのみ沒頭する階段の人の外、事實に於いて、人の思想が、一々理窟を揑ぬる樣にのみ組み立てられざるものなるを內省しても、古今に通じての思想狀態を了知し得べきなり。〕

一一

さて、こゝに上述の概念作用と間接抽象とが、如何に、重大なる心的現象の革命兒たる資格を有したるかを念ふべし。

如何に頂點に達したればとて、直接抽象の範圍を脱せざる程度にありては、よし、主體と屬性とを、半、區分的に思念したりとも、又、直感的思索ともいふべき樣に分類氣分をさへ起したりとも、要するに、其の思念は、結局に於いて、實際の對象に捕はれたる心的現象の區域にあるものたるを免れず。然るに、一度、全く實物と離れたる「屬性」としての間接抽象を成し、全く實物と離れたる概念を成す時は、最早、思索が實際の對象たる實物に捕はれ居るにあらずして、いつしか、わが思念思索にて、對象たる實物を捕へ居ることと成るなり。わが思念の力にて、實際は存在せざる、對象の物件及び其の屬性の影像を建設することと成れるなり。「わが思念思索を對象として、內省的に之を思念思索する場合の如きは、わが建設したる一種心界の影像につきて更に或るものを心界に建設するなり。」而して、思索の自由、すなはち、形式上完全なりと認むべき思索作用がこゝに成立することと成れば、あらゆる方面に亘りて、廣き意味に於いての屬性——（すなはち、必しも嚴格なる客觀現實の屬性ならざる屬性）——の內に入れ得べき種々の屬性を考へ出して、思考上相當に、觀察上相當に、之を取捨消長せしむることと成り、わが心性の力を以つて、對象に具はれりと認むる屬性を任意に分析綜合して、思ふまゝの概念をつくり出さむとすることと成る。固より、直接抽象の時代よりして、對象たる物件より受用する屬性の感得は、思念する主觀に依り、必しも等しからざりしこと論なく、況して、かくの如く、自由にわが心性の力にて對象を思索することと成れば、其の感得狀態は、人に依り場合に依りて、彌々不等なるべき必然性を釀すを以つて、實際に於ける、抽象作用と概念作用との運用は、同じ實物を對象としながらも、甚しき不同を起すことあるべきは、容易く想見すべきなり。

夫れ、間接抽象に依りて成れる屬性は、思念上、既に實物を離れたる一種の屬性、概念作用に依りてつくり出されたる思念すなはち概念は、實物を離れたる一種の主體にして、既に、全く、實際有の影としてつくり出されたる實際無の心的產物なる時は、これ「無」の所に「有」を出したるもの、すなはち、無きものを「有」として建設したることと成るなり。この故に、間接抽象作用と概念作用とは、力そのものとして見て、實に、無中に有を生ずる力の活動なり。況んや、對象と我との關係上、物象にのみ捕はれたりし我は、今は、物象を捕へて、自由にわが思念の俎上に載せ、之を殺活取捨せむとする主權の領有者と成る。外界の物象は、思念の性質上、皆わが心界に入りて心界の臣奴と成り、われをして、わが心のまゝに思念せしめむとするものといふべし。之を以つて、物界としての外物は、固よりいまだわが自由なるにあらざれども、わが心界に於いては、わが思念思索が許す限り、外物は皆わが自由なるべき地位に立つことと成れりしなり。

こゝにいふ所は、他位性質の變化の大體を指示するに過ぎずして、其の實際の自由は、周圍の關係上、いまだ急速に十分なる握取を成し得べきものにあらずと知るべく、又、間接抽象と概念作用と起りてよりも、そが新時代の特徵的中心なりといふのみにて、すべての心理現象、皆、斯くの如くなりといふにはあらず、ほゞ在來のまゝなる直接抽象に依りて直感的に物象を感得することは、勿論普通に行はれしものにて、其等も、自然新しき心的現象に依りて、直接的に或は間接的に、時期相當の影響を受くることと成れるに過ぎざるべきこと、完全なる言語の發展し、學問さへ發達普及し居る今にても、之に比例して相推すべき心的狀態を存するを以つても、知るべきものなりとす。

一度、この心性を有することと成る時は、たゞ其の思想上の變化なるのみならず、そが純正なる加工的の概念、すなはち、一種の理想的概念（＝理想）の生產を促すことと成り、其の結果は、其の理想を實際の上に現出すべき工夫に依りて、加工的の生活を誘起することと成るにて、人間の生活法が、思念思索の狀態と共に、全く獸畜と劃別せらるべきものと成れる權輿は、實に、こゝに存するなり。今、其の順序をいはむに、概念、既に主觀が念起する屬性統括の結果にして、そが人に依り場合に依りて異同あるべき傾向を十分に有し來る時は、同じ對象につきても、人に依り場合に依り屬性の取捨選擇に異同を生ずる思索上の實習を經ることと成るものなるが故に、實地の經驗上、或る要求に由りて任意に或る屬性を附加もしくは刪除したる理想的の概念を生產し得ることと成るは、自然の勢なり。例へば、雨天の後、黏土の窪みたる所に水の久しく滿へられ、其の窪みの深淺に依りて堪へられたる水量に異同ありて、其の異同が之を利用する上に便不便あるとすれば、使用の便宜上、其の自然の窪みが今少し深からむには更に一段の便宜あるべきを感ずれば、其の實際の窪みに、今少し深からむ屬性を有せしむべき理想を起し、其の理想に合ふ概念、すなはち、實際物件の影像の上にわが要求する屬性を附加したる理想上の概念を想起し、其の理想的概念を目標としたる實際を現出せしめむが爲に、之に合ふべき樣に其の地を深め設く工夫をすることと成り、容易く其の目的を達すべし。更に、地上の窪みに滿へたるまゝにて、其の水を其のまゝにて他に移動せしむべき便宜なきより、水を滿へたるまゝにて他に移動せしむべき術もがなと考ふることあるべし。こゝに或る程度の大さなる岩石の窪みに水の滿へられたるを見むにはそのまゝにて他に移動せしむべき便宜の示敎を默契し得べし。されど、如何に力ありとも、岩石は、流石に容易くは動かし難し。こゝに其の重く且つ大なる缺點――（すなはち、不便を感ずる屬性）――の排除せられたらむ理想的概念を畫くことと成るべし。かくて其の理想的概念を充實せしめむことを思念する間に、肉質を去る時は皮質の堅き空洞を淺す大なる果實、例へば瓢類の如きものの乾燥したるを發見することあらむには、其の一面を開き去り、水を汲みて其のまゝに運搬するに堪ふべき理想物件たらしむることを契得し、思ひつきたるまゝの工夫を加へて、一段と滿足すべき境涯に立ち、便利なる器具を得たることと成るべく――（更に年月と工夫とを重ぬる時は、一方には、水を滿ふる窪みより、深き水を滿ふる池をつくりて之を利用する工夫も起るべく、一方には、適當なる大さの樹を適宜に切り之を穿ちたる水器の利用も起り、他の器具の發展と共に改良に改良を重ぬれば、桶の製造をも見る時代も來るなり）――又、既に水器を造り得て水を汲み水を搬び得べしとすれば、深き穴もしくは絶壁の下なる水の遠くして手の屆かざるを汲むべき手段もがなと思念するにつけ、水器の其の水に達せむ理想を畫き居る間には、細長き樹もしくは竹を認め、之を附加したる屬性を有する理想的概念をつくり、之に合ふべき樣の工夫をするか、又は、蔓にすがりて絶壁を攀ぢ上り或は下る場合より、指示を得て、水器に斯かるものの附着し居らむ理想的の概念を畫き、其の概念に合ふべき樣に長き蔓を水器に着くる工夫をして、其の目的を達することあるべし。――（樹木の皮の纖維を以つて繩を造ることを成し得ることの後ならむには、水器に繩を附着せしむることに依りて完全なる狀態に導かるゝことも起るべきなり。）――又、雨雪を凌ぐ爲に、おのづから、繁茂したる樹木の下に立つことあれば、其の類推より、上に雨雪を障ふべきものを置く屬性の理想を住所の上に畫き、穴居もしくは巢の如き狹隘なる小屋に接みたる境涯を移して、之

を廣くしてよく雨雪を凌ぐべきもの とする理想の概念に引き着けたる工夫の結果、樹を柱とし上に樹枝艸幹樹皮等を適度に排列し、周圍をも類似のものにて圍ふことと成りて、嚴格なる意味に於いての家屋をつくることに成功する事とも成るべきなり。かゝることは、一度、成功して便宜を得れば、其より其へと多方面に理想を馳らせ、工夫を施すこと、日に盛に起りて、加工的生活の門戸は、忽ちに開拓せられ行くことと成るべく、兎にも角にも、生活狀態の一變が、其の思念思考の一變と提携して、全く人間の世界としての別天地を見ることと成りしは、よく想見せらるべきなり。こゝに注意すべきは、思念思索の轉改より加工的生活も起りしなれど、事物は必要を感得すべき刺激なくして妄に活動すべきものならねば、根據は思念思索にあるにもせよ、其の思念思索は、之に依りて得られたる加工的生活の妙味を受納する快味と便益との刺激によりて、一種の欲望と成りて、更に其の思念思索を活動せしむるものなることなりとす。

かくて、思念思索と生活狀態とが、互に主枠を成して成功を重ね、快味と便益とを受くることと成る時は、其の經驗上の自己奬勵は、人の精力を思念と工夫と試驗とに集中せしむることと成るは、自然の勢にして、其の發展は、忽ちにして見るべきものあるを致すのみならず、精力を集中する所、個人としても自然に發展する其の工夫力と技能力とは、遺傳的に其の強さを傳ふることに依りて、いよ〳〵進み、子孫は漸次、先天的に便宜なる約束を心性の上に享有することと成るべく、工夫の上には、他動物との關係上、武器の發展策略の發展調育法の發展――（例へば、多數にて弓矢を放つて猛獸を倒し、陷穽をつくりて勢せずして猛獸を擒にし、或は其の陷穽と食物とに依りて種々の野獸を訓育して之を飼養し、代を重ねて遂に家畜化せしむる類）――とも成り、他動物を壓迫或は服從せしむることも起り、體力中心の時代は、智力中心の時代と成り、人間が漸々に地上の主人公たる狀態に導かれつゝ進みしことを想見すべし。

既に斯くの如くなること、十分に想見し得べきものなりとすれば、加工的生活の門戸は、實に、間接抽象作用と概念作用とにありて、かゝる能力が先天的必具のものと成れる所、人といふ階段と他動物の階段とが、この能力の存否に由りて、顯著なる差別を示し、かゝる能力の享有が、人の人としての階段を保つ所以の主要なる本能力なりとして認めざるを得ざるものと成り了せるを確認し得べきなり。――（この能力は、人の本能力の第一位に置くべきものなるが、上にも註記したる如く、別に「人間本能論綱」にいふべき他の能力の、之と提携するにあらざれば、この本能力の發展の大に進展し得まじき理由あり、加工的生活も、また、大に展開し得まじき理由あれど、そはこゝに述ぶべきものにあらず。本稿中には、たゞ知的方面より觀察し得べき本能論に止むべきなり）――斯くの如くにして、誰か、間接抽象に依り完全なる概念をつくり、以つて理想を畫き、加工的生活を成し得ることを以つて、人間本能力の發露なりといふを阻まんや。もし簡單にいはむとならば、間接抽象のみを擧ぐるも可ならむ、概念作用の自由のみを擧ぐるも可ならむ。兎にも角にも、この心的作用が、人間第一の本能力として、人を獸畜より別つものなることは、爭ふべからざるなり。

余は、更に、こゝに、上述の本能の發展が、直ちに、知能上より――（別途の本能關係は、本稿の性質上、上記の如く暫く封鎖する立脚地に立ちて之を除外するも、なほ）――人間を今日の如き、狀態に誘致すべきものなりとする早計の想像を起さざるべきことを注意せざるを得ず。何となれば、如何に、生活狀態の着々成功

を重ぬる、快味と便益との刺激に依つて、人間の精力をこゝに集中せしむる機運を起したりとはいへ、又、其の思念思索が自然的なる境涯的向上力の强きに成れりしものなるにもせよ、又、其の思念思索を得たる結果としての加工的生活の快味と便益とに依りて、更にみづから其の思念思索と工夫とを奬勵し、以つて漸進的に活動するにもせよ、一度、獸畜の上に立ち、少くとも獸畜に依りて妄に其の生活を劫かさるゝことなく、生活狀態の內容も、まづは一應滿足せらるべき程度に達したりとすれば、必要上或は趣味上、新しき刺激を與ふるものなくして、無制限に、思念思索に熱中して向上の途をのみ急かむとすべきものにはあらず。勿論、加工的生活を營むに到れる人間の活動性は、或る程度には其の進步の行程を繼續せしむべき傾向を維持し行くべきものなれど、衣食住既に心を安んずるに足り、夫婦家庭の樂み既に所願を充たすに足り、自然的に安心立命すべき享樂氣分の生活に就く時は、勢、進展の氣は緩み來り、大體上、こゝに中繼的の休息に入るべきものと成ることの免るべからざること、之を今の人生狀態に徵するも、思ひ半に過ぐるものあるべきが故なり。「かくの如くにして緩慢なる進步の行程を辿りつゝ、時に一進一退ありて、合法に進步しつゝありといふことだに、必しも急速なる判別を下し難きものありけむ狀況にて、間接抽象作用概念作用を營み得るに至れる人間が、或る意味に於いて冬眠的に經過したりし年代は、非常に悠久にして、——(之を考古學的の時代別に擬推していへば)——恐らくは、夢の如くに所謂舊石器時代を終りたるものなるべく、其の內、比較的早く新石器時代を起したる類の、同じ人間中にも早く發展すべき關係に立ちたるものとして、其の資質の優良を想見すべきものよりして、遂に、下にいふが如き方面に、新しき進向の波動を起し行くことと成れりしなるべし。」

かくの如き狀態より更に一步を進めて、新機運を開き舊來の懶眠を破るに至らしめむには、其の精力を集注せしむべき樣に、之を衝動する適當なる動機なかるべからず。而して、其の動機を成ししものは、實に、上述間接抽象作用の營爲概念作用の自由の下に、自然、向上本能力の强盛なる者の間に、さなきだに、人間らしき人間の世と成りしよりおのづから起し來れる、舊言語の之に伴なふ必然的變化の、後代より目して、言語革命の過渡時代ともいふべきものを成し來り居りしを、更に、省察的に轉換向上せしめ得て、制作的の組織的言語と成し、其の効用を刷新せしめたることにして、人間の言語の、人間の言語としての効用の展開は、こゝに、知的方面に於ける二次的の人間的本能力の發揮として、人間をして極めて、完全なる思念思索を有せしめ心界を改造して、理想的に加工的生活を大成せしめ得べき、今の人間と資質上全く同等の心的境涯を現出せしむるに至れりしなり。今の人、やゝもすれば、悠久なる古代の人間の心的現象を藐視し、妄に、蒙昧野蠻を以つて之を罵倒せむとすれども、今の人が、之に依りて思念し之に依りて思考する言語、これなくんば、殆ど全く今の生活なきを斷言し得べき言語は、其の悠久なる古代の人に依りて制作せられたるものにして、——(既に人間の進化を信ずる以上、其の人間が有する言語は、實に人間が進化せしめ來りしことを自證するものにして、極めて野蠻の俗にありと信せらるゝ者の言語にも驚くべき高尙なる抽象作用の結果たる、概念の區別法を、其の機關部に存する以上、其の制作時代の知能の如何に慢るべからざるべきものありしかは、既に一言し置きたる如くにして)——すべてに於いて、人間が、加工的生活に伴なふ大なる亂調を起すを免れざる以上、如何なる時代に於いても、積極消極の兩端にあるものの知能思念は、殆ど天淵の相違あるべきものにて、時代の代表者の標式

は、毎に其の優者の上に置かれざるべからざること上にもいへる如きものにして、たゞ、近世特に最近世に於ける科學的進歩の、生活上の形式を變化せしめたることは、實に古今の間に絶大の異動を起したれど、人間の人間としての價値、思念思索の具足的力量に至つては何等の等差あるにもあらず、すべて優者の精力を集中する所、心界にも物質界にも、よく驚天動地の運動を成し得らるゝが人間の靈妙なる所にして、今も然るが如く古も亦然りしなり。今の最多數の人が、空しく祖先がつくり上げたる社會的生活の恩波に浴し、徒らに祖先が制作したる言語のうちに覆育せられながら、慢に、其の基を立てたる祖先を輕蔑するが如きは、一度此の點に注目したらむ以上、慚愧して再すべからざる過ちなるべし。かくて、古代の人間を藐視するに慣れたる世人は、今人にても困難を感する、高尚なる概念上の關係的區別を範疇的に指示する言語につきての抽象的思考が、甚悠久遙遠なる時代に於いて自由に操縦せられ、以つて言語の大成を致したりといふを怪むべけれど、其は、原因なき結果の存在すべからざるを知つて、結果を以つて其の原因を推すことに依りて解決せらるべき問題なることを忘れたる態度にして、注意を集中せしむべき理由ありて注意を集注せしむれば、苟くも人がましく發展したる人としては、條理あらむ以上、如何なることをも發動的に成し得らるべき特徴を有すること、――（今に於いても見出さるゝ如く）――すなはち、人間の人間たる所以なれば、今說かむとする時代にも、然るべき動機ありて、人の精力を集中せしむることと成り、人の注意の集注せられたる結果が、言語の制作とも成り、それやがて、人間界の轉機と成り人間狀態の大成を來たしたりしこと、まづ推定し得べき所にして、其の委細につきては、下に說く所を玩索して知るべきなり。兎にも角にも、時代は、人が彌々知的方面なる第二次的の人間本能の力に接觸すべき時期とは成れるにて、吾人も亦、彌々言語進化の問題に進入すべきこととは成れるなり。

一二

人間の始原時代に溯つて、更に一歩を進むれば、其の形體と生理狀態とが、他動物と相異なること甚少き狀況にありしことを許すべしとすれば、其の心的狀態も、――（異日途を異にすべき素質ありしものとすべからむ以上、內面の或る小差異は勿論存在したりしものなるべけれど）――大體上、同一境涯にありたりしなるべきこと、殆ど疑ふべき餘地なく、從つて、心情表白の手段も、ほゞ同一の境にありしを想見せざるべからざること、また明なり。されば、人間の言語の、人間の言語として、他動物の言語と懸隔を生ずるに至れりしは、全く、其の心的狀態が、上にいへるが如くにして、獸畜と懸隔したる境涯を現じたりしに因ること、固より爭ふべからず。かくて、人の、いまだ人らしき狀態に進まざりし時代、いはば、形體と生理狀態とを他動物と相遠からざる地位に置きたりし時代にありて、心的狀態と其の表白手段とを、大差なき狀況に置くことを許すべしとすれば、彼此相似相通じたるものとして、之を推定せむこと、大體上、正當なる手段なるべきなり。

今、この信條の下に其の狀況を推測すれば、其の原始に於いて、或る生理的表現が心的狀態と反射作用的に感通するものなりしこと、今も動物の現象中に認め得べきが如くなりしにて、其の或る生理的表現、すなはち或る形體の運用的變化及び聲音上の發露を以つて、之と對應すべき或る心的狀態を反射的にあらはすべき一種の符徴的形式としたりしこと、今の人にても、其の思想感情最單純にして、思索思慮すること最少き者にあり

ては、大に之に似たる傾向を持するものあるに徴して、其の原始する所あるを覗ふべきに似たるより見るも、殆ど分明なることに屬す。そがなかに、形體の運用的變化は、其々、他に主とする所ありて、情意を通ずるに專ならざるのみならず、情意を通ずる方より見るも、聲音の如く有力なること能はず、――（例へば、或る形態上の變化は、直ちに他の體軀に衝突する如き場合の外、之を受容する者の積極的なる注意力を前提とするにあらざる以上、よくそが寓有する情意を通達せしむること能はざるを常とすれども、聲音の力は、受容する者の注意を前提とすることなくして、聲音其のものの發動のみを以つて、よく他の聽官を侵して之を感知せしむるを常とするが如し）――且つ、聲音は、高等なる動物として立つ者にありては、一般的に情意を述ぶる隨一のものと成り居るのみならず、今の問題なる動物の最上位としての人みづからの情意表白の機關としての言語も、主として聲音に依りて發展し來りしこと、――（後には文字を以つて聲音に代ふることも起りたれど）――固より分明なれば、今は、聲音方面の情意の表白につきてのみいはむに、この意味に於いての言語が、其の最始原の時に方つて、果して、蟲の鳴くが如く鳥の啼るが如きものなりしか否かは、よく知ること能はざれども、少くとも、直接抽象作用もいまだ發展せざりし時代、すなはち、反射的感得の時代、及び、反應的感得時代の初期に於いては、其の聲音が、全く、心狀狀態の反射作用としての生理的表現にして、たゞ、反應的感得に入るもののうちに低級の氣分意志の髣髴として成立するに至れらむを想像すべからむ以上、（緒論四。參照）其の低級の氣分意志の作用にて、反應といふべからむ程度の積極氣分を附加せしむることありしを想見すべく、暗に、蟲類禽類の鳴啼吟咏を聯想して、之とは比較的進歩の狀況ありしを假想して之を見るべきものなるべし。「この時代の表白法の系線を引きたる一種の現象として、人間としての後代に發展したるものにして言語上に發露するものは、實に吟咏諷誦の氣分なりといふべきに似たり。」之を言語發展の第一紀とすべし。

直接抽象の發展したる後、すなはち、反應的感得の盛なるに至れる時代に及んでは、以前の系統を受けたる表白法其のまゝのものの行はれしことは論なけれども、漸々、わが情意を他に示さむとする自覺的氣分を以つて、其の生理的表現としての聲音に條件づけむとする、或る程度の努力が行はれしを認むべきは、自然の順序なるべし。其の詳なることは、固より知り得らるべき由なきことなれど、大體上、獸畜の鳴音叫聲の比較的進歩したるものを聯想すべきものなるは、順序上明なりといふべし。然れども、間接抽象作用概念作用に成功したる人間は、其のいまだ成功せざりし時代、はすなはち、直接抽象時代に立つ歩程にありても、其の應用の才活動の氣に於いて、他の永く其の不成功の境涯に留れる者に比しては、大なる相違を有せしものなること、また、想像するに堪へたりとす。この故に、其の生理的表現たる言語も、頗ぶる意識的の工夫を加へて之を操縱することと成り行き、其の情意の表白につきての區別的表白法、他動物に比して、大に階段的の差異を有するものありしこと、まづ、十分に想見せらるべきなり。而して、こゝに大に注意すべきは、いまだ、眞正なる抽象作用、すなはち、間接抽象を成し概念をつくり得ざるを條件とする時代なる以上、其の情意の表白法を成す言語は、背、具體的の意味內容を有するものなるべきことなりとす。之を言語發展の第二紀とすべし。

然れども、上にもいへる如く、擬似の種類的統括と類似の概念的思念ともいはばいふべきものとを、直接抽象作用中につくり出して、將に間接抽象を起し、概念作用を營むに至らむとする過渡の時期に達しては、其相

當に、たゞ情感意志の表白のみならず、或る程度迄、或る物象を指示せむとする氣分意志を以つて、此迄情感意志の漠然たる暗號としてのみ用ゐられたる聲音を利用せむとする試みを起したることを想見すべく、この試みの氣分及び努力の、着手的の過渡時代を成すことなからむには、間接抽象作用概念作用の發展にも、又、之に伴なふ反省的なる言語の制作的大成にも、おのづからの支障と成るべき、準備の欠亡動機の不完全を成すべく、決して、完全なる人間的言語の發展すべき時代を招來すべき理由なきを想ふべし。この故に、此迄は、たゞ漠然と情感意志をあらはす具體的意味の言語なりしものが、すべて、一體を成す聲音の連續なりしものなるべき在來の言語すなはち總合的の言語――（寧ろ總合的具體の言語）――ともいはばいふべき樣に成り居りたるものを轉換せしめて、分解的に會得せらるべき樣と成し、單位語（Unit-word＝word にて、文を成す單位としての語の義）に當るべきものを成す言語上の形式を髣髴の間に構成產出せむとし行きて、漸々鮮明なる表白法を成就すべき更新の門に入りつゝあるものにして、――（下に說くが如く）――やがて言語の性質を具體的狀態より抽象的狀態に移動せしむべき先驅を成すものなるを認むべく、この時代に於いて、既に或る程度の――（如何に少數なりとも）――語彙を有することと成りたりけむこと、知るべきなり。たゞ、其の言語の性質が、氣分に伴なふ、從來の自然的言語としての聲音の條件的變化たるに過ぎずして、其の新開的の單位語的形式のものも、其相當のもの、もしくは、物象の聲音響波の模倣等を以つて成り、今の語にて臆推すべき例を擧げて、其の手段を表示すれば、或はりきみ或はいきみなどする時、自然「うーん」といふより起して、叱る時に其の意味をあらはさむとて「うん」といひ、兒童に大便せしめむとて、いきむことを促す方より「うーん」といひ、やがて大便の名とするが如く、又、之と對照する小便につきても、發音の性質上サ行の音が、勢よく又滯り無く出づる意味を寫するに適することと成り居るより、――（完全なる言語の發展後の例にて、「すら〳〵」「すうーつ〳〵」「すうつと」「すつ〳〵と」の如く「すゝむ」「すさむ」の如く、サ行音が其の發音の性質より來りて、かゝる意味を有せしめらるゝことと成るを以つて、其の原始する所を推し得べしと知るべし）――兒童に其排泄氣分を催さしむる方法として「しいー〳〵」といひ、其より小便の名を「しい」とし、又、其のサ行音を利用し、或る行動を促す意味を「さー」といふ音にてあらはすが如き類、鳥の鳴き聲に取りて之を「かー」「かーか」と呼び、雀もしくは鼠の鳴き聲につきて之を「ちゆーちゆ」と呼び、同じ樣に猫に「にやーご」といひ犬に「わんわ」といひて其の名と成し、又、風の音につきては「ざーざ」といひ、雷の音につけては「ごろ〳〵」といひて、また各其の名と成すが如き類の方法を取る程度のものなりしことを信ぜざるべからざると共に、其等が、殆ど皆、具體的に其の指すものを擧ぐる氣分にていはれたるものにて、最よく進みたる場合にても半具體的、言ひ更ふれば半抽象的の意味を成す符徽たるに留り居りしことを忘るべからず。さればとて、半具體的半抽象的の思念をつくり、言語にも之をあらはすことありとすれば、漸進的の歩程にあるものとしては、また以つて時代趨向の代表と認むべきに似たり。之を言語發展の第三紀とすべし。

すべて、かゝる程度の言語をば、いまだ、加工らしき加工、言ひ更ふれば內省的意識に成る加工に依つて成らざる方より、すべて「自然的言語」といひ、其の時代を「自然的言語時代」と呼びて、後の「加工的言語」及び「加工的言語時代」と區別すべく、又、意味の性質具體的のものなるより、之を「具體的言語」「具體的言語時代」と

呼びて、後の「抽象的言語」及び「抽象的言語時代」と區別すべきなり。「加工的言語時代抽象的言語時代といふとも、自然的言語具體的言語を有せずといふにあらず、其の發展の中心と成るものの性質に依りての命名なりと知るべく、同じ理由にて、この具體的言語の第三紀には、少しく加工的抽象的の域に足を入れつゝあるも、大體上の性質より自然的言語時代具體的言語時代に入るゝものと知るべし。」

今、自然的言語時代すなはち具體的言語時代を、上に述ぶる所に依りて、區劃的に圖示すれば、左の如きものと成るべし。

具體的言語の時代別（Generations of the Concrete Language）

（一）具體的言語の第一紀（First epoch of the concrete language＝Epoch of Primitive-concrete language）
　○反射的なる生理的表出としての表現狀態（Refective expression of mental phenomena）
　○原始性具體的言語の成立（Existence of the language of primitive concrete stage）

（二）具體的言語の第二紀（Secondary epoch of the concrete language）
　○反應的なる生理的表出としての表現狀態（Expression as conscious echo of mental phenomena）
　○意識的具體言語の發展（Arise of the language of secondary concrete stage）

（三）具體的言語の第三紀（Last epoch of the concrete language）
　○意識的表出としての表現狀態（Conscious expression of mental phenomena）
　○半抽象的言語の發生（Arise of the language of semi-abstract stage）

一三

上に述ぶるが如く、間接抽象作用概念作用發展の前提として、半具體的半抽象的の思念をつくり、其の內界の表現が言語に依りて外界に表現すなはち表白せらるゝ所、おのづから、半抽象的の言語を成すこととなるのみならず、其の言語が、既に、或る程度迄、或る物象を指示せむとする氣分を以つて操縱せらるゝこととなり、從來の言語が、物象を其のまゝに具體的に思念する方より、今の語と文とに依りてあらはさるゝ思想の如く、其の內部が明に分解的の氣分と會得とを成すものにはあらで、其のまゝに一塊的なる具體的言語を成すものなりしを移して、漸々に分解的に會得すべき樣に轉換せしめむとする機運に推し得かむとして、語彙の釀造を試みつゝあることと成れりしものなれば、之に、明確なる間接抽象作用を致し概念作用を起して概念をつくり出すこととなるしむる思考狀態の展開を提携せしむることと成れば——（その展開は、また、こゝにいふが如き言語の分解的に會得せらるゝこと、及び、語彙の釀造を試みつゝありしこととを表裏して、其の功を相成ししこと、疑ふべからざれども）——直ちに、其の結果たるすべての概念を表白すべき言語、特に其の語彙をして、純然たる抽象的言語たらしむることと成りしこと、論なし。之に依りて、之より以後を抽象的言語時代と稱すべし。

抽象的言語時代といふは、既に一言したるが如く、言語がすべて抽象的の意義に使用せらるゝをいふにはあらず。舊來、皆、具體的のものなりし——（上文の半抽象的の言語を除きて）——其の語意を轉換せしめて、抽

象的の意味すなはち概念をあらはす符徴たるを本義とし、其の概念に收容し得らるべきすべての物象を、必要に應じ、其のまゝ抽象的意義にも、又、具體的の意義にも、任意に使用することと成れりしが故に、其の言語の本義よりいへば、抽象的のものと成れりしをいふにて、其の性質は、應用的には、すなはち、實際的の思念思想の表白には、臨機應變に、いづれをも表白し得らるゝものなることと成るに至れるなり。

然れども、物事には順序あり、歩程の差違ありて、間接抽象作用概念作用起りたればとて、其の始めに方つては、あらゆる言語が、全部抽象的に成り得べきものにはあらざりしなり。其の故は、概念をつくり得たればとて、そは、其の原始に於いては、物象に關する內界の表現が概念と成りし迄にて、其の概念作用と相需つて其の新にせられたる心的現象の內省作用が、在來一塊的具體に表白せられ來りし情感意志と、其の表白の機關としての言語とを一々分折分解して、全部を概念的のものに淨化し去るに至らむは、決して容易なることにあらずして、其の淨化は、其の間接抽象作用概念作用と內省とより來る思索が、なほ他の刺激と相需つて、漸々に思索其のものを發展せしめ、發展に發展を重ねたる結果として、外界の現象をも內界の現象をも、分解的綜合的に對照攻究して、十分に之を征服し了る時機の到來を待たざるべからざるを以つてなり。斯くの如き事業が如何に遂行せられたりしかにつきては、下に說く所によりて明なるべけれど、兎にも角にも、眞正なる抽象的言語の時代、すなはち、言語の大成時代ともいふべき時代に達する迄の、この時代は、頗ぶる悠漠なる年月に亘りしものなるが如く、――（恐らくは一一にいへるが如く舊石器時代を終ふる迄の殆ど全體に亘りしものなるべし）――之を眞正なる抽象的言語時代を作る過渡時代として見るべく、純然たる抽象的言語の時代にはあらずとも、其の性質を中心として活動したる時代なるが故に、勿論、抽象的言語時代に入れて、其の第一紀と認むべきものなりとす。

さて、この時代の始めにありては、語彙の數は、概念の數と共に、いまだ甚多からざれども、既に思索作用の狀況發展活躍し來りて、其の功用を日常生活の事にあらはすと共に、すべてに於いて、個人的にも、遺傳的にも、智能の展開を促すことと成れりし以上、かゝる方面に心を用うる者は、生活狀態にも大なる利便を得、また他に對する勢力にも影響することと成りて、自然に優者として强盛の運に向ふべきこと、的面に經驗せられ行くことと成るべきものなれば、（一一參照）苟くも、境涯的向上本能の優秀なる人間としては、かゝる時代に於いては、特に精力を思索其のものに用うる方より、外部の現象をも、內省せらるべき思索狀態其のものをも、對象として思念する方に赴かしめざるを得ざることと成るは必然の勢にして（同上）、斯くの如くする者は榮え、斯くの如くせざる者は榮えざるがなかに、其の思索の活動と共に生產せらるべき概念の日に增殖し得べきは、また必然の勢にして、概念增殖し行けば、其をあらはすべき符徴としての語彙の之に伴なつて增加し行くも、また必至の勢なりといふべし。

されど、たゞ概念の增殖に從つて語彙が增加し行くといふことのみならず、言語と物象をあらはす概念と思索との當然の關係は、概念の符徴としての言語をして、たゞ言語を以つて、內界に於ける表現たる概念を外界に表白する機關たらしむるのみに止らず、逆さまに、言語の影像としての概念を內界に植ゑて、思索其のものを活動せしむる便宜たらしめ、人の思想其のものを覆育する機關として立つことと成るに至らしめ、言語の功

用に時代を區劃すべき變化を起さしめて、漸々に、人の精力を言語に集注せしむることと成り、遂に言語中心の時代を興起せしめ、言語大成の機運に到達せしむることと成れるなり。この故に、今、言語と物象をあらはす概念と思索との關係の事に入りて、順次に其の消息を明にすべし。

間接抽象作用を行ひ概念作用を自由に營み得らるべき心的狀態を有するに至れば、外部の物象に觸るゝ所、直ちに、其の作用を重ね〳〵て、其の抽象作用と概念作用と概念とは、いよ〳〵密にいよ〳〵深くいよ〳〵多く成り得くべき順序なるが如くなれども、そは、いまだ必しも然らざるなり。其の時代的智能の低劣なるが故にはあらず。思索の大なる發展には、必ず概念の符徽として立つべき心的機關の或るものを必要とし、それなくしては、大に其の思索を進歩せしむること能はざるべき理由あるが故なり。これは、現在の人間に徵しても、よく其の理由を知り得べきものにて、智能大に開けたる由の自信を有する現代の人は、自己の頭腦は、何の知識にても深く〳〵辿り〳〵て際限なかるべき異能を有するものとして、みづから時代的智能の優秀を誇る氣分あるべけれど、其の自信は、實は虛僞の自信にして、其の深く〳〵何處迄も辿り得らるゝは、事實上、智能の優り居るに依りて然るにあらず。一に、概念の符徽としての心的機關の、悠遠なる祖先時代に發達せしめられたりしものを利用し得る、恩賴の然らしむる所にして、時代的智能の優秀と認めらるゝは、實に其の利用を恣にし得べき刺激と便宜とを有する史的關係の誘掖に過ぎざるなり。

今、之を實證せむに、まづ數學的知識中の最卑近なりと信ぜらるゝ算術につきて思念すべし。何の文字何の符號をも一切用うることなく、何の術語をも、其の術語に依りて表はさるべき何の概念をも前提とすることを得ざるものとして、1に2を加ふれば3と成るといふが如き最初の計算法より、全く自己の工夫にて思索し始むるものとして、よく何程の事を考へ何程の知識をつくり得べきかを想ふべし。加算減算の事にても——（勿論手足の指や石や木片や其の他の實在的の物品にして、心的方面の生産にあらざるものを排列することをば許容せらるべきものとして）——頗ぶる多くの員數頗ぶる大なる數量の計算に亘れば、決して其の目的を達し得べきものにあらず、計算すべき工夫だに立ち得べきものにもあらざること、如何に工夫すべきか如何に直感的以外の計算の門を開き得べきかの心的經過を起すべき途の有無——（そは、文字、符號、術語、術語が表はすべき概念の前提なくしては、如何ともすべからざるもの）——を思念することに依りて分明なるべし。況して、乘除の如きは、實物につきて計量するを得べき場合の、極めて簡單なるものならむには、幾分か會得し得らるゝこともあるべけれど、其の複雜なるものに至りては、何の工夫をも計算をも成し得べきものにあらず。天才の人ならむには、比較的には多くを商量し得べき場合あるべく、單比例程度の極めて簡單なるものならむには、乘除の外にも、實物及び其の概念を搜る間に、實際的の關係より、呼吸的に會得し計算し得べきものもあるべし。されど、如何なる天才なりとて、決して、この程度を越え得べきものにはあらず。〔かくて、全く自己一人の工夫にて進むものとすれば、勿論、何の符徽何の文字もなく何の術語も其に表はさるべき概念も具らざるを條件としたる下には、新に其等をつくることを許すべしとするも、辛くして考へ得られたるべき、其の程度の淺薄なる會得にては、今の數學上の諸の術語符徽及び其が指示するが如き概念が、容易く制定せられ得べきにあらざるは明なるが故に、多少の術語概念等を起し始むるものとするも、之に依りて急に大なる成功を致さむことの夢想せら

るべきにもあらざるを想ふべし。」今假に、犬が飼主の通り過ぎたる跡の遺臭を嗅ぎ別けて辿り行くが如き、境涯的向上本能力の拔群超越の不思議なる天才ありとして、其が算術につきて、今開け居る程度の計算上の技能を得たるを假定せむも、何の術語をも、之に伴なふ概念をも、文字をも符號をも有せず、また其の幾分を自己の力にて工夫し得たりとするも、一切之を使用すべからずといふ條件の下に立たしめられて、其の知識を他人に傳へ得べきものなるか否かを考ふべし。其の事が全く絶望の外なきを知るべきものなると共に、かゝる條件の下には、如何なる知識を有する人ありとも、何人も其の傳授を請くべき途なきを知るべし。知れる者あり、敎へむとする氣あり、敎へられむとする氣分の人ありとも、到底傳授せられ得べからずとすれば、自己の力にて工夫し會得することの不可能なること知るべきなり。(すなはち、かゝる假定の人の實際にあり得べからざること明なり。)

これ何に因るかといへば、元來、心理狀態は、一時的に無制限の複雜なる現象を心界に排列し得べきものにあらずして、少しく深く、新しき一方に進めば、一旦現れたる他方の心象は、何時しか沈み行き、又、其の方に心を傾くれば、他の方は消え失せ行くが如きことと成るものなるのみならず、實物實象と離れては、或る物象の概念其のものも、甚浮動し易く變化し易きものにして、いづれよりするも、出沒變化涯りなく浮動消沈常なきを習ひとし、もし、浮動變化なからしめむとすれば、注意を一つ所にのみ留めざるを得ざることと成り、其の心界表現の範圍は甚狹められて、多くの活動を成すこと能はざるべきものなれば、もし既制の雜多なる概念を、簡單にまた浮動性なき樣に、心中に表現せしめ置くべき或る機關なき時は、或る程度の概念は發展したりとも、そは其の心象の形態を明確に維持する爲に、實際の物件と一々連帶する關係に於いて思念せられざるべからざるものなるが故に、勢、其の限界の、實際の物象に制限せらるゝことと成るべく、何事にても、其の思念に上るものは、極めて制限せられたる狹隘のものに限られ、大體上、直面の物象もしくは直面したるより來れりし記憶の影像を、其のまゝに思ひ浮べ得る範圍に止りて、其の他に亘ること、殆ど不可能なるべきものと成るべきを以つて、既に間接抽象作用と種類及び性質の概念作用とに依りて、物象の性質を按じ、實物實象を其の概念中に收めて或る思念思索をつくり得ることと成りたりとて、其の概念を基礎とし、層々相重ね、いよ〳〵深く、いよ〳〵遠く辿らむとするには、何か或る概念の符徵たるべき固形的のものの、實物を離れても、思念の形體すなはち思念の範圍狀態の變化浮動を防ぎ得べきものを心中に畫き、之に依りて其の概念を簡單に代表せしむることとし、內容の複雜なるものも、單に其の符徵を心中に表現することに依りて、一々に實體を連帶現出せしむるを要せず、且つ、廣汎なるべき意味內容も、其の固定の德に依りて、縮約的に取り扱はれ得べき關係と成り、隨時に之を心界に出沒浮沈せしめ、饒多に之を心界に排列齟齬せしめ得らるゝ事と成り、以つて其の操縱を自由にし得るにあらざれば、到底如何ともすべきものにあらざればなるにて、かゝる條件に合ふべき符徵としては、まづ、言語を利用する外はなく、言語、其の始め聲音に依りて形を成せる言語が——(すなはち外的言語といふべきものが)——今、下に直ちに說明せらるゝ如くにして、其の符徵として心界に內的言語といふべきものとして立ち得るのみならず、又、——(言語大成以後の時代にありては)——其の內的言語の類推より、別に、聲音の立脚地より來るもの以外の內的言語を心界につくりて、更に之を外的言語に移すことあるに至る

にて、そはすなはち、文字にてあらはさるゝ言語、及び、或る意味を約束的に含有せしめたる符徴の、一種の言語と認むべきものを成すに至れるものなれば、之を欠きて深奥なる思索作用の行はるべき理由なければなり。（かくの如くなれば、上の例の如きものより推して知るべきは、今人の思索の優秀を示すが如き現象の存在は、全く、こゝにいふが如き言語の力に依るものにして、之を離れては、何の智能の優秀もなきことを知るべきにて、他は、史的關係の如何が、今人をして時代的に祖先の名譽を代表して、暫く誇矜の自由を得べき好運兒たらしめ居ることを見るのみ。）

かくの如くにして、本文にいへる如く、言語符徴等を用うれば、容易く成し得べきことをも、之を用うることなくしては、到底成し得難かるべき例が、現代の人の上にも徴し得べきを見て、其の成否の關係が、一に、言語及び符徴の必要なるものに對して之を欠くことに由來するを知ると共に、往古も亦固より斯くの如くなるべくして、思索の大なる發展が、全く言語に需ちたるを示し、言語を發展大成せしめたる人の智能は、既に、決して今人に劣らざりしことを示し、今人の智能が大に古人に超越したるものなることを證明し得ざる時は、今人の賢明なるが如く見ゆるは、實に、往古の祖先が發展せしめたる言語の庇蔭と、其の言語の力に依りて、必要を感せしめられたる或る刺激の下に、漸々と發展せしめたる古人の知識及び工夫が積り積りて學問といふ形――（學問すなはち學は、一定の標準に依りて制限せられたる對象の形式を、組織的理想的に抽象したる知識ともいふべきものにして、實際を其のまゝ體得すべき性質のものにはあらざれども、實際より體得したる或る形式的の會得をば、一定の實際的物件より抽象して、組織的に建設することに依りて、其の立脚地相當の理想的狀態に取り纏めたる知識にして、之を執つて、實際の物件を體得することを得べき簡易なる方便門を成すものなり）――と成りて遺れるものを領有することとに依りて、自己の進退に大なる便益を得居る優勢觀なるに過ぎずして、其の智能に於いては、毫も誇るに足るものなきを知るべく、すべて、往古の人も、今の人も、既に思索の利器たる完全なる言語を具ふるに至りたらむ以上、思索力を利用して頭腦を發展せしめ居る者は、比較的に鋭敏聰明にして、其の利用を勉めず頭腦を發展せしめざる者は之に反するは、同一の事にして、今人とても、知識智能は人に依りて階段ある如く、往古にても、また同一なりしこと論なく、今の人に、學問に依りて思索すること多きより、頭腦を思索に慣らす長ありとすれば、一方には、既に制定せられたる知識に依賴すること多くして獨創的に思索する方の注意力觀察力を鈍からしめ、又、直覺的に悟入する覺識作用を不振ならしむる短も、之に伴なふことを認めざるべからず。かくいへばとて、余は、決して、後世、特に現代の、知識の發展を無視するにあらず。要するに、今の時代は、知識は勿論進歩し居りといふべけれども、智能は進歩し居りとはいふべからざるをいふなり。記錄時代以後の思想學問の歴史を大觀するも、多くは糟粕繼承の陳迹を相重ぬるものにして、稀世に出づる命世の人の外、見るに足るもの鮮きに徴するも、思ひ半に過ぐる所あるべきなり。今、余が斯かることに迄論及するは、本文上述の如き性質の言語が、如何に人の思想狀態をして人の思想狀態たらしむるに力あるものなるかを示さむが爲、また、言語展開變遷の跡を叙説するに方つて其の會得を妨ぐべき、尊今卑古の氣習を破らむが爲なり。

今、外的言語內的言語の事をいはむに、言語は、元來聲音に依りて發展し來りたるものなれど、概念の表白

機關として使用せらるゝことと成れば、其の聲音は、まづ、おのづから固定したる約束的の符徴と成るが故に、聲音の實際の發動はなくとも、其の影像を攝取することに依りて、よく之を心界に浮べ得べきものと成るなり。かくて、斯くの如く心界に浮べられたる言語は、最早聲音其のものの具體的に相伴なふ概念の符徴なるにはあらで、聲音が具體的に相伴なふ概念の符徴たるものの影像として、其の符徴より、逆樣に心界中に移植、否、建設せられたるものと成り、聲音と具體的に相伴なふ外界の言語と、並存的形影的に、內界に樹立し、互に主伴を成して相提挈することと成れるものにて、かくの如きものなる內界の言語は、――（言ひ更ふれば、或る言語の影像、或る言語の概念ともいふべきもの）――實に、概念其のものを固定形の符徴とすることに依りて人間の思念思索を助け、如何に複雜にも、如何に深刻にも、あらゆる物象及び之に關する直接間接のあらゆる思念思索其のものをも、辿り辿りて尋釋し思索し行くべき心界必需の緊要物件とは成り了れるに至れるなり。されば、この內界の言語、すなはち、約して內的言語といふべきものは、外界の言語、すなはち、約して外的言語ともいふべきものと、形影對照して、以つて人の思想を覆育する一大機關と成れりしにて、別ちていへば別のものなれど、合せていへば、一つのものなる、この內外形影一致の「言語」――（少くとも、形影一致と認めたる意味に於いての「言語」）――は、性質上、最早、たゞに人の思想表白の機關なるのみならず、同時に、心界に於ける思想表現の內的機關として立ち、思想交換の機關としてよりは、寧ろ思想覆育の機關として、更に重大なる功用を奏すべきものと成り、かゝるものの利用にこそ、間接抽象作用も、種類及び性質の概念作用も、始めて自由なる活動を起し得らるゝこと成るにて、今も實に斯くの如くなると共に、思想言語發展の往古に於いても、亦實に斯くの如くにして、其の往古に於いて、新時代の新現象としての抽象作用概念作用を大に展開せしめしものにして、其の思索上の展開が、また、逆さまに其の言語を增殖し發展せしめ、其の增殖と發展とが、又、更に繙つて抽象作用概念作用を展開せしめ、互に間斷なき繙轉を進め來りしものなるを想見すること、難からざるべきなり。かくの如くにして、思念思考の發展が言語に需つことと成りて、其の結果が、直ちに、處世上の利便を起し、人の强さを增し行くを經驗すれば、時代の優者が先導と成りて、人間の精力が言語に集注せられ行く時代を起したりしこと、必然必至の趨勢なりしを悟入し得べきなり。

かくて、この狀態に進みたる言語を有することが、裁然として、人獸の間に懸絶の地位をつくれる所以なることを認むると共に、其の發展したる言語の性質が間接抽象作用概念作用の結果に依りて、更新變化せらるゝに至りたるものなるにかゝはらず、今は、おのづから特別なる地步を占め、知的方面の本能力の第一たる、其の間接抽象作用概念作用の本能力に對し、同じく知的方面の本能力の第二として、かゝる性質の言語を制作的に展開せしめ、かかる性質の言語を徹底的に利用し得ることを數へざるべからざるを知るべきなり。

普通の意味に於いて、言語と認められざる或る符徴、すなはち、數學上の符徴及び字形の、其のまゝ或る意義をあらはす符徴として用ゐらるゝものも、上文に一言したるが如く、實に、また、一種の言語にして、普通の言語が、生產の史的關係に於いて、聲音と具體的に發展したるものの類を成すに對し、其の影像としての內的言語の本文にいへるが如きものの類推にて、心界に書かれたる、心的表現としての或る概念を、或る象形（すなはち、符徴及び符徴としての字形）に撮影して外界にあらはしたるものとしての一類を成すを異なりと

するなり。されば、其の異なる所は、たゞ、生産上の史的關係なるのみ。文字の發展して聲音に代用せらるゝ事と成れるも、實に、この同じ關係にて、――（文字の數學上の符徴に先立つは論なけれども）――音標文字は、聲音を心界に影像化したる表現とし、其の概念を符徴にあらはしたるもの、象形文字、すなはち義標文字（Ideograph）といはるゝものは、まづ種々の關係より起して心界につくり出でたる概念を――（其の概念の對象は一定せざれども）――符徴的に表白すると共に、之に對する既定の或る聲音的言語と結びつくるものたるに外ならず。文字が、圖畫に基して、象形文字と成り音標文字と成れりしことは、人の知る所なり。然れども、其の圖畫は、實に、外界の物象より得たる概念、或は其の連結せられたる或る思想の表現として立つものを符徴的に外部にあらはしたるものにして、眞正なる美術品として取扱ふべき程度に達せざるものは、寧ろ、上述の、內的言語として起りて外的言語としてあらはされたるものの類に入るべく、かゝるものが、既に舊石器時代の遺物として存在するより推せば、完全不完全は暫く措き、其の氣分は、既に其の時代に成立し居りしものなり。されば、之を美術史の劈頭に置く最近の考古的美術史家の成す所もさることながら、寧ろ文字史の劈頭に置くべきものといふべし。いまだ言語の大成を豫想すべからずして、其の前紀として見るべき舊石器時代、既に然りとすれば、大體に於いて言語大成期以來の時代たるを推定し得べき新石器時代以後にありては、或る刺激或る必要に應じては、文字の制作せらるべき智能は、明に人間の頭腦に潛在したりしなり。之を實現することの比較的に遲かりしは、其の使用上の刺激と必要とを欠きたるが故なるべし。勿論、其の發展の始めにありては、時世の關係上、一般に通用せしむべき必要を感ずべきにあらざりしなるべきが故に、早く發展はしたりしが、遂に後世に傳はらざりしもあるべきなり。

一四

言語が、一度、上述の形勢に達し、日に向上的に活動し居る人間の精力が、言語に集中せらるゝことと成れば、こゝに言語大成の時代は來るなり。此より後の時代の思想狀態は、一々、史的關係を尋ねて之を釋明せむとすれば、勢細密の條目に亘らざるを得ずして、讀者をして、却つて、言語の展開進化の要領を得せしめ難き恐れあるのみならず、そは、本稿の第二部として本稿の本論を形づくるべき「構想的結合に關する言語の形態論及び其の範疇」に於いて、其の基礎的知識の大要を述べたる後に於いてすべきものにして、後日に著述せむとする「思想言語進化論」に於いて、其の詳細を說くこととするを以つて、論述上適當なる順序なりと信ずるが故に、今の說明の進行に於いては、主として、言語の形式上の關係に止むることとすべし。

今言語の發展を尋ねて現代に將來する推移を明にせむとせむに方つて、まづ、世代區分の概要を論述すれば、人間言語の大成は、上にいへるが如き、抽象的言語の第一紀なる「語彙發展の時代」、寧ろ「單位語發展の時代」（Epoch of word［=unit-word］Developing Stage）といふべきものを前驅として來るものにして、おのづから別れて前後二紀と成る。其の前紀は「語根發展の時代」（Epoch of Root Developing Stage）にして、其の後紀は「根辭發展の時代」（Epoch of Affix Developing Stage）なり。暫く、之を第二紀第三紀と數ふべし。其の結果として言語の完成を告げたる時代を、現存の諸國語より歸納的溯源的に推定する時は、人間の言語は、之を

使用したる者の民族心理の關係よりして、おのづから三派に別れたる發展上の系列を成して、世界に鼎立したることを示すが故に、之を第四紀として「言語の鼎立時代」(Epoch of Tripartd Stage of Language) と稱すべし。而も、この言語大成完結時代の特徴として見るべきものは、所謂「文典上の形式」(Grammatical form)「寧ろ「文典上の樣式」にあらはさるゝ範疇的關係概念の發展なり。この故に、又「範疇的關係概念發展の時代」(Epoch of completing the Categorical Concept of Grammatical Relations) と稱すべし。これ、記錄以前の時代にして、辨證的歸納的に溯源することに依りてのみ知り得らるべき時代なり。波高く揚ればすなはち降り、月よく滿つればすなはち欠くるが如く、言語も、一度圓成の域に達すれば、また降下傾頽の時代に入らざるを得ざる理由ありて、漸く言語としての品性を頽敗せしむるに至る、之を第五紀として「言語の頽敗時代」(Epoch of Declining Stage of Language) と稱すべし。記錄前の時代より懸けて現代に到る、皆、この紀に屬す。この期に於ける世界の言語は、鼎立より移りて、大體の性質上、發展上の四分系を成すこと成れり。この故に、又「言語の四分時代」(Epoch of Quadrated Stage of Language) と稱すべし。[この時代に方つては、普通の系線的發展の外に出でたる特殊の加工的言語の特に展開したるものあり。所謂漢語は、すなはちこれなり。之を加ふる時は、又「言語の五裂時代」(Epoch of Quinary stage of Language) と稱すべし。下にいふべし。]今の人、多くは、記錄以前の時代は、人智のいまだ發展せざりし時代にして、記錄時代より漸々と發展の度を進め、現今に於いて大に其の極に達し、之に伴なひて、言語も勿論發展し來れるものとのみ思ひ居るべきを以つて——(事實上、符徴の表白法を以つて、聲音の表白法に代ふるものなる文字の制作及び利用の結果は、言語に對し又人文に對する一面の大發展を成し、學問の興起文學の展開等に於いて、世を更新したりしには相違なきものなるが)——かく言へば、餘りに狂惑的の言說と、誰も思ひ寄るべけれど、眞理の研究は、一面を執して全面を推すべからず、一局に捕はれて全局を判ずべからず、學理の推定は厭く迄も冷靜にして、何處迄も徹底的ならざるべからず。人文の發展と言語の發展とが、其の始めに於いては、必ず相伴なふこと、既にいへるが如くなれど、厭く迄も發動的に進むべき言語大成以後の時代に入りては、其の進行の狀態、——(人文と言語との關係につきても、言語の內の或る方面と他の方面との關係につきても)——必しも統一的なるべきものならざること、他の事例にていへば、身を養ふべく身を保つべき爲の食物が、一方に於いて、人の健康を損ね人の生命を害なひ居るが如く、若くして身體旺盛に老いて身體衰弱するが一般の天則にして例外あるにはあらざれども、一方には、或る關係にて若き時代には病弱にして老いて强健なることも並存する事實なるが如く、すべての事物は、一概にのみ行くものにあらずして、言語も、一度、完全にして、十分之を利用するに墮ふること成れば、人の精力の中心は他の方面に向ひ、又、之に培ふことを忘れて、便利に任せて使用するのみにて、世代を重ぬれば、言語の頽敗することも起るべきにて、頽敗し行きたればとて、其の用を成さざる迄破毀損傷せしむるにあらざる以上、人文の或る程度の發展には妨げなく、言語其のものも、亦或る方面には、一種の展開を成し得べきこと、——(其處が、人の事なり、人の言語なれば)——何の不思議なく其の間に起るべく、文學の隆盛時代も出で來れば、學問の展開時代も起り來るべく、語彙の增殖も、知識や思想やの變化に伴なひて、起るべき樣に起るべきは、怪しむに足らず。人が品位も良く德義に厚きは、最人に信ぜられ最社會に有力なるべきものなれど、品性惡し

く或る程度に態度に欠點ありとも、腕力智力金力ありて相當に一代に横行するものあるべきが如く、言語も、亦斯くの如き關係あることあるべきを想ふべく、なほ、全體よりいくば、不健康の身にても、腕力强く健足なる者もあるべく、病弱の人にても、學術に長じて長命する者もあるべく、世俗の事には殆と無能なれとも、或る方面の思索もしくは藝術には異能を有する人もあるべく、人事すべて斯くの如くにして、すべての物事が、皆一端を見て全豹を推すべからざることのゝ多きを知らば、まづ、人間の言語にも此等に類似したる關係あるを思ふべく、下章に至つて論述する所を玩索して、この言の誤ひざるを知るべし。且つ、余が、こゝにいふ所は、言語としての品性の類敗をいふにて、言語其のものの衰類敗滅をいふにあらざるを念ふべし。

言語類敗の運に入りて、其の類敗勿論衰滅の途に就くにあらず、之を撥維する者、固よりまた、本來其の言語を大成せしめたりし系統の者なる時は、其の類敗の運或る程度に進みて、環境の關係よりも、其の立脚地に對して不便不調を感ずること切なるに至るならむには、之を更新改善せしむべき必要を感じて漸く注意を言語の上に集めむとする時代を招來することと成るべきは、自然の勢なるべし。而して、下章に述ぶるが如く、必然必至に起るべき理由ありて必ず起るべきことの動かすべからざるを認むべきものなるが故に、條理の指す所、かゝる時代の招來を豫想して、第六紀を形づくるべき「言語更新時代」(Epoch of Refining Stage of Language)を未來に理想せざるべからざることと成る。今、上章具體的言語の時代別に倣つて、此等六紀の別ちを圖示すれば左の如し。

抽象的言語の時代別 (Generations of Abstract Language)

(一) 抽象的言語の第一紀すなはち單位語發展の時代(First epoch of the abstract language=New primitive epoch of the language=Epoch of word developing stage)

○概念作用と言語との相關的發展狀態 (Mutual expansion of conception and language)

○單位語の發展 (Development of words [=unit-words] as elements of primitive abstract language)

(二) 抽象的言語の第二紀すなはち語根發展の時代 (Secondary epoch of the abstract language =New secondary epoch of the language=Epoch of root developing stage)

○高等なる間接抽象より來る內的表現としての概念及び其の符徵の發展狀態 (Development of concepts as inner apprehension constructed by higher indirect abstraction, and of their symbols)

○語根の起源及び其の發展 (Origin of the root and its development)

(三) 抽象的言語の第三紀すなはち根辭發展の時代 (Third epoch of the abstract language=Epoch of affix developing stage)

○高等なる間接抽象より來る內的表現としての關係的概念及び其の符徵の發展狀態(Development of relational concepts as inner apprehensions constructed by higher indirect abstraction, and of their symbols)

○根辭の起源及び其の發展 (Origin of the affix and its development)

(四) 抽象的言語の第四紀すなはち言語の大成完結紀なる言語の鼎立時代言ひ更ふれば文章上の

樣式があらはす關係的範疇概念の固定時代 (Fourth epoch of the abstract language = Epoch of the complection of artificial language = Epoch of triparted stage of languages = Epoch of completing the categorical concept of grammatical relations)

○思想表白機關及び覆育機關としての言語の完成狀態 (Completion of abstract language as the organ for expression of thought and as the hatch organ of thought)

○文典上の樣式の完全なる發展を遂げたる言語の成立、並びに言語の鼎立的分系 (Completion of the categorical system as the grammatical form, and the distribution of languages in triparted stage)

(五) 抽象的言語の第五紀なる言語の四分時代、すなはち、言語の鼎立時代に成れる言語品性上の頽敗時代 (Fifth epoch of the abstract language = Epoch of Quadrated stage of languages = Epoch of declining stage of the language [as completed in last epoch])

○不用意なる利用より來る言語の頽敗及び分裂狀態 (Declining and disrupting stage of languages by inattentive use for successive ages)

○言語の品性上の頽敗及び救ふべからざる分裂 (Inevitable corruption and disruption of languages)

(六) 抽象的言語の第六紀、すなはち、未來の更新時代 (Sixth or future epoch of the abstract language = Future epoch of refining stage of language)

○改善し行かるべき言語の理想くの進行狀態 (Ideal stage of abstract language to be followed in order)

○更新的狀態の言語の樹立 (Arise of the language of refining stage)

今、此等の各時代を說明せむとするに方つて、「言語」の定義、其の他、此等の說明に必要なる前提の知識を先にすべし。

一五

既に說明したる、言語大成の過渡時代を成す抽象的言語の第一紀は專ら指き、別々大成の時期に遂して、之を思念するに方つて、大成せられたる以來の言語の性質を言語學的に說明して其の概念を正し置くべき必要あり。すなはち、「言語」又「ことば」といふもの——(すなはち、今の所謂人間の言語)——の定義を指示する必要あるなり。

凡そ、「言語」又は「ことば」といふ語には、——(專らわが國語の用法につきていくば)——種々の意義あり。其の內、こゝに必要なるものをいくば、(一)には、「語」すなはち「單位語」を指し、(二)には、文典上の所謂「文」すなはち「單位文」——(或は、其の一部分を成すべき單位語の或る數)——を指し、(三)には、單位文の集りて、一回の數りを成せるものを指し、(四)には、「國語」といふ意味にて(一)(二)(三)のすべての場合を擧げて、此等より成るものとして、他の國語より、其々各自の特性を以つて、互に區別せらるべきものと成れるものを指し、(五)には、何れの國語といふことなく、あらゆる國語に亘りて之を指擧すべく、又、其の內の或る國語のみをも指し得べき概念を成すものを指していふなり。今定義を下さむとするは、(五)の「言語」なれど、要するに、

(三)も(四)も、(一)と(二)とに依りて成れるものなれば、(五)の定義も、また、(一)(二)の性質を了得したる上に成るべきものなりとす。この故に、まづ、(一)と(二)との說明及び定義より入るべし。

其の(一)は、普通に「一語」「單語」などいふ意味に於いての「語」なるが、そが、(二)を構成する一成分として立つものなるは勿論なれど、――(獨立に使用せらるゝこともあるなれど)――其の一成分といふに條件ありて、たゞ一成分といふのみにては、其の概念分明ならず。例へば、(甲)「雨降る」(乙)「風すゞしげに吹く」(丙)「しめやかなる雨いとしづかに降り居り」(丁)「逕烈なる風枝を鳴らして吹き來る」といふ文どもの例につきて、(甲)が「雨」と「降る」との二つの成分より成るものと見らるべきは、誰にも明なるべし。然れども、(乙)は、「風」と「すゞしげに吹く」との二つの成分より成るとも見得らるべく、「風」と「すゞしげ」と「に」と「吹く」との四つの成分より成るとも見得らるべく、(丙)は、「しめやかなる雨」と「いとしづかに降り居り」との二つの成分より成るとも見得らるべく、「しめやかなる」「雨」「いとしづかに」「ふり居り」の四つの成分より成るとも見得らるべく、又、「しめやか」「なる」「雨」「いと」「しづか」「に」「ふり」「居り」の八つの成分より成るとも見得らるべく、(丁)は、「逕烈なる風」「枝を鳴らして吹き來る」の二つの成分より成るとも、「逕烈なる」「風」「枝を」「鳴らして」「吹き」「來る」の三つの成分より成るとも、「逕烈」「なる」「風」「枝」「を」「鳴らし」「て」「吹き」「來る」の九つの成分より成るとも見得らるべく、此等は、皆、有理なる分解にて、其々、其の文を構成する一成分と認めらるべきなり。されど、(甲)(乙)(丙)(丁)の四文例とも、皆、最後に與へられたる、最小の成分に別たれたるものが、所謂單語すなはち單位語にて、上にいへる(一)なる、この「語」は、文を構成する最小の單位といふことを得べきなり。

然れども、他の方面より觀察すれば、「雨降る」といふ文は、實に「あ」「め」「ふ」「る」の四音節(すなはち、五十音の四つの「音」)より成れるものにして、其の他の文例も、皆、之に準じて各音節に別ち、其の一音節を以つて、其の文を構成する單位なりと考ふることを得べきものなるが故に、たゞ文を構成する最小の單位といふのみにては、其の區別分明ならず。こゝに於いて、「音節」と「單位語」との異なる所を推して、そが、或る思念――(概念、もしくは、具體的の思念)――をあらはす單位なりや否やの區別なるを認めて、其の混同を防がざるべからず。されば、或る思念をあらはす、構文上の最小の單位といふことと成るべけれど、「思念」といふ語を使用する時は、また、其の指す所の意義に種々の混雜を起す恐れありて、語學上に適切ならざる點を有す。而して、其の、思念をあらはすといふことと成る、語としての單位と、音節としての單位との違ひは、畢竟、其の音節もしくは音節の叢り――(又は、其等に當る符徴の文字等)――にて、意義を有するか否かといふことなれば、「思念をあらはす」といふに代へて、「意義を有する」といふこととし、語すなはち單位語は、文を構成する最小單位としての、意義を有するものといふべきことと成るなり。

されど、なほ他の一面に於いて、上文の例中「すゞしげ」「しめやか」「しづか」「鳴らし」の如きは、少しく素養ある者は、直ちに、語源論上、「すゞし」「げ」、「しめ」「やか」、「しづ」「か」、「逕」「烈」、「なら」(=「なる」)「し」(=「す」)等に分解し得らるべく、其々に――(說明し易きと否とを問はず)――或る意義を有するものなること

を知り得らるべきものなれば、上の定義に依れば、此等分解せられたるものも、亦、各、一語と認められ得べき嫌ひあることと成るべし。されど、此等は、皆、文を構成する單位として立つものにあらずして、語すなはち單位語を構成する單位として立つものなるが故に、こゝにいふ「語」とは、全く等しからず。――（其等が、或る關係に於いて文の構成に關するものと認められ得べき點あるは論なけれども、性質上、文に對しては間接に、單位語を構成する爲の資材として、語源論造語法論に於ける單位の對象たるべきものなりとす。）――之を、他の事に例ふれば、一つの語は、都市を組織する單位の、一戸にも比すべく、語源論造語法論上より認めらるゝ單位は、一戸を組織する單位の、一人の人にも比しつべし。「この關係より見れば、上の、他の比較的大なる單位は、或る市中の一區、區中の〇〇町、町中の△丁目、もしくは組合などにも比しつべし。」こゝに於いて、「語」すなはち「單位語」の定義は、「文を構成する單位として認められたる、意義の最小なるものなり」といふことと成るべし。

この「認められたる」といふは、頗ぶる意味あることにて、この單位といふものは、民族心理の種々の關係にて、頗ぶる異同あるものにて、たゞ理論を以つて、其の標準を定め得べきものにあらず。例へば、日本語にて「しづかに」と二語にて言ひあらはすべきものを、英語にては softly と一語にていひ、「遲烈なる」と二語にていひあらはすべきものを、同じく strong 又は violent と一語にていふが如く、又、同じ日本語の内にても、「遲烈なる」と二語にて言ひ得べきものを、「つよき」と一語にても言ひ、「あきらかに」「ながく〳〵と」の如く二語にても言ひ居るものを、「あきらけく」「ながく〳〵しく」と一語にても言ひ得らるゝが如くにして、すべて、習慣上に心理狀態と提携したる種々の約束ありて、一定せざるのみならず、下文にもいひ、本論に至つて委細に說明すべきが如く、文々構成する單位と、單位を構成する一段下の單位との區別を存せざる國語もありて、民族心理の大なる差異を示す事あるなり。この故に、單位語の標準は、其の民族心理と其より起る或る習慣とに依りて種々の異同あることを知りつべけれど、或る國語としては、其の國語を使用する民族の、傳統的なる標準の、其の國民の民族心理上動かすべからざるものに因りて支配せらるゝものなれば、――（同じ國語にても、言語の變遷に伴なひ、時代に依りて、其の標準を變移せしむることは、あるなり）――性質上、「單位と認められたる」といふ事とせらるべきものなる由は、知らるべきなり。「但し、或る國語或る時代の國語として既定の條件あるものとすれば、必しも「認められたる」と言はずして可なるべし。例へば、普通の文典などならむには、「文を組み立つる單位としての意義の最小なるものなり」といふべからむが如し。」

「語」といひ「一語」といひ「單位語」といふは、紛らはしからぬ時には、いづれにしても、更に害なけれども、「一語」「單語」は、單位語のたゞ一個の數なるをあらはす方に紛らはしきことあり、「一語」は、時に「一國語」の義に混ふこともあるべく、「語」は「國語」「言語」、其の他「雅語」「俗語」「術語」「隱語」等の「語」の如く種々の意味に使用せらるゝに紛らはしきことも起るべければ、嚴格にいはむとする時は、必ず「單位語」といふべきなり。この單位語の名に依る時は、「單位としての語」の義にて紛るゝことなかるべきが如く、（二）の場合の「文」につきても、他の意義に用ゐらるゝものと紛らはしきを避けむ爲の嚴格なる用語としては、やはり「單位としての文」の義にて「單位文」といふべきなり。

次ぎに、「文」すなはち「單位文」とは如何なるものぞといへば、單位語が集りて、有機的の結合を成せるものにて、有機的の結合とは、互に相需つて一體的の結合を成すべく、其々に、其の一體的結合を成す上に、互充的の責務を有する機關として立つべき結合なるをいふなり。「有機體に準じたる結合の義にて、勿論、有機體なりといふにはあらず。この發足點を過ちて、言語を有機體なりと認めたる舊學說の誤りは、固より襲ふべきものにあらず。」其の單位文があらはすべき「思想」を、言語の方よりいへば、思想は、單位語があらはす如き、物事の概念もしくは其の概念に包含せらるべき或る具體的思念、及び其等の間の或る關係的の概念が、有機的に結合したるものなり。すべて、語學上より認むべき思想思念概念等の事は、上文にいへるが如き固定形の概念と、之に包含せらるべき具體的思念とを以つて、有機的——（すなはち、單位文にあらはさるべき思想狀態）——或は無機的——（すなはち、單位語もしくは文を成さざる程度の語の叢りにあらはさるべき思念狀態）——に心中に引接鹽梅したるものを、內的言語として表現せしめたることを意味し、之を聲音文字等の機關を借りて外的言語として表白したるものを——（其の內的言語との表裏形影の間に於いて）——言語と認むべきものなるが故に、其の內的言語を成すものと對照して、外的言語を研究する立脚地より起して、其の外的言語に寫さるべき、心的狀態、すなはち、內的言語を成すものを思念思索すること、これ、吾人の正に取るべき針路にして、今の普通の——（すなはち西洋系統の）——心理學者が研究する對象とは、頗ぶる對象につきての氣分を異にし、頗ぶる觀察の立脚地を異にするものなり。——（西人の研究、必しも言語を度外にするにあらざること、其の名目に觸れたる心理學上の大著あるにても明なれど、余がいふ如き意味に於ての語想相關の研究に觸れたるものを見ず。或はこれあらむ。管見いまだ及ばず。）——然れども、言語が、既に人の思想を覆育する最上の機關にして、これなくんば、人の人たる完全の狀態に達すること能はざりしにて、今も、これなくしては、殆ど人の人として立つ所以の心理狀態を維持し難きものなる以上、吾人のいふが如き立脚地より心理狀態を研究することが、如何に有意義にして、そが、理想せらるべき未來の心理學界に於いての如何なる地位を占め得べきものなるかは、おのづから明なるべきことなれど、現在の學界に於いては、暫く、普通の心理學者とは相異なる立脚地に立つものとして、語學的の立脚地を維持するに安んずる外なかるべきものなるが、其の言語本位の心的現象の研究が、決して、學界の異端なりと言はるべきものにあらざるは、分明なるべし。これはたゞ、この條目につきていふにはあらず。爾後の研究の表白に於いても、すべて、皆斯くの如くなるべきにて、上章にいへる所にも、既に、屢々普通の心理學者等のいふ所と其の立脚地を異にし、從つて術語の稱呼用法を等一にすること能はざる、必然必至の運命を負ふことを、事實の上に示し居るものなるが、余がいふ所に不條理なる點あらむを指摘していふらむ場合以外に、普通の心理學者等の言ふ所と異なるを責むる者あらば、そは、西人の足跡にのみなづむ者にして、獨創的の研究といふことを知らぬ人なるべし。」

さて、單位語と單位文との定義は、右にいへる所に依りて明なるが如くにして、單位語は、文を組み立つる單位としての意味の最小なるものなれど、要するに、其の意義は或る概念をあらはすを本義として具體的の思念をあらはす方にも用ゐらるゝものなれば、其の本義に於いて、すべて概念本位のものなり。又、單位文は、其の概念本位なる單位語の有機的に結合したるものにして、其の構成成分を單位語より大なるものとして認む

る場合にても、其の成分は、やはり單位語の叢りに外ならざるが故に、其等の結合なる文は、結局同じ道理に歸するを以つて、其の「單位文」にあらはさるゝ思想も、單位語もしくは其の叢りを以つて組織的に組み立てられたるものに依りて表白せられ、內外一致と見らるべき眞理と、其の習慣性とに依りて溫釀せられ居る以上、言語にあらはさるゝものとしては、また、概念本位のものといはざるを得ざるものにして、從つて、其が表白の符徵的機關として認めらるゝ言語なる單位文其のものを、概念本位なりといはざるべからざること、固より明なり。されど、なほ少しく立ち入りていへば、單位文の內、全く概念をあらはす目的の文あり、――（例へば、「人は動物の一つなり」といはむが如し）――實事實相を其のまゝにあらはす目的の文あり、――（例へば、馬の馳するを見て「馬かなたに馳す」といはむが如し）――其の實事當相を其のまゝに寫す目的にて使用するものにありはて、概念本位と言ひては、やゝ會得し難き傾向あるべけれど、其の思想言語の關係の性質上、かくの如きものも、其の實事實相が、其のまゝ言語を成すにはあらずして、――（もし、直ちに之をあらはすものとせば、そは、具體的言語時代の現象其のまゝのものと成るべく、現存現行の言語の性質とは矛盾したることと成るべし）――一度內的言語の有機的組織を成せるものとして心界に表現せられたるものが、聲音文字に寫さることと成る、人間言語の原則に支配せらるゝは、動くべきことにあらざれば、如何に實事實相につきていふ氣分のものなりとて、其の實、其の實事實相よりは間接に、其の實事實相につきて心中に生產したる影像の表白なる其の言語は、皆、一種實事實相につきての概念を成すものなりといはざるを得ざるを知るは、難からざるべきものにして、――（實事實相に擬せられたる、其の概念本位のものの意義を轉換して、更に、實事實相を具體的にあらはす方に適用すること、なほ、「白き馬」「長き日」といふ概念を、實際に見居る實物に適用して「白き馬」「長き日」といふが如しと知るべし）――單位文にあらはされたるものなりとて、すべての言語は、皆、概念本位のものなるを爭ふべきにあらず。然れども、單位文の類は、言語が臨時に起す有機的の結合にして、其の結合は、忽ちに解折離散せしめられて單位語等に復歸せしめらるゝ習ひを有し、單位語の如く固定的の鮮明なる印象を起し惡き傾向ありて、事實上、單位文の實事實相に關するものは、其の實事實相をあらはす目的を以つて運用せられ居るものなることは、疑ふべきにあらざるが故に、其の關係上、直ちに之を概念の表白といはむは、――（一々心相を內省するにあらずして應用的氣分にのみ沒頭して言語を使用する惰性の人の間には）――頗ぶる了解し難き趣きあるべし。かゝる惰性の內に無我夢中に言語を使用する人の氣分中には、始原の往古に具體的の言語の行はれたりし心性的惰性を系引して、幼時以來、既成の言語を模倣的に習熟し、自然的訓練によりて運用せしめられ來る方より、言語の運用上、多く、內省することに慣はず、從つて、言語の性質を分解的に會得し操縱するに勉めずして殆ど、言語の本性が有する、分解總合互充の氣分を忘るゝこと多きに由るものなり。然れども、全く具體的言語時代の氣分なるにはあらず。この現象は、概念本位の言語の長き傳襲的使用に慣れ來り、使用上にも、餘りに習熟したる關係を有すると共に、對象の會得にも、餘りに簡單なる迄に親密の關係を有するより、其の表白に至る迄の順序、餘りに敏達にして、殆ど思慮を費すを自覺するに暇あらざる故にして、性質上の擬着に近き觀あるも、實際の擬着にあらざること、其の對象の會得の餘りに簡單ならず親密ならず、從つて、言語に發表する上にも多少の考慮を要するものに於いて經驗する時は、直ちに其の心的

經過を內省し得て、理路分明なることと成るべし。」されば、純理的の研究ならざる立脚地よりいへば、實事實相をあらはす爲の文を提げて、之を概念の符徵として使用せられたりといはむこと、情實上、やゝ穩健ならざるべし。この故に、普通に說明すべきものとしては、概念の符徵として見ることは、單位語もしくは文を成さざる單位語の叢りの文の成分を成すものに止めつべきものにして、其が定義として直接に利用せられむことは、便宜上、避けつべきものなれど、兎にも角にも、今の如き狀態に達したる言語が、其の本義に於いて、——(少くとも單位語より推したる觀察として)——概念の符徵として立つものなることは、決して、忘るべからず。

〔純理的にいへば、勿論、人間の言語は、概念の符徵として立ち、人の思想——(單位文に當るもの)——及び思念——(單位語もしくは其の叢りの文を成すに及ばざるもの)——を抽象的にも具體的にも任意に表現し得べき機關たるものなりといふことに於いて、寸毫も躊躇すべきものにあらずと知るべし。既に、概念の符徵として立つ。これ、下に述ぶるが如く、思想を思想其のものとして表はすことを得る所以なりとす。」

されば、如何なることを以つて、言語の定義とすべきかといへば、既に內的言語を其のまゝ外的言語として表白するものならむ以上、聲音もしくは文字等に依りて表白せられたる外的言語の定義としては、言語は、思想(もしくは、思念)を思想(もしくは、思念)其のものとして表白したるものなりといはむは、よく其の性質を擧げたるものなるべし。——(こゝに「もしくは思念」と註記するは、「思想」を單位文以上にあらはさるゝものなりとする語學上自然の規約に從へば、其以下の思想成分は、「思念」の如き語を用ゐて區別すべき自然の心要あるが故なり。されば、この「思念」の意義は、言語思想相關の研究上、特に規定する用法と知るべし。又、特に「思念」を擧ぐる必要なき場合には、其の註記は、當然除去せらるべきものなりとす。)——何となれば、他の、廣義の「言語」に入るものは、聲音を用うるもの、例へば獸畜の言語の如きは、生理的の作用もしくは動作として、之に、或る情感意志を寓するに過ぎず、他面、繪畫彫刻等の如きものも、其の成立の關係上、或る外界の形象を其のまゝに現出せしむべきものなるを本體とし、之に、或る意義を寓示するに過ぎざるものにして、一も、思想を思想其のものとして表白する機關たるものなく、かゝるものは、人間の言語、すなはち、內的言語(＝思想、思念「思索作用思念作用其のものにあらず」)を其のまゝに表白する言語——(すなはち、今こゝに定義を要求する言語)——以外にあり得べきものにあらざればなり。而して、其の功用よりいへば、內的言語が外的語語と成り、外的言語が又內的言語と成り、形影表裏、おのずから一體を成す場合多き方より、其の外的言語も、また、思想を思想其のものとして表白する機關たるのみならず、同時に、思想覆育の機關たるを失はず。されば、外的言語を主として內的言語より區別する場合ならむには、必しも、覆育機關たるをいふを要せざるべきが故に、其の功用を定義中に數ふる必要なかるべし。これ、すなはち、普通語學的觀察の立脚地に立つ言語の定義なりとす。

之に對して、內的言語の定義として立つべきものは、思想思念を思想思念其のものとして內界に表現し、以つて思想思念其のものを覆育する機關たらしめらるゝものともいふべく、かくて、內的言語を主として見むには、思想の覆育其の主と成り、外的言語を主として見むには、思想表白其の主と成るべきものなれども、之を一體として見む場合には、功用上の兩面は固より主客の別なきことと成るべく「思想を思想其のものとして表

白す」といはむは、表白といふが、外界に示す義を成すが故に、其の「思想」といふに當る內的言語を度外に置く嫌ひあるべきを以つて、言語は、思想が思想其のものとしての表現を成すものにして、內的にも外的にも表現せらるべく、思想表白の機關とも成り思想覆育の機關とも成るものなりとして定義せらるべきものなるべし。この場合に於いては、其の思念はすべて、語學上の制限を受くべきものにあらざるが故に、「思想」といふ概念には、單位文に當るものを指すといふ約束の必要なきを以つて、「思想」以外「思念」を擧ぐるを要せず、「思想」の概念中に、自然に其の構成成分たるべく認めらるゝ「思念」を包括する氣分を以つていふものなるが、之を、最簡單に言ひ得べき定義を立てむと欲せば、單に「思想の、思想其のものとして表現せられたるものなり」と言ひつべきなり。

「思想」を純正なる語學上の「思想」に限ることとし、單位語、もしくは、文を成すに及ばざる單位語の叢り、及び、之に該當する思念をも、定義中に包括せむとならば「言語は、思想もしくは思念の、其の思想もしくは思念としての表現なり」といふべきことと成るべし。この定義は、內的外的二種に亘りても、外的言語のみにも遵用し得らるべきものなれど、普通語學的の研究には、却つて、この「思念」を入るゝを要せず。何となれば、普通の語學すなはち文典上の知識にては、單位語は、皆、單位文を成すべき成分として豫想せられ、其の豫想の下に其の性質及び理法を研究せらるゝことと成り居ればなり。

「言語」といふものの概念につき、此丈のことを說明し置けば、今は、抽象的言語の各紀の論述に移り得べきなり。〔なほ、多少の說明を要すべきものあれど、そは必要なりとする所々に說くべし。〕

一六

間接抽象作用概念作用、既に自由に營爲せられ、事物につきての思索漸く活動し、生活法漸々に進歩し、其等の刺激に依りて、精力が言語に集中せられ行く時代は、語彙が漸々に增殖し行くべき時にして、一塊的具體の言語が、漸々と、其の思索作用並びに增殖し行く語彙に依りて、分解的抽象的の言語に醇化し行くことと成ることに依りて、言語大成期に入る過渡時代としての、抽象的言語の第一紀を成すことと成れりしは、既にいへりし所に依りて明なるべし。

言語の大成期といひても、其は一朝一夕に成功を見るべきものならねば、其の間に、また種々の階段あるべきにて、條理上より之を見れば、上文既に一言したる語根發展時代は、まづ、其の始めを成すべきものなるなり。語根發展時代とは、果して如何なるものなるか。

まづ、語根（すなはち Root）とは如何なるものなるかといへば、單位語の基礎と成るべき根抵たるものにして、今のわが國語にていへば、「しろし」（白）「しろく」「しろき」「しらむ」「しらが」（白髮）「しらくも」（白雲）の「しろ」（「しら」は「しろ」の母韻の轉移）の如く、「はやし」（早）「はやく」「はやき」「はやむ」「はやおき」（早起）の「はや」の如く、「ひとつ」（一）「ひといろ」「ふたつ」（二）「ふたしな」の「ひと」「ふた」の如きものにて、語根にも、（甲）一語としても用ゐらるべきもの、すなはち、この例の如きものと、（乙）一語としては用ゐられざるもの、すなはち、「しる」（知）「しく」（敷、布）「しむ」（占）の「し」「ふる」（振）「ふむ」（蹈）「ふく」（拭）の「ふ」の如きものあれど、

この(乙)に屬するものは、始原時代は勿論、後代とても、餘程智能の發展したる民族ならでは、發展せしめ得べきものならざれば、今、こゝには關係なきものとして、暫く之を措き、(甲)の種類のものにのみ注意することとすべきなり。

語根が如何にして起るかといへば、在來言ひ來りたる語彙――(具體的言語時代以來のものより成れりしも、この時代に新に言ひ出されたりしも)――があらはす概念の保有する屬性と、他の概念が保有する屬性と共通する關係あるを見出しつゝ行く時は、おのづから、同じ言ひ方、同じ傾向の言ひ方に依りて、之を呼び慣らし呼び來ることと成る方より、或る共通の屬性を有するものには、全部或は一部、同一の呼び方を以つて、其の語彙を成すやうに成り行くは、自然の事なるが故に、其の方より來りて、其の語彙中に、或る屬性の最概括的に思念せらるべきものを指す、語彙制定の根柢と成るべきものの發展を見ることと成りて、屬性といはむよりは、一種「品性」の概念として、(一)其のまゝにても、又、(二)其と他のものとを併合せしめても、語彙を建設增殖し行くことと成るは、自然の勢なり。

今の、わが國語のうちより、例を取りていへば、「しろ」といふ品性の概念まづ成立すれば、其の品性を有する物、すなはち、白き色彩を有する物質、及び、其の色彩を有する物體をも「しろ」と言ひあらはすこと、例へば、「白色の染料」「白色の土」「白色の犬」「白色の人」をも、皆、「しろ」といひ、語形は一つなれど、其々別々の語彙を成すが如きは、(一)の例にして、「しろうま」「しらが」(=「しろかみ」)「しらこ」の如く、「馬」「髮」「子」(魚の胎中の子の義にて)と取り合せて、新しき語彙をつくるが如きは、(二)の例なり。此は、勿論、今の語に依りてかゝる時代にあり得べき場合の例を擬議するに過ぎざれども、かゝる順序を蹈みて、漸次に後紀に述ぶるが如き順序を遂うて移り行くにあらざれば、推理上、他に下、後世に遺留するが如き言語の展開し行くべき途なきにて、反証的の條理の見出されざらむ以上、信せざるを得ざるべきことなりとす。但し、この「語根」といふものは、この時代にありては、今の「語根」の概念とは、全く同一なりとはいふべからず。何となれば、この語根といふものも、後紀に入りて、根辭の發展を見るにあらざる以上、今の如き語根の氣分の思ひ浮べられ得べき理由なければにて、上に擧げたる例にていへば、「しろし」「しろく」「しろき」「しらむ」の「し」「く」「き」「む」の如きもの、すなはち、根辭の發展なき時は、こゝにいふ語根は、其のまゝにて一語を成すか、既製の他の語と併合する迄にて、――(この他の語と併合するものは、今の複成語すなはち Compound word に當るものにて)――今の語根の如き、單位語中の語幹(=Stem)たるべき特別の氣分を以つて、反省的に之を迎へ之を會得すること能はざるべきものなればなり。(「語根」「語幹」の概念の關係は、本論に入りて說くべし。)されば、とて、意味、すなはち、思念の性質よりいへば、明に、新しき種々の概念を生産する根柢たるものにして、概念中の概念ともいふべく、品性の概念ともいふべきものとして、新しき時代の特徵として發展したるものにて、其をあらはすべき符徵たる語彙は、實に、語根の過渡時代のものといはむよりは、寧ろ、醇化せられざる語根として、いまだ羽蟲として蛻化せざる蟬蜻蛉の仔蟲狀態の時の如きものに比すべきなり。かゝるものの發展、これすなはち、抽象的言語の第二紀として立つものなり。或は之を第一紀に附屬せしめて紀別を成さざるも、亦可なるべし。かくの如き時代が多くの年月を續くる間に、自然に展開すべきは、すなはち、根辭發展の時代なり。

一七

根辭とは、單位語の根となる、言ひ更ふれば、單位語を組み立つる根抵と成る、補助の辭の義にて、委しくは、本論に至りていふべけれど、ほゞ英語の Affix といふ語を宛てつべきにて、普通にいふ Prefix と Suffix とに Infix を加へたる程のものなり。されど、この Infix は、國語に依りては無きもあり。否、無き方多し。わが國語の例にていへば「と-つ-くに」(外つ國)「うち-つ-くに」(內つ國)「あま-つ-かみ」(天つ神)「くに-つ-かみ」(國つ神)の「つ」、「み-なかみ」(水な上)「み-な-もと」(水な源＝源)「み-な-と」(水な所＝水な門＝港)の「つ」「な」の如きものなれど、この種類のものは、根辭の始源狀態に於いては、大概發展せざりしものなるべきが故に、まづは、Prefix と Suffix との二種と見て可なるべし。之を「接頭語」「接尾語」と譯する人あれど、さては、單位語の如く聞えて宜しからず。「さればこそ、かゝる譯語を使用する人の著述を見れば、此と全く別種にして、單位語中に入るべきものを迄、混同して同類とし居るなり。用語の當不當が、概念其のものを迄損傷すること、斯くの如くなる時は、其の取捨の愼まざるべからざること、念ふべきなり。」譯語としてならば「頭根辭」「尾根辭」などいふべからむか。余は「冠性根辭」「履性根辭」といひ「つ」「な」の如きものをば「接合性根辭」と呼ぶ。——(「冠」「＝かむり」「履」「＝くつ」、之を古人の語學的用語例に採る。)——今、冠性履性の根辭の例を、わが國語にて擧ぐれば、「みやま」(み山)「まごゝろ」(ま心)「さよ」(さ夜)「かよわし」(お弱し)の「み」「ま」「さ」「か」の如きものは、冠性根辭にして、「ながし」(長し)「しらむ」(白む)「かなしげ」(悲しげ)「しづか」(靜か)「きよら」(淸ら)「きよらか」の「し」「む」「げ」「か」「ら」「らか」の如きものは、履性根辭なりと知るべし。

さて、根辭の發展は如何にして起るべく、如何にして發達せしかを尋ねむには、まづ、根辭といふものがあらはすべき、意味すなはち概念の性質を知らざるべからず。根辭は、元來如何なるものなるかといへば、畢竟するに、或る關係の概念の符徵にして、其にあらはさるゝものは、或る概念間の區別を成さむとして、其の差異の點を表現せむが爲に起る關係的概念なり。其のうちに、おのづから二種の別あり。其の一つは、(ア)物象の概念につきての關係的概念にして、或る物象の概念に入るべきものを廣く見渡して考ふれば、其のうちに、或る關係の區別あることを見出すが故に、其の差異あるものを區別せむとすることと成る間、おのづから、其の概念を、廣き統括的の概念と、狹く限られたる區分的の概念とに別つべし。之をわが國語に宛てていへば、まづ、「くろ」といふ色の概念をつくり、其をあらはす「くろ」といふ語を有し居るものとせば、其の「くろ」といふ概念に入るべき色のうちに、濃き黑さもあり、淡き黑さもあるべし。こゝに、「こ」(濃)「うす」(淡)といふ屬性概念起り「くろ」といふ廣き概念に統括せらるゝもののうちに、狹く區別せられたる概念、すなはち、「こ-ぐろ」「うす-ぐろ」といふ概念を成すべし。又、既にある「青」「赤」等の色に關係して、「青みがかりたる黑」と認むべき色「赤みがかりたる黑」と認むべき色も、其の廣き「くろ」の概念中に收容せられて思念せられ居ることを見出すべし。この時に方つて、其の廣き「くろ」の概念に入るもののうち、濃き黑を標準的の「くろ」と認むる時は、こゝに、之を本位として「眞正」を意味する「ま」といふ如き符徵を加へ「ま-くろ」と言ひて、他を「うす-ぐろ」「あを-ぐろ」「あか-ぐろ」といふ對照的の概念とし、其の表出の符徵を、其々、其々の概念をあらはす

語と認むることと成るべし。然るに、其の内、「うすーぐろ」「あかーぐろ」等の如く、既に、語根、寧ろ上述の如き品性の概念をあらはす語として使用せられ居るものを繋ぎ合せたる氣分を、何處迄も保つものは、語にていへば複成語、意味にていへば複成概念の格を成す迄なれど、「まーくろ」の如く、其の對照的の區別を成す關係上、元基的に考へられたるものの、慣用上特別なる一塊として使用せられ、普通の複成語複成概念を成すものよりは、密着したるものとして取り扱はるゝ方より、それが、其の語の一種の性僻と成り、敷いて概念の性質に反響し、一種特別なる性質を、或る廣義の概念を成すものに附加して、他より識別せらるべきものと成り、其をあらはす符徴として其の語にそひ居る「ま」の如きものは、一種補助的に、廣き概念をあらはすものに添ひて、其の元基的のものたる或る意味をあらはす——（語としては）——根辭と成り、——（意味の上よりは）——其相當の關係的概念の表現と成ることと成る。こゝに、根辭は發生し、こゝに根辭にあらはさるゝ如き關係的概念は樹立することと成れりしなり。

今一つ、他の例にていへば、「山」といふものの概念をつくれば、其の概念に入るべきものの内に、大なるも、小なるも、高きも、低きもあるべく、「おほ」「こ」「たか」「ひく」の既成の品性概念を加へて「おほーやま」「こーやま」「たかーやま」「ひくーやま」などいふ、山の概念中の區別の概念をつくり、其の概念をあらはす語を、複成語につくるべし。なほ、種々の性質を認めて山を觀察する方より、例へば、重疊せる山脈などの中にありて、端の方の山外側の山などにつきて、「はーやま」（端山）「とーやま」（外山）などいふ概念と語とを複成すべし。この時に方つて、「はーやま」「とーやま」ならぬ、中心の主たる山を元基として他を見ることは、常の習ひにて、又、相當なる山を元基として小山を見ることもあるべし。かゝる時に、上にいへる「ま」とほゞ同一なる「み」といふ語、そがあらはす概念を加へて、「みーやま」といふ語及びその語にあらはさるべき概念を立つることあるべし。「みーやま」に「深山」を充つるは、無理に漢字を宛てたる迄なり。」この「み」が、また、上の「ま」と同じ關係にて、——（始めは、たゞの品性の概念なりしなるべきが）——特別の性質を成すことと成り、山にていへば、山の山らしき山を指す爲の根辭と成り、其の根辭があらはす、一種の關係的概念を成すことと成るなり。かゝるもの既に成立する時は、必しも、廣き概念に入る諸概念中の元基といふべきものならずとも、或る概念の中に區別せらるべき種々の場合あり得べき時の、其の或る特別なる概念を、他の種々の場合の概念より區別する爲の根辭、及び、其があらはす關係的概念を成すことと成れるものも起るべきなり。例へば、「さ」といふは、元來、「狹き」「小き」等の品性をあらはす概念をあらはすものなりしなるが、「さ夜」「さ野」「さ百合」「さ月」「さ蠅」などやうに使用せらるゝものは、其の始めの意味より轉じて、其の「夜」「野」「百合」「月」「蠅」等の或る概念に入るものの、うちの、或る特別のものを狹く限りて指す義に移して、其の關係的概念をあらはす根辭として使用せられ居るが如き、これなり。「上の「み」の如きも、意味上、後には讃美的の關係的概念とも成り、表敬的の關係的概念とも成り、又、この「さ」の如きも、こゝに説明したる如き意味の例を成す根辭の外に、「狹き」「小き」等の義の品性概念をあらはす語根として他の語と複成的の語を成しゝものより起りて、其の意味のまゝなる根辭としても使用せらるゝことと成れりしもあるなり。」

以上は、冠性根辭の例なれど、履性根辭にても、粗同じ樣に、但し、多くは、主たる概念を廣め、或は其の概

念擬似の或るものを、眞正なる元基と認めらるべきものより區別する關係概念と成すを常とす。「きよ-ら」「きよ-らか」が、「ら」「らか」にて、元基たる純正の「きよ」(清)の概念に對照せらるべき或る概念を成す、或る關係的概念をあらはす爲に、添加せらるゝことと成り、「の-べ」「やま-べ」が、「べ」(=「へ」)にて、元基たる純正の「野」「山」の概念に對照せらるべき或る概念をあらはす爲に添加せらるゝことと成り居るも、――(語としても、其の語があらはす概念としても)――上に說明したる例にて類推すべきなり。「こゝに、一々說明すれば、全く國語學の知識の開陳と成るべきが故に、一々言はずと知るべし。」

この履性根辭にして、比較的早く多くの民族間に發展したりと認むべきは、物の複數なる關係概念をあらはすものなるが故に、特に、其の關係的概念生產の順序たるべき心的過程につきて一言せむに、既にいへるが如く、「一〇本註參照」或る種類中、單位の若干數を單位に準じて考ふる方より、其の若干數のものの概念をつくることと成り、「複數」といふ屬性概念をつくり得たりとすれば、其の種類の物を指す概念の符徵としての語を使用して、具體的にも抽象的にも、其の一個すなはち眞の單位の場合をも、其の複數の單位に準じて思念せらるゝ若干數の場合をも、共に表白することと成るが故に、其の間の語義の混雜を防がむとする必要を感ずることと成るべく、斯くの如き場合に於いて、其の若干數の方に、複數の關係的概念をあらはすべき符徵を加へて一語を成すこととし、其の語義を成す概念を擴めて、其の間の區別を示すこととするは必然の順序なるべし。わが國語の例にていへば、かゝる功用を成すものは、「われ=ら」の「ら」、又は「犬ども」の「ども」(此等は、根辭に擬して使用せらるゝものなれど、わが國語の性質上根辭とは成らず、なほ一語として存するものなるを以つて、正しく、こゝの例には合はざれど、暫く之を擧ぐ)の如きものなれど、わが國語にては、複數をあらはすことは、必要なき限り之を用うること、殆ど無きを以つて、今の例に依りて此の古き時代を推すにも、英語などの如く、常に複數の概念をあらはす國語につきて、其の所謂名詞の複數の符徵としてSを添ふるものなどを取りて、擬推的に想像するを便とすべきなり。但し、この當時に方つて、所謂動詞に當るべきものに單複の符徵の添加せらるゝことなきは勿論、所謂名詞につきても、すべてに單複を別つべき語形をつくりしものにはあらず。必要を感ずる場合のみのものなりしなり。すべてに亘りて複數の符徵の大に發展したりし國語も、器械的に其の符徵をそふることと成れりしは、言語大成の完結時代以後の事なり。「後章にいふべし。」

物象の概念につきての區別的關係の根辭に對して、他の一種類を成すものは、(イ)構想的結合に關する區別的關係概念をあらはす根辭にして、其の內に、また、種々の別ちあり。然れども、そは、發展の順序が、確に物象の概念につきての區別的關係の根辭に後るべきものにして、其の構想的結合に關する區別的關係は、必しも根辭に依りてのみ表白せらるゝものにあらず。他の或る關係をあらはす單位語を、補助を成す一種の單位語として、改造或は特製し、之を以つて其の區別的關係をあらはすものあり。而して、其の十分なる發展は、皆、次ぎの言語大成完結紀なる抽象的言語の第四紀に入りての事なれば、こゝには、たゞ、一端の例に依りて、この種の根辭の漠然たる概念を成すべきものを示すこととせむに、まづ「雨强し」「水清し」「雨强く降る」「水清く澄む」「强き雨地を洗ふ」「清き水あり」といふ文につきて、「つよ」「きよ」等の品性の概念をあらはすものが、或は文主につきて言ひ述ぶる職責を以つて、其の構想的結合すなはち有機的結合を成す場合なることを表現する

爲に、同じ品性の他の職責の場合と區別せらるべき關係なることを示す符徵として、「し」てふ根辭を用ゐて單位語を構成し、又、構想的結合の成分たる或る部分が、文主につき言ひ述ぶる以外の、或る他の職責をあらはすことを表現する爲に、同じ品性の他の場合と區別せらるべき關係なることを示す符徵として、「く」又は「き」の如き根辭を用ゐて單位語を構成し、其々の單位語が有する其の獨立の概念以外に、其々の區別的概念を有することを示すが如き、これなり。別に、國語にて「父我を愛す」に對して「父我を愛しき」といひて、其の「愛す」として言ひ述ぶる職責を充たす單位語が、たゞ言ひ述ぶる役目を充たすことの外に、其の「愛す」てふ事が、今然爲る由の意味ある場合なるに對して、既に過ぎ去りたるものとして其の「愛す」といふ動作のありしことを表はさむとし、「き」といふ補助の單位語を加へて「愛しき」といふなるが、其の意味上の區別的關係をあらはすものとしての「き」は、補助の單位語にして、わが國語にては、かゝる場合に根辭を用ゐざれども、國語に依りては、かゝる場合を根辭にてあらはすものあり。假に、この「き」が別の單位語なるにあらずして、「きよ」に「ら」をそへて「きよら」（清ら）といふ其の「ら」のそふ氣分位にしたるもの、もしくは、其よりも少し緩き事、「われら」（我等）「甲、乙、丙、丁ら」の「ら」の如き場合と「きよら」の「ら」との間に出入する位の關係にてそふものとして想見すべきものなり。「かゝるもののことにつきては、下章にいふを待つべし。」一般的にいへば、構想的結合の關係に屬するものの内、上例「し」「く」「き」の如く純粹に構想的結合の關係をあらはすものよりは、この意味の區別的關係をあらはすものの方、多く往古の諸民族の間に行はれたりしにて、其をば根辭にてあらはすものの多かりしなかに、わが大和民族の祖先の如く、補助の單位語にてあらはすもの――（上例の「愛しき」の「き」の如く）――もありしこと、下にいふが如くなりしなり。

以上の例解、固より皆、今の例にて假に之を擬議するものにして、抽象的言語第三紀時代のものの如き、今は全く知り難きものなれど、其の内、構想的結合に關する區別的關係概念と其の符徵たる根辭との如きが、物象の概念につきての區別的概念及び其の符徵たるものに後るべきは論なく、この時代のものとしては、物象の概念につきての區別的關係概念の符徵を主として、――（其も必しも多數なりしにはあらざるべく）――構想的結合のものは、――（最優秀なる民族の間にも）――極めて僅少にして、或は有りや無しやの境にありしものなるべし。されど、兎も角も、根辭及び之にあらはさるゝ區別的關係概念と其の符徵とが發展の緒に入る時は、其の根辭として立つものに對して、其の幹部たるものにつきて、始めて「語根」といふが如き氣分、鮮かに心中に生起することと成り、今の「語根」の概念の如きものが、根深く且つ數多く、心中に種ゑられ行くことと成りしなるべきは、十分に想見せらるべきものなりとす。

されど、この語根の概念と――（この時代にありては、語幹 Stem すなはち語根 Root なりしにて、其の間の區別は、勿論注意すべき程のことなかりしものなるべし）――根辭の概念とが、必しも、抱合して一つの單位語を成すものと思念せられずして、其の間を五十歩百歩の間に置きて各一單位として思念したりし民族もありしものなること、すべて下にいふ所に依りて知るべし。（其の構想的結合の意味の區別的關係のものにつきては、わが國語が、實に其の標本たるべきものなること、實に、こゝの本文中にもいへるが如しと知るべし。）

かくて、抽象的言語の第三紀に於いては、構想的結合の區別的關係概念をあらはす根辭が、殆ど有無の間にありしものなるにもせよ、――（又、必しも區別的關係の概念を、語根と共に抱合したる一單位の語を成すべき根辭とはせず、別々の單位として聯結するに止むる民族ありたるにもせよ）――或る物象並びに品性の概念につきて、區別的關係概念を發展せしめ、之を思念し之を內省して思索することと成れば、其の類推的波及的觀察の進行は、言語の發展に伴なひて、其の構想上の關係的意義を區別すべき必要を感ずることと提挈して、漸々、內的言語のすべてに亘りて、之を分解し之を綜合し、之を敷衍し之を補苴し、以つて外的言語を大成し行き、構想的結合の根辭、――（もしくは、之に當る補助の單位語）――を發展せしめつゝ、彌々其の種の概念を增殖し行かしむることと成るべきは、自然の勢なり。こゝに於いて、第四紀時代の成立を見ることとは成るなり。

根辭――（もしくは、之に當る補助の單位語）――の發展、思索の方面にていへば、區別的關係概念の發展が、其の始めに於いて、主として、物象の概念間の區別より起りしことの疑ふべからざるは、概念其のものの發展が、まづ、物象の概念より始まりしこと、上章（一一）にいへるが如くなるに準じても知り得べきものなれど、元來、物象、すなはち、物事及び之に屬する形象は、多くは、眼に訴へて、直ちに、其の形象を一定の狀態に認め得べきが故に、其の概念をつくり易く、從つて、其の概念間の關係的區別概念をつくることも成し易かるべきものなるが、構想的結合の關係に至りては、元來、浮沈變幻涯りなき心的現象を對象とするものなるが故に、如何に、內的言語としておのづから固定的に之を內省思念し得べきものと成り來り居ればとて、自然、物象間の關係的區別概念に後るべき理由あるものなれど、實際に於いて、內的言語を外的言語に伴なはせて使用し、心的現象を對象として思念思索すること繁く成り來り居る以上、餘り複雜もしくは幽眇ならざる性質のものに於いて、思索の仕方思念の言ひ表はし方に、反省的に區別せられざるべからざる關係を認め行くに至るべきは、自然の勢にして、言語發展の趨勢と思索展開の氣運とは、漸く多く、構想上の關係的意義を區別すべき必要を――（內的言語としても、外的言語としても）――思想言語の上に感ずべきことと成るが故に、こゝに、必しも根辭ならずとも、兎に角、必要に應じたる關係的區別概念と其の表現法との發展が、大に隆興すべきことと成り、關係的區別概念のなかにも、構想的結合に關するものの表現法が、思念思索の上よりも、思想交換の上よりも、最切要を感ずることと成りて、人が、彌々以つて、其の精力を言語に集中すべき時代を現出し、言語といふがなかにも、この構想的結合に直接或は間接に關係する符徵を成す機關的部分が、言語につきて集注せらるべき精力の集中點と成るは、また自然の勢にして、民族の分裂に伴なふ民族心理の異同は、おのづから、種々の異同ある樣式を選んで、其々の方向を取ることと成り、其々の國語を建設することと成れりしなり。これ、今日の、學者を以つて自ら任ずる者すらに、解し得がてにする構想上の關係的區別概念の表現法が、其々の國語の或る樣式を成す符徵として、あらゆる國語の上に、遠く史前悠漠の創古に建設せられて、――（種々の變遷を經ながらも）――今日に遺留せられたりし所以なり。今の世に方つて、誰か、この創古の祖先――（特に、完全なる組織の言語を遺しゝ民族の祖先）――の頭腦を蔑視して蒙昧野蠻といふ權利あるものあらむや。

こゝに、この構想的結合の關係的區別概念につきて、最注意すべきは、かくの如きものが、一度發展して一定の樣式を成し思念思索及び其の表現の關鑰を掌ることと成れば、たゞに、其の思想表白の樣式を樹立するの

みならず、內的言語として、思想みづからに、其の言語の樣式と相伴なふ一種の範疇的氣分をつくり、一方には、言はむとし述べむとする所を、之に依りて定むる方より、人のあらゆる思想を掣肘し、既にいへる如く、言語に依りて發展すべきものなる思索は、思索其のものが、みづからつくり、又つくりつゝある、構想的結合に關する言語上の範疇に依りて支配せられ行くことと成り、その傾向は、言語の大成に依りて大體の形勢を定むると共に、いよ〳〵顯著堅確のものと成りて、或る民族の思想は、殆ど全く、其の既定の言語の範疇に支配せられ、其の外に出づること能はざるに近きものと成り、民族心理の研究にも、或る國語の研究にも、この關係的範疇を成す言語の機關的部分が、最重要なるものと成るにて、今も一般に認められ居る如く、この範疇――（すなはち、構想的結合を中心としたる一團の範疇）――をあらはす樣式の、言語上の約束が、言語の會得上、最緊要の衝點と成り鍵鑰と成り居るにて、西人の所謂文典上の形式すなはち Grammatical form といふものは――（國語に依りて、內容の出入參差は多けれど）――すなはち、之に當るものなり。この西人の語は、其の意義にていへば、文典上の關係概念をあらはす語形――（單位語の形狀上の、之に伴なふ變化）――の區別を中心としたる樣式を指すものなれど、廣く世界の國語につきていふ時は、其の「語形」といふ制縛を脫離して、たゞ文典上の樣式（Grammatical formula）として思念せらるべきものなりとす。

この文典上の樣式上の性質を理論的に統說することは、第二部なる本論に於いてすべし。されど、こゝに一言し置くべきは、人は空氣を呼吸することなくしては、一刻も生活し得べからざるものなれど、飲食、特に味を賞し得べき飲食の方にのみ主たる注意を向くるが如く、構想的結合に關するものも、純粹なる思想構成の成分に關する關係的概念よりは、――（上の例にていへば「し」「く」「き」の如き關係をあらはすものよりは）――或る意味上の區別の著しき影響を直接に認め得べき方に、――（上の例にていへば、「愛しき」の「き」があらはす關係の如きものに）――注意を向け易く、從つて、發展の趨向も、その注意を向け易き方に、多く展開し行くべきものなるを知り置くべきものなりといふことなりとす。

凡そ、世界の國語――（第五紀內の中程に方るべき今の國語）――は、大小優劣、殆ど際限なき迄に多けれど、此等の國語の研究につきて、近代に於ける西人の活動は、頗ぶる注目すべきものあり。彼等は、久しく希獵羅典の古典及び聖書の研究に沒頭して、其等國語の講習其等知識の收得を以つて、紳士學者の第一の必要第一の資格としたりしこと、わが德川時代に於ける漢文の講習に似て、言語の性質上、漢文が殆ど文典上の研究を要せざるに反し、――（漢文が人間言語の發展史上の違例を成す特殊加工の言語なること、後にいふを待つべし）――必ず文典上の知識を主とせざるべからざる關係上、其等の國語の文典の研究を以つて入門第一の事としたりしかば、其の豐富なる範疇的概念に依りて耕されたる彼等の頭腦には、知らず〳〵の間に、容易く文典上の觀察を異國語に施し、異同相推して之を會得すべき素養をつくり居りしなるが、之に加ふるに、彼等の一般的の宗敎なる基督敎の宣敎師が、献身的に其の神敎を宣傳せむが爲に、あらゆる危險を侵して世界のあらゆる地方に到り、其々の國語を研究し、其々の國語に其の聖書もしくは讃美歌を譯し、殆ど到らざる隈なき迄に種々の國語を耕したりし、其の信仰上の熱誠と相需つて、あらゆる國語の眉目は殆ど皆世間に傳へらるゝことと成り、更に最近に及んで、之に學問上の洗禮を加へて尋釋研究せむとすること、漸く緒に就き來りしに對し、殆

ど文典上の研究を要せざる特殊性ある漢文講習の氣分に慣れ來り、また、いまだ、奴隷的に之を崇拜したる時代の惰性を脱することを知らず、文典上の知識を喪如して、文典上の研究を必要とする自國語、――（最文典上の樣式に富み、且つ其の性質の優秀群類を拔くことに於いて、殆ど世界唯一の珍とすべき自國語）――の學問的研究を怠り、其の種を蒔き其の果を收むべき耕耘の道を等閑にする習慣に安んじ居る、わが國民は、いまだ、言語の研究、特に、元來習熟し考察するに難かるべき外國語の研究に、――（徒らに、西人の言語を崇拜し機械的に之を講習する外）――何の貢献を致すにも及ばざる境涯にあるを以つて、吾人は、今の處、あらゆる外國語に關する研究上の實際的の資料を、一々西人の書に取らざるべからざる弱點を有するものなるが、西人の研究は、また、其の民族心理の或る弱點より、完全に、世界のあらゆる國語を統括し、理論的に之を整調する方には大なる短所を有すること、下章より漸次本論に入りて論究の歩を進め、端的に立證する所あるべきに依りて見るを得べきが如くなるものあるを以つて、即今に於いては、まづ、彼我の長を集めて、――（わが民族心理より得來る天啓の指示に依つて、彼が提供したる資料を統紀して）――條理紊れず統紀法に合ふ知識の大成を招來するを期し、始めて、世界のあらゆる國民のあらゆる國語の、完全なる對照完全なる系統を、異日に成就し得べきものなるを知り置くべき必要あるものなるが、其の西人の研究を基とし、學理的の觀察と信ずるものを裏面に包みて、世界の國語を大略に分括し、以つて、實際的便宜的の分類を成すこととすれば、まづ左の如きものとして、統括的に之を見ることを得べし。（但し、言語の分類の難きは、なほ、動植物の分類の如く、性質頗布、共に相錯雜し相出入するものにして、限界必しも分明ならざるものありと知るべし。）

（一）日本語族（すなはち、純正分示組織の言語）（Language of pure analytic system）

（二）漢語及び其の類族（すなはち、機關不調分示組織の言語）（Language of analytic system of incomplete organization＝So called ‘Isolating language’〔單獨語、獨成語〕）

（三）ウラル、アルタイック語族及び其の類族（すなはち、添成成語組織の言語）（Language of agglutinating system＝So called ‘Agglutinating language’〔添成語〕）

（四）印度歐羅巴語族及び其の類族（すなはち、訛成轉形組織の言語）（Language of inflectional system＝So called ‘Inflectional language’〔所謂、屈曲語〕）

（五）アメリカン、インディアン語族及び其の類族（すなはち、連結團成組織の言語）（Language of incorporating or polysynthetic system＝So called ‘Incorporating language’〔抱括團成語〕）

此等の性質及び發展の順序に關しては、下章にいふ所に依りて、其の綱領を覗ふべく、其以外の事につきては、本論の始めに於いて、或る程度迄之を細說すべけれど、こゝにいへる吾人の弱點は、重大なる關係を、言語の進化、及び、主要なる國語の範疇概念の上に有するものの外、進んで多くを說くこと能はざるものあり。されど、西人研究の欠陷の、本稿の研究を誘出したる所以の鍵鑰に當る部分につきては、比較的精細に論述する所あるべし。

露骨に表白すれば、西人の理論的の着眼、其の言語につきての民族心理の關係上、既に、甚要領を得ず肯綮に中らざるものあるが上に、特別なる文献を傳へざる言語につきては、西人の得たる資料も、必然的に、頗

ぶる空乏にして不完全なるもの多きを以つて、西人の書のみに依賴して資料を搜ぐる外なき、憫むべき吾人の今日の立脚地は、吾人の新しき觀察點より見て、如何に之を契得し取捨すべきかに苦しむもの多きが故に、種々の國語の性質及び地位につきて、妄に解釋を附し妄に說明を加へ難き點、あらゆる方面に多し。要するに、西人の研究も、彼等自身の語族及び近親語族に於いてのみ、最信すべく、其の他に於いては、現今の狀況、いまだ十分に信ずべきものならざること、彼等がわが國語の上に加へたる解說の如何に誤りたるもの多きかを以つても、他を推すに十分なるべく、原料たるべき文獻の欠如したる國語につきては猶更の事なるを想見するに足る。然るに、種々の國語につきての吾人今日の知識は、西人の、兎にも角にも直接に接觸して研究したりし如き便宜を有せざるに論なく、西人の研究したりし資料と其の結果との、既に公開せられたるもの丈をだに、完全に蒐集すること能はざるなり。況して、西人の著述を讀むだにも、そが種々の外國語より成る故を以つて、吾人は、屢、靴を隔てて痒きを搔く思ひ多きを免れざること、——（少くとも、余自身に於いて）——最正直なる告白なるをや。」然れども、あらゆる國語の完全なる研究には、まづ之を觀察すべき適當なる準繩を具へざるべからずして、そが種々の國語の研究より歸納的に得らるべきものなりとのみ、空恃めなる期待を持すればとて、そは空しき理想を豫想するのみの事にして、其の準繩なくしては種々の國語の順當なる觀察の成し得らるべからざるものならむ以上、相讓り相避け居りては、百年黃河の澄むを待つに似て、何の詮あるべきにあらざるが故に、互に相進み相成して歩を進めざるべからざるのみならず、幸なるは、西人の立脚地を成す印度歐羅巴語族及び其の類族語共と、吾人極東の日漢兩國語とが、思想言語展開上の最優秀なるものにして、又其々に、言語の研究に於いて欠くべからざる特殊性を帶有し、文獻上よりも最豐富なる資料を有し、而も、外部よりして容易に其の關奧を窺ふべからざるものにして、西人が、其の立脚地上最研究し易く、從つて、粗成功に近き結果を、其の語族及び類系の古今の國語につきて、多量に提供し居るものと、吾人極東方面のものにして吾人に親しきもの、就中、最自然的に發展し最範疇的概念の正調を領持し、以つて、あらゆる國語の出入參差を測るべき準繩たるに堪ふべき、我等自身の國語の、吾人の力相應に、最善を致し最勝を盡すことに依りて、よく要契を攬り精細を執へ得べきものとを對照し、之を主として、他の國語を參照する時は、雲かゝりたる世界のあらゆる國語も、皆指呼の間にある感あり。況んや、吾人の、わが國語の特性に基する民族心理の醒覺より來る、觀察の新しき着眼と着想とは、——（よし、枝葉の觀を成すべき諸國語につきて多少の誤解を挿むを免れずとするも）——優に西人の欠陷を補充して、新生面を學界に開くに足るものあるを自信し得べきをや。少くとも、この立脚地よりの貢献が、其の最弱點とする所にありても、或る程度の刺激を言語の對照的研究の基礎に與ふるを得べきを、余は信じて疑はざるなり。今、章を改めて第四紀以下に當る言語展開の順序を叙で消長の機運を察して、今に存する此等の國語が、果して、如何なる關係に依りて其々の地歩を保つことと成りしかを髣髴たらしむべし。

一八

既に說明したる語根發展紀の必存は、現狀に於ける實在實存の諸國語及び其の古語を統一的溯源的に觀察する以上、勿論許さざるべからざるものにして、其の發展の條理、また既に說けるが如く、之に次ぎては、根辭發展の時代の將來せられたること、亦、現在現存の諸國語及び其の古語を統一的溯源的に觀察する以上許さざるべからざることなれど、之と同時に、あらゆる國語を收めて之を考察せむとするときは、この根辭の發展には頗ぶる條件ありて、皆類を一にし揆を一にすること能はざりしを認め得べし。されば、あらゆる國語を系統に收めて觀察せむとする發展史觀よりいへば、——（統一的溯源的觀察の立脚地より見れば、國語らしき國語の存在するものは、下に說明するが如き其の性質上より、類に因りて聚められたるものが層々相逐ひて、皆一つに歸納し得らるゝことと成るが故に、之を系統に收めて其の發展の歷史を見むとするは、實に正當なる試みなるを知るべく、又、其の統一的溯源的研究の順序につきては、下に發展を叙して現在に及ぶ條理を按じて、之を逆さまに翻轉して、現狀の諸國語を類に依つて統括する氣分を持して、順次往古に溯ることとして考ふれば、如何なる推究の順序が其の間に存するかの默示を得、其の指導の跡を蹈みて、著者の經過と同一なる過程を通して、其の源に達するを得べきなり）——語根發展紀を以つて、すべての國語展開の幹莖（Stock）として、之より種々の條件に依りて種々に分割せらるゝ性質上の各部門（departments）を成すものと見るべき分枝の發展を致したるものなるべきを想見すべきなり。今、現存する諸國語より歸納したる統一的溯源的の考察よりいへば、上にもいへる、根辭が物象につきての關係的區別概念より起りて、漸々構想的結合につきての關係的區別概念をあらはす方に展開するに方つて、一方には、補助の單位語として認むべきものに依りて之をあらはすものありたりとすれば、——（現存するものに、原始以來其の區別ありしことを示すべき性質上の區別を存するものある方より、適當に根辭が展開して言語の大成完結時代に移り行きたる時に方つて、正に、其の二つの溯流の存在せしを認むべきものなるが故に）——其の始原時代の構想的結合に關する表白機關たりしものは、恐らくは、嚴格なる根辭と補助の單位語との中間に位する程度のものなりしにて、そが民族心理の關係にて其々の途を選ぶことと成りしものなるべし。かくて、同じ關係のものが、物象の關係的區別概念をあらはす方にも存在したりけむは、——（今の例にても、上章にいへる「甲、乙、丙、丁、ら」の「ら」の如く、殆ど補助の單位語と選ぶ所なきものを見出し得べきより推しても知り得べきものなれど）——想像し得べきことなるが、兎にも角にも、一部の根辭が補助の單位語と純正なる根辭との中間に立つが如き性質を有せし時代に方つて、根辭としての展開、類族中にありて最不十分なる狀態に於いて、甚早く其の幹莖たるものより分岐したる一部門の漸々離隔するに至りしものありしこと、前節に擧げたる（二）の如きもの、すなはち、漢語を代表者とし西藏安南暹羅緬甸等の國語を包括するものとして、西人に依りて Isolating language（單獨語、寧ろ獨成語）と稱せらるゝものの今に存在するに依りて、ほゞ明白なりといふべく、——（下にいふ如く、此等の國語を全く後代の加工語なりとせざる以上、本文の如く解釋する外、斯かる國語の起源を繫くる所なきなり）——其の分岐したるものを、今の其等の國語の、始原的祖先なりとして認むべきなり。この獨成語と稱せらるゝものは、單位語を成す

に、語根にそふるに根辭を以つてする造語法を取らず、從つて、單位語語根の階段上の區別なく、語根は其のまゝ單位語として立ち、其の一語は、皆、一音節（one syllable）を成すを原則とするものにして、其の方より、「單音節語」（Monosyllabic language）と稱せられ、或は「語根階段の語」（Language of root stage）と迄も稱せられたるものなれど、其の代表者として認めらるゝ漢語につきて見るに、古來複成語（compound word）を盛に使用したること殆ど世界に比類なき程の現象を示す方よりいふも、單位語にあらはさるゝ概念を字形の構造にて精密に表白する方よりいふも、決して造語法上の才幹なき民族にあらざりしことを證し得べきのみならず、單音節ならざる語彙も、古代の地方語として存在せし證例あり、文典上の樣式を適當にあらはす語法は發展し居らざるに近けれど、文の構成法よりいへば、印度歐羅巴語の補助の單位語に當る職責を充たす程のもの絶無なるにあらざること、所謂「助字」といふものに依りて認め得らるべき以上、――（其の指す所の意義の性質に於いては、自づから等しからざれども）――或る程度に於いて關係的概念の表現法を有するものなること明にして、全く單位語の構成法――（複成語を除外したる純正の單位語の構成法）――としては、まづは獨成の語たるに背かずといふべけれど、其の文を構成する成分として見れば、語の叢りすなはち叢語（pirase）にて一成分すなはち一文素（element of sentence）を成すものなること、分明なれば、印度歐羅巴語族の近代語を、叢語にて文素を成し、所謂文典上の形式を成すものある方より、西人が稱呼する如く（Analytic language）すなはち分示語といふべきものとすれば、之と同じ條件の下に、同じく分示組織の性質を有するものと認めざるを得ず。（本註參照）意義內容の異同に依りて其の語法組織の性質を曲げむとすれば、そは、先入主となるものによりての主觀的獨斷といふべきのみ。この故に、斯くの如き性質の國語は、分示組織の語法を持するものとして認むべきを許すと共に、其の文典上の樣式を成す單位語が發育不完全の狀態を持して、早く其の幹莖より別れ一派の流れを成ししものと認むる外なきなり。其の文典上の樣式を成す機關の不完全なる方より、余は、之を呼んで機關不調の分示組織の言語といはむとするなり。「かくて、幹莖たるものより、最早く分裂離隔したるものの後裔と認むべきものが、分示組織を成すものとして、其の民族心理の系統を示現する以上、之と、下に說くが如き、五一の國語の性質上の關係と合せて、――（註記の理由にて、この二を除外して考ふるも、なほ、五及び一）と三四との分岐の起るべき境涯の事情を推して）――上述の如く、分裂前の始原時代に於いて、文の構成的結合に關する方の根辭が、物象の關係的區別概念をあらはす根辭に比して、概して、緩慢にして、純粹に根辭的なるものと補助の單位語的なるものとの二流を成して推移展開し行くべき性質を成す傾向ありしことを信ずるは、易々たるべきなり。」

こゝに、西人の Analytic language（分示語）といふものの意義を註釋すれば、西人の所謂 Inflection（「屈曲」と譯する習ひと成り居れど、當れりとも見えず。其の本性を推して「訛成轉形語法」といふべきこと、下文にいふが如し）すなはち、文典上の關係的區別概念をあらはす語形の變化に對し、補助の單位語を添加して其の關係的區別概念をあらはすものを、彼等自身の國語中に認め、彼等が立つ語族の古代の代表語共が、皆、殆ど全く訛成轉形の組織を成すに對し、其の語族に連る現代語共が、殆ど皆、其の訛成轉形組織の一半を消滅欠如せしめ、別に單位語を添加して、其の補助語とし、そを併せたる叢語を以つて、缺損したる部分の訛

成轉形組織の語形變化に代用する、混合的の語法を成すに至り居るより、古今を對照し、其の古代語の代表たるものどもをば、文典上の樣式を成す關係的區別概念を、總合的に一語に表はし示す義にて、Synthetic language すなはち總示語（＝總合的表示語）といひ、近代語をば、分解的に叢語にて表はし示す義にて Analytic language すなはち分示語（＝分解的表示語）と言ひ出したるなれど、此は正しくは當らぬ名目なり。其の古代語なりとて、多少の分示組織を有すれど、そは甚少ければ、其の大體につきて總示語というて妨げなかるべけれど、其の近代語は、分示組織を交へこそすれ、半は、——（寧ろ過半は）——訛成轉形組織を傳へて其のまゝなるのみならず、其の國語の歴史上、何處迄も、訛成轉形組織、すなはち Inflection の組織が、其の國語法の本性たり骨髓たるを失はざるが故に、單に分示語として認め得べきものにあらず〔古代語に對して比較的對照的には分示的なりといはむには、其丈の事にて、全般に亘りての分類法上、學術上の名目として何の價値あるにもあらず、何の資格を存するにもあらず。〕適當に、其の古今の語法上の性質を對照區別せむとならば、其の古代語を純訛成轉形語すなはち Pure Inflectional language（强ひて「分解」に對して「總合」を對照せむとならば、總示的訛成轉形語すなはち Synthetic inflectional langnage）といふべく、其の近代語をば、分示的訛成轉形語すなはち Analytic inflectional language（又は、混合的訛成轉形語すなはち Mixed inflectional language）ともいふべきなり。兎に角、西人が立つ語族の古代語は、純訛成轉形組織といふべき表白上の組織を有し、現代語は分示的訛成轉形組織を有するものなれば、妄に、總合分解の對照を成し、現代語をして訛成轉形の名より脱離せしめむとするは、明なる誤りなりといふべし。たゞ、分示語といふ概念を立て

で、一種の組織法を表章したるが、手柄といへば手柄、よき着眼といへばよき着眼なりしなるべし。〔漢語等（二）に屬するものが、關係的區別概念の符徴の貧弱なるが上に、其の意義内容の性質大に異なる點あるを以つて、西人の民族心理の自家本位にて、之を分示組織より度外視したるも、其の立脚地より見て狀情の斟量すべきは別として、過誤はすなはち過誤なり。〕純正なる分示組織は、下にいふ如く、わが日本語族の特徴なり。さて、本文には、暫く、西人の觀察に因循して、漢語を（二）の標的として言ひたれど、漢語の成立には、特別の理由ありて、本論に至つて詳説すべきが如く、全く、後代の——（今よりいへば、勿論太古の）——聖賢が政治上の方便として制定したる加工的の言語にして、後には雄大なる文學語とは成りたれど、正式の系統中に入れて、言語發展の次第を議するには、——（少くとも、始原時代の言語發展の歴史をあらはすには）——適當なるものならざるが故に、こゝの條には、實は、西藏安南邏羅緬甸等の言語を正面に立てて、この古き分派の末裔的標本に宛つべきものなりとす。されど、其等は、所謂 Isolating language すなはち獨成語たる性質上、この第四紀の始原に系統を引くものとして、其の史的發展の地位を定むるにあらざれば、他に繫くべき起源の地なきを以つて、勢、斯くの如く裁定せざるを得ざるが故に、斯くするのみの事にして、此等も、漢語に準じて後代の制作的加工語として認むべきかの疑ひなきにあらず。〔この事は別に説くべけれど、たゞ疑ひありといふのみにて、妄に之を抛棄するが如きは適當なることにあらざるが故に、其の史的地位を考量して、其の起源を暫定せざるべからざるものと知るべし。〕且つ、漢語を除きて見れば、言語の頒布及び發展の地歩より推して、甚振はざる狀態に居るものなれば、この分派の繼續し居ることを認めながら、暫く此の

系線の存在を度外して、第四紀に於ける名目上の數に加へず、其の紀を名づけて、言語の鼎立時代（＝三分時代）と呼ぶこととし、四分時代とは呼ばざるなり。（一四圖表參照）

この機關不調分示組織の一分枝の先づ分裂離隔したる後、關係的區別概念と其の符徴との發展に伴なひて、民族心理の異同より來る趨向は、おのづからの殊別の進行を致し、上述の展開上の條理を逐ひ、之に上に擧げたる（一）（三）（四）（五）の溯源的觀察を會通して判定する時は、其の幹莖たる言語は、漸く、左の三種として分裂し行きたることを認めざるを得ざることと成る。すなはち、

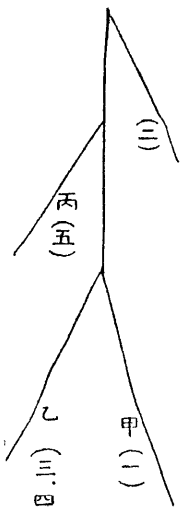
（甲）物象の關係的區別概念は、主として、根辭にてあらはす方に發展し、構想的結合に關する意味上の關係的區別概念――（すなはち、世に「文典上の樣式」として認められ來りしものの意義內容）――は、主として、補助の單位語にてあらはす樣に發展する方より、其の根辭として添ふるものは、おのづから密着する氣分を以つて進行したるもの。從つて、心理狀態も、之に準じたる趨向を取りしもの。

（乙）物象の關係的區別概念も、構想的結合に關する意味上の關係的區別概念――（すなはち、世に「文典上の樣式」として認められ來しものの意義內容の概念）――も、共に根辭にてあらはす樣に發展する方より、おのづから、其の根辭と根辭のそふべきものの關係を密着せしむる氣分を以つて進行したるもの。從つて、心理狀態も之に準じたる趨向を取りしもの。

（丙）物象の關係的區別概念が、比較的不十分なる發展の程度に於いて、構想的結合に關する意味上の區別概念が、始原狀態のまゝに、補助の單位語ともつかず、純正の根辭ともつかぬ狀態を保ちて發展したるに引き着けられて、殆ど同じ狀態に同化せられつゝ發展したるもの。從つて、心理狀態も之に準じたる趨向を取りしもの。

この甲のものが、始原的の根辭を二樣に區別し、純正なる根辭と補助の單位語との二樣に別れて發展するに至らしめたるは、明に、心理狀態の加工的趨向が活潑なる狀況にありしを示すものにして、斯くの如くすることと成れば、其の心理狀態は、自然に、單位語と、單位語を組織する語根根辭との間に、單位上の階段を立つることと成るなり。（乙）のものは、（甲）の如く二樣には區別せざれども、物象に關するものの外、構想的結合に關する方の根辭をも、其の始原狀態よりも、寧ろ密着する氣分を以つて取り扱ふ趨勢を成すが故に、其の心理狀態は、自然に、言語の上に、單位語と語根根辭との間の單位上の階段を置くこと、（甲）と同じく、其の心理狀態の活潑性も、亦ほゞ相同じきを認むべし。（丙）のものは、構想的結合に關する方の根辭を、其の始原狀態のまゝに維持するのみならず、物象に關する方の根辭をも之と同化せしめ行く關係上、其の心理狀態に於いて、なほ、根辭と他の語との間に、五十步百步の區別を置くは、自然の勢なるべけれど、單位語と語根根辭との單位上の階段をつくらざるべきことと成るものにして、偶以つて、其の心理狀態の比較的活潑ならざることを示すを見るべし。この甲は、上表（一）の純正分示語の始めを成すものにして、文典上の樣式が主として、分示組織を成すものなり。（乙）は、（三）の添成語、及び、（四）なる訛成轉形語の始めを成すものにして、文典上の樣式は、其の始めに於いて、すべて、純正なる添成組織を成したるものなり。「訛成轉形の組織が、添成組織より出づるものなることは、下にいふべし。」（丙）は抱括團成語の始めを成すものにして、文典上の樣式、連結團成組織の下に

成立するものなり。「この抱括團成語、連結團成組織のことにつきては、下にいふべし。」この甲乙丙が、此丈にていへば、甲乙は異中に相似、丙は、獨、離隔したる性質を認むべきものなるが故に、系統の關係上、丙まづ其の幹莖より分れ、次ぎに、甲乙相別れたるものなること、左圖の如くなりしものなるべきを想見すべきに似たり。

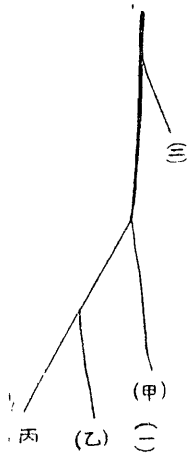


然れども、其の文典上の樣式を成すものの內容上の性質を觀察する時は、分枝の順序、必しも然らざるに似たり。其につきて、まづ說明すべきは、この甲乙丙の區別をいへるにつきて、「物象につきての關係的概念」に對へて「構想的結合につきての關係的區別概念」といはずして「構想的結合に關する意味上の關係的區別概念」といへることなり。之には、まづ、關係的區別概念中、單位語の意味の區別に關するもの、すなはち、物象につきての關係的區別概念を成すものの類を除き、構想的結合に關するものに、おのづから、二種の大別あることを知らざるべからず。其の一つは、純正なる構想的結合に關するものにして、わが國語の例にていへば、上文にいへる「よし」「よく」「よき」の「し」「く」「き」があらはす、對照的なる關係的區別概念の如く對照的に、或は述定し、(to assert, to predicate) 或は限定し、(to modify adverbialy) 或は裝定する (to modify adjectively) 關係をあらはし、所謂「動詞」なる作用用言(＝作用言＝ verb) の語尾中、例へば「をとす」(落)「うかぶ」(浮)、かなしむ」(悲)「さかゆ」(榮)の「す」「ぶ」「む」「ゆ」があらはすものも、皆、其々の或る特色ある條件に於いての述定關係をあらはすが如き、これなり(ア)。

然れども、諸外國語を通じて、——(少くとも、現存のものにつきて、又、之につきて得らるゝ吾人今日の知識の範圍に於いて) ——純正に述定の關係をあらはす關係的區別概念の符徵の發展は、絕えて、其の痕跡を認むること能はずして、限定裝定に關するものは、これなきにあらざれども、既に純なる述定の關係區別概念の符徵を欠く以上、片々たる限定裝定の符徵の如きは、單語として了得することとするも、なほ、實際的の故障を感せざる方より、普通に文典上の樣式 (Grammatical form) の中に算せざる習慣を成し居るを以つて、上の如き狀態に諸國語の分系的分類的の異同上の對照を試むるには、其の有無を條件とすべき場合の外、暫く之を提出する必要を感せざるものなり。他の一つは、位格 (Case) 述法 (Mood) 時化 (Tense) の如く、構想的結合に關すると共に、或る特別の關係的意味を表白するものとして(ア)と類別せらるべき關係的概念にして、此は、甲乙丙のいづれにも存在して、「構想的結合に關する意味上の關係的區別概念」といひつべきものなり(イ)。西人の所謂(Grammatical form)は、實に、この概念の表白上の形式たる語法に屬す。この故に、對照上の便宜に從ひ、(ア)をいはずして(イ)のみを擧げたるものと知るべし。

されど、內容上の論としては、其の(ア)の述定につきての純正なる關係的區別概念をあらはす符徵の有無は、直ちに、其の符徵にあらはさるゝ概念の發展如何に關することなるが故に、極めて大なる心理的差異の存在を示すものとして、大なる注意を惹くべきものなりとす。然のみならず、之と正反對に、述定に關する(イ)の關係的區別概念に於いては、(ア)を欠く乙丙は、却つて、人稱及び單複の數をあらはす符徵を有することに依つ

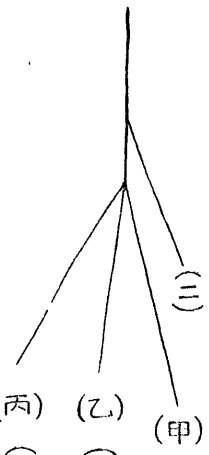
て、述定すべきものに、必ずかゝる關係的區別概念を添加して思念せしむる特徴を具有し、甲は全く之を具せず。〔述定に關する(イ)の關係的區別概念に於いて、人稱及び單複の數をあらはす符徴を有すといふことは、讀者が、英獨等の語學にて熟知する如く、所謂 Verb の Conjugation（配列）に於いて、Person（人稱）Number（數）の區別を有する如きをいふものと知るべし。而して、かゝる現象が、今更に、甲に屬する我が民族心理に於いて、如何に驚くべき現象として注意すべきものなるかを、感せざるを得ざるべきなり。〕これ、實に、非常なる心理狀態の差異にして、たゞに、精粗如何の論にあらず。其の民族心理に於いて大なる懸隔の存在するを確認すべきものなるを見るべし。この立脚地よりして觀察すれば、甲乙丙の分枝上の關係は、寧ろ、左圖の如く、（甲と乙）（丙）と、まづ別れて、其々の發展を成し、（乙）と（丙）とは、後に分裂したるものなりとすべきなり。



さればとて、この分枝的觀察に就く時は、物象につきての關係的區別概念をあらはす根辭、すなはち、單位語に關する造語法の甲乙の餘りに近くして丙の餘りに隔りたるを怪まざるを得ず。この故に、まづは、ほゞ同一時代に三つに分枝したるものと見ることとする外なかるべきなり。〔其の性質上の差異は、民族頒布の遠近關係と、隔離したる生活の年月の巨多なる關係とに歸する外なかるべし。〕

されば、斯くの如くにして、言語の鼎立時代は成立したるものと認むべし。

余は、こゝに、讀者の誤解なからしめむが爲に、一言をそふべき必要を感ず。そは、この分系の圖形は、自然、言語の性質に於ける一元論を成すべきものなれど、余が今の立脚地は、言語の性質の一元を以つて、直ちに人種の一元を斷定せむとするにはあらず、又、必しも一元ならずといふにあらずといふことなり。かゝることを斷定せむには、なほ、別途の研究を要することにて、民族分裂の系統を言語の上より論ずる時は、この鼎立時代以後の、この言語と心理（＝民族心理）狀態との特徴は、明に、民族の系統論を左右する最大なる



條件にして、下に註記する場合を除きては、體質上の重要なる條件（就中、骨相上の條件）と駢馳して、人種學上の——（特に人種の歴史的關係を斷ずべき）——最高權威たるべきものなるを信ず。されど、この鼎立時代を成す迄は——（二）の種類は、上述の如く甚疑問あるものなれば、今暫く圈外に置くものと知るべし）——たゞ並行的に地上に散布したる民族が或る程度迄同一軌道を蹈みながら、其々の民族心理に伴なひて、遂に鼎立時代を現じたるものなることを認め居るにて、或は、正しく人間の部には入るべきものと成りながら、抽象的言語の第二、三紀に達せざりしものもありて、劣敗者として、——（或は自然力、或は獸畜、或は異人種等の爲に）——滅亡したりし者もあるべく、今も何れかに介在する者もあるべからむを想像するものなることを言明して、すべて、いまだ考へ及ばざる點に於いて、廣く識者の敎正を待つ外なきなり。

言語と人種との關係につきて、世に頗ぶる大なる誤解あり。單語の類似を以つて、直ちに人種の同系なるを說き得べしとするが如きは、其の最著しきものなり。單語の如きは、直接間接の或る交涉に依りて他に流傳し易きものにして、他に特別なる事情の之を擁護するものあらむ場合の外、其通なる單語の存在は、たゞ、何かの關係ありしものなるを知り得べきものなるに止るのみ。「其も、必しも、相互の交涉あるにあらずして、必然の契合――（例へば、咏歎の語としての「あゝ」「おゝ」の如し）――偶然の暗合なるもあるべし。」然るに、別に、何の準繩たるべき證據もなく、音韻推移の原則を見出したるにもあらずして、たゞ主觀的の、自由自在なる轉音略音訛音等の着色を加へたる仲長削減を施して盛に附會したる單語の對照に依り、以つて、人種の關係を無遠慮に論斷するが如きは、其の最危險なるものとして戒むべきものなりとす。然れども、民族心理の異同に伴なふ言語の特性の異同の如きは、自明的に、其の民族心理の認定に依りて民族相互の系統的異同を斷じ得べき準繩にして、人種關係を判定する上に於いて、最有力なる權威たらざるを得ず。もし、この鼎立時代以降、下に概說するが如き、言語の根本的基礎的の性質上の對照に依りて、一系なることを認め得たる上ならむには、單語の類似は、始めて、人種關係の或る程度の確實なる徵證たり得べきなり。

凡そ、單語は、時代の要求如何流行如何に依りて、絕えず新陳代謝し、如何樣にも推移し行くべきものなれば、――（勿論、長く持續して變化せざる語彙も伴なふべく、廢語の再生もあるべきなれど）――他より輸入せられたるものならざる場合にも、必しも、十分なる準據として之を推し、以つて、或る問題――（例へば、民族の文化狀態）――を解決し得たりとすべからざる場合多し。然るに、其の基礎たり根本たる言語の性質につきては、時代の消長に伴なひて、或る程度の進化退化はあるなれど、妄に移動變化すべきものにあらず。移動變化する場合にても、其は多大の年月を經たる上の事なるのみならず、言語に關する民族心理の傳統上、如何に大なる移動變化を起したる場合なりとも、或る程度迄は、おのづから其の流派を證徵すべき程の性質をば保持すべきものなるなり。この故に、人種學上、他に如何なる材料ありとも、この言語の根本的基礎的の性質の、其の民族心理を標幟するものと、提携せざるものは、確定の說とすべからず、たゞ、或る民族が、或る特殊なる理由に依りて、全く自己の言語を捨てて、他の國語を取る場合ある時は、そが使用する言語の性質が、其を使用する民族の人種的證左たるを得ざるべきは、勿論の事なりとす。或る人種の者が、他人種中に混入したる場合にも、之に準ずべきものあるべし。又、特別なる制作を加へて言語を改造する場合ありとすれば、例へば、今の所謂「世界語」の類が、取つて或る國民の舊來の言語に代り得る場合ありとせむには、又、之に準じて見るべきものなるべし。「余が信ずる所に據れば、漢語の如きは、元來、ほゞ之に當るものなりしこと、本論中に說くべきが如し。されど、其の間、なほ、本來の民族心理の一端を傳ふるを認む。」されば、かゝる場合の有無如何を條件として、言語の根本的基礎的の性質は、骨相を成す頭蓋骨の形體と共に、人種上の問題を解決すべき最高權威たるを知るべし。

一九

今、第四紀なる言語鼎立時代、すなはち、言語大成完結時代なる、文典上の樣式があらはす關係的範疇概念

の固定時代に入りての言語內容の性質上の事に及ばむに、此も、第三紀時代につきて既にいへるが如く、其のまゝを今に傳へ居るものあるにあらざるを以つて、今に遺留する最古の國語より現代に至る迄――(更に、若干の未來を包容すれども、そは未知數に屬す)――を包含する第五紀の言語狀態より、其の起源狀態を溯源的に推知する外なきものなるが、兎にも角にも、この時代は言語の大成完結の時代として、其々の文典上の樣式があらはす關係的範疇概念が、其々の民族心理と提携して固定したる時代にして、月に譬ふれば、七八日より十五夜に到る迄の盈期にして、上文にいへる如く、其の大綱、三派を成して分裂し行き、鼎立の形勢を以つて、其々の大成を成ししものなれど、其の分裂の順序を考察すれば、其の始め、まづ、二つの概括を成し得べき樣に、(天)純正なる構想的結合につきての關係的區別概念と其の符徵とを完全に發展せしめたるもの(上章の(一))と、(地)之を發展せしむること能はざりしもの(同じく(三)(四)と(五)とが並行的に內部に分立し居りしもの)との二つの流れが、並行的に進行し居りたるにて、其の內、そを發展せしめ得ざりしもののうちに、又、文を組み立つる成分としての單位と單位語を組み立つる成分としての單位(すなはち、語根及び根辭)との二階段の單位氣分を言語に樹てたりしもの(すなはち(三)(四))と其の二階段の單位氣分を樹つるに及ばざりしもの(すなはち(五))との分流ありしものにて、其の始めは、思想なほ單純なりしかば、いづれにても、實際上に大なる便否の差異も無かりしものなるべけれど、兎も角も、漸々に、種々の機關の具はり行く言語と、之に伴なふ思索思念の活潑なる狀況とは、多くの年月を重ね行く間に、頗ぶる複雜なる智能の發展を起し、生活に伴なふすべての事情も改まり行き、其の多數の年月の間に、語彙も語法も、何時しか複雜多岐と成り、其の(天)(地)の區劃を成す所以の特徵は、最早、根本的改造を加ふるにあらざれば妄に動かすこと能はざるべきものと成り行きしものなるが、習慣的に發展し來りしものを根本的に改易することなどは、當時に於いて到底成し得ざるべきことなりしかば、かくて漸々に發展し來り、從つて、瀕繁に複雜なる思想を表白する必要を感ずるに方つて、今更に、純正なる構想的結合に關する必需なる區別法を注意せざるを得ざることと成りし(地)に屬する言語の傾有者は、其の表白法上の欠陷を補充すべき必要――(之に依りて、思想の混亂を防ぐべき必要)――を感じ出し、其の方に向つて工夫を凝らすことと成りしは、正に、自然の勢なりしなるべきなり。かくの如くにして、(天)に屬する者は、其の純正なる構想的結合につきての關係的區別概念を、既に早く述定を成す語法の上に發展せしめたりし宿慮に因りて、順調に從ひ順路を蹈んで、種々の關係的概念を發展せしめつゝ、思想の表白上、何の故障もなき進行を持して、何の偏倚性なき最自然的の心理的論理的の思想發表法を具備する言語として立ち、其の言語に關する心理狀態の惰性を後代に傳ふるを得たるに反し、(地)に屬する者は、文素主從の區別につきての工夫の結果、文主と同一關係の或る概念を述定の文素に添加して相牽引する手段を設け、以つて其の關係を指示することに着想し、既に發展し居りし、文主たるものの人稱的關係――(すなはち「われ」「なんぢ」「かれ」等の關係)――を取つて、之と對應する符徵を、述定を成す部分に添ふることとしたりしものにして、事一度こゝに到る時は、既に發展し居りし人稱的氣分をあらはす主要なる語は、所謂「代名詞」にして、所謂「名詞」があらはすものは、其の第三人稱中に入るを常とすべきものなれば、こゝにまた、代名詞中に單複の氣分を含み、之を區別すること多き自然の傾向より起りて、其の單複の數をも、人稱の符徵に伴なはせて、述定を成す語

に添加することと成ると共に、其の述定を成すものの文主と成るべき名詞にも、――（又、飜つて代名詞其のものの、すべての場合にも）――必ず單複數の如何を注意して、常に其の符徴を明章することと成り、こゝに、おのづから、一種の組織的性質と之に伴なふ範疇的氣分とを、其の言語の上に樹立することと成りしなり。既に、斯くの如き固定性を有するに至れば、其の「人稱」なる氣分は、其等の國語を支配する大勢力と成ると共に、其の加工的手段を移して、彌々深く加工的に進入することと成れりし心理趨向の傾斜は、漸々に增大して、其の代名詞の第三人稱に當るものに男女性を擬して之を迎ふる必然性あると、所謂名詞中明に男女性（Sex）を有するものあるとより起りて、あらゆる名詞に、男女性もしくは中性（Neuter gender）を附與せむとして、自然の男女性（Natural gender）の外に文典上の男女性（Grammatical gender）を構造して徹底的に男女性を推し立つることとも成り、遂には、單複數にも、單と複との外に一對數（Dual number）の範疇概念を立てて、言語に特色を附するものも始まり、――（希獵文典等參照）――述定をあらはす語に附する「人稱」「數」等の關係をあらはす符徴をも、必しも、其の述定をあらはす語の下に添加せずして、種々の方法を以つて挿入添加することも起り行く――（伯來文典等參照）――順序と成れりしなり。「かゝる國語を有する民族の心理狀態は、かゝる符徴をかゝる必要より、鋭意展開せしめたる結果として、訛成轉形語法を成すに至れる言語、すなはち、印度歐羅巴語族セミティック語族ハミティック語族等の如きにありては、或る文典上の樣式を有する單位語に於いて、所謂名詞代名詞にては、「數」「位格」等を離れたる場合として其の概念をあらはすべき名詞形なく、――（近代語には、其の Inflection の脫離的趨向上、この方に例外を出すに至りたれど）――所謂動詞にては「人稱」「數」「述法」「時化」等を離れたる動詞形なき――（この故に Verbal noum なる Infinitive を以つて Verb を代表せしむるなり）――奇異なる現象を言語の上に現出することと成れるなり。」

述定する語なる Verb に人稱等の區別を存することが、其の語幹の下に代名詞を添加したるに起れるものなりとは、西人に、既に其の說あり、否、定說と成り居ることなれど、心理的起源の論に及ぶことを得ずして、たゞ形式的に、擬推の論定を加へたる迄にて、然る所以の理を明にせず。又、西人中、其が立つ語系なる印度歐羅巴語の範疇の、心理的論理的に不自然なるを感じて、理致契合せざるものに關して、文典上の樣式があらはす範疇は、心理上の範疇の外的表現なる故に、元來一致すべき關係は有すれども、文典上の樣式は固定性を有するに對し、心理上の範疇は、自由にして變化し易く、且つ、文典上の樣式は、漸次に意味の推移を起す故に、この二つの範疇の間に懸隔を起し易く、終に、互に一致せざるものと成りしもの』として、漠然と解說し去らむとする者（例へば、かの有名なる H. Paul 氏の如き）あれど、其の心理的範疇と文典的範疇との相伴なひし最初の範疇が、文献に依りて後代に遺留し居る文典的範疇に對して、如何なる史的關係を有するかにつきては、毫も研究する所なく、其の心理的に不自然性を帶ぶる文典的範疇が、其の基礎的性質に於いて最初のまゝを存するものとすれば、其の語族が有する其の不自然なる文典的範疇は、果して如何にして成立したりしかの實際上の手續きにつきて、何等かの適當なる解說を致すを要し、又、其の始めの範疇は、後代に遺留するものの如く不自然ならざりしものとすれば、如何に文典上の範疇には固定性を有し心理上の範疇には自由性を有すればとて、其の自然なる心理的範疇が、――（從つて、之に伴なふ最初の自然的なりし文

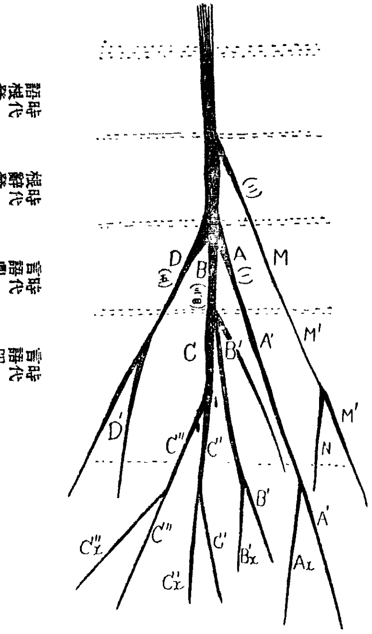
典的範疇を有したりしものが）――如何にして、大なる懸隔を有する文典的範疇を誘起したりしかにつきて、適當なる解說を附すべきものにして、たゞ、簡單なる固定性自由性てふ謎に依りて解決し去るべきものあらずといふことを知らざるに似たり。又、實際につきて思想思索の內容は、心理的には實に自由なるべきものなれど、其の思想思索を支配する心的範疇は、さまで自由自在に轉移旋化せしめ得べきものにあらず、言語一度大成し了りてよりは、言語の領得と思想の展開との提携する關係上、兒童時代より漸々其の言語の範疇に依りて頭腦を訓育せられ來りて人と成れるものなる以上、人の心理狀態が、文典上の範疇を脫離することは、事實に於いて、妄りに起り得べきものにあらず。起り得べしとすれば、特に、其の時に方りての文典的範疇と心理的範疇とを對象として、哲學的心理學的に對照研究し、新組織を建設する場合あらむのみのことにて、其の外に、妄に考へ得らるべきものにあらず。また、斯くの如くにして、新しき心理的範疇を建設し得たればとて、其の言語を離れて、之を以つて、妄に、一般人を支配し、一般人をして其の範疇の光りに浴せしめ得べきものにもあらず。たゞ、言語の範疇があまり不自然にして、自然的心理狀態の實際的理致と相和せざる點を有する先天的性質を何等かの關係にて傳來し居るか、或は、年代を重ぬる間に起るべき文典上の樣式の意義に起る變化に伴なふ方より來れるかにて、自然的心理範疇――（或は、潛在性と成りて其の民族を支配し居る文典上の史的範疇）――と其の不自然なる文典的範疇、或は、意義の變化したる文典的範疇との間に、或る程度の懸隔を生ずることはあるべきにて、西人の言語關係には、實に、この二つを兼ね居るが故に、文典上の範疇と心理的の範疇との不一致につきての特別なる印象を起すは、其の西人等に取りて無理ならざるものとして見るべきなり。されど、其の立脚地につきての同情は、毫も、彼等がこの問題にきつての解答の不備を學理上に寬容すべき理由とは成らざるなり。既に、心界の產物たるを脫せざる文典的範疇は、如何に不調整の事ありとも、要するに、其の心界の主たる人間の心理上論理上の批評眼に依りて、よく其の生產の徑路を辿り得べきものならざるを得ず。而して、此等の事は、一に、本文の如き關係の、特に加工的なるべき因緣の、其の國語に取りて先天的の規約と成るべきものありしを知りて、始めて解決し得らるべきものなるのみ。なほ、其の範疇概念の事につきては、本論に至つて說くべし。

二〇

かくて、三派鼎立の狀態が年月と共に推移し、言語の四分時代と成りて、其の間零碎なる分岐分裂を成すに及べる關係につきて、まづ、其の全豹の大綱を窺ふべき系統圖を示すこととすれば、すなはち、左の如くなるべし。

この大綱圖は、其の性質上より見たる分裂を示すものにして、强ひて古今の國語を羅列せむとしたるものにはあらず。そは、既にいへるが如く、和漢の國語以外吾人研究資料の源泉たる西人の調查研究も、其の客觀的なる研究の立脚地――（資料の不十分なるより來る弱點）――よりも、其の主觀的なる立脚地――（觀察者の民族心理より來る弱點）――よりも、共に、不完全を免れざる上に、之を蒐集利用するにだに避け難き吾人の弱點は、其の甚不完全なる資料につきて、如何に、新觀察の特別なる立脚地よりの判定を下すべきかに

苦しむもの多き關係上、到底、差し當りて、あらゆる世界の國語を擧げ一々に系統圖に連ねて、其の分裂展開の關係を示すべき手段なきが故なり。[既に不完全と認むる、西人の分系圖の斷片的なるものを蒐集し、之を標準として妄に點綴取捨し徒らに紙上を飾るが如きは、獨創的の立脚地として、特に大なる危險を感ず。この故に、之を避く。但し、第二部なる本論の形態論に入りては、其の言語の分類表としては、或は、西人の研究を採擇して參照に供することあるべし。]



M　機關不調分示組織ノ系線(推定)
M′ N　同上(遺留)　M′　西藏語其ノ他　N　漢語(代表、古文)
A　分示組織ノ系線(推定)
A′　同上(遺留)(日本語族(代表、文語系))
Ax　A′ノ分岐(下文參照)(代表、口語系)
B　添成成語組織ノ系線(推定)
B　同上(遺留)(ウラル、アルタイツク語族其ノ他)
B′x　B′ノ分岐(下文參照)
C　訛成轉形組織ノ系線(推定)
C′　同上(遺留)(印度歐羅巴語族古代語(代表、サンスクリツト語、ゼンド語、グリーク語、ラテイン語))
C′x　C′ノ分岐(歐洲現代語)
C″　同上(同上)(セミテイツク語族(代表、ヘブリユー語)ハミテイツク語族古代語)
C″x　C″ノ分岐(同系現代語)
D′　同上(遺留)(アメリカン、インデイアン語族等)
D　連結闘成組織ノ系線(推定)

今、この分裂の系統圖につきて、大略の說明を加ふれば、性質上最吾人に疎隔するDは、すなはち、連結闘成組織の語、すなはち、文の組織成分としての單位語と、單位語の組織成分としての語根根辭との、二階段の單位氣分を有せず、一つの單位氣分を以つて推すものにして、一面に於いては、述定の語に人稱數等を添加することに於いてBと揆を一にすれども、其の單位の二階段を有せざることに於いて、言語の性質上、殆ど根本的にABと異なり、又、之を使用したる民族、ABに對して甚だ振はざる地位にあり、特殊優秀なる文化文學を發展せしめて今に遺留せしむることなかりしが故に、其の言語研究の材料も、豐富なること能はず、之につきての學界の研究もいまだ行き屆かざる關係上——(最近に至りて、其の內或る部分には、稍精細なる研究に出で來りたれど)——暫く傍系的分枝と見做して可なるべき、この系線を、最初に略說して、之を圏外に置くこととすべし。この系線の國語は、二階段の單位氣分を有せざる方より、語根と單位語との區別なく、根辭と補助の單位語との區別なく、語根とも單位語ともつかず、根辭とも補助の單位語ともつかぬものにて、おのづから、二種の區別をば成しながら、其の補助的概念をあらはす語は、Bの添成組織系のものの、文の構想的結合に關する、始原的の根辭と添加の關係に於いて大差なき、緩き添接を成ししものなるべけれど、或は、寧ろ、分示組織に近き狀態なりしものとも、思ひ遣り得べきものなるが、元來、いづれの系統に屬するものにても、其の始原時代にありては、文の構想的結合に關するものは勿論、物象の概念につきての關係的區別概念をあらはすものなりとも、其の根辭は、明確に其の意義を保ちて離合する氣分を存したりしこと、言語大成期の性質上自明的に動かすべからざることなれど、言語既に大成し了りて、能く其の時代に取つての、すべての用

を濟するに足り、また、之を取捨すべき特別の必要を感ずることなき狀態に達する時は、既成の言語は、實際上に利用せらるゝのみにて、また、注意を其の內容的性質の展開事業に向くることなかるべき、大體上に於ける必然的形勢を存するが故に、兒童時代より、生長し行くに從つて、自然に父兄朋友等の言語を模倣し習得することに依りて、器械的に其の言語を使用するのみのことと成りて、代を重ね行くがまゝに、一々分解的に其の意味を思索することは、漸々と粗漏に成り行くべき傾向を起し、以つて繼續傳承し行くべきものにて、この傾向は、言語の大成完結時代以後、——（部分的には、或る特別の刺激を感ずる場合に於いて、其に適應したる注意を換起し、或は發動的なる制作的努力を致すに至ることありしものなれど、其も殆ど後代に至りてのみの事にて）——一般の言語に通じて全般を支配したりしものにて、其の勢は、分示組織のものにありても、或る程度の影響を免るゝこと能はざりし程のものなるが故に、——（但し、この傾向は、複雜なる生活に依りて言語を繁雜に用うる時代に及んで特に多く、又、一度、其の傾向を增進せしむる時は、いよいよ其の方に傾斜し行くものにして、Dの系線に屬するものゝ如きは、其の方には、比較的に遲緩なりしものなるべけれど）——其の言語の意味も、殆ど直感的に近く之を了得し合ふことと成り、從つて、其の添加の關係が、特に分解して翫味せらるゝことの多からず成り行く方より、其の相互間の添加的關係が、自然密着的に接合し行き易き傾向ある程のものなれば、このDの國語に於いても、後代程自然にこの傾向を進むる趨勢ありしにて、Dと、D′なる今の遺留し居るものとの間には、この點に於いて或る程度の差異を起しし、ものなること、自然の避くべからざる條理なりとす。されど、この關係をD′の國語の性質中に確認するは、其の言語に生長し居る者、もしくは、之に準ずる迄に習熟し居る者にて、而も、學理上の準繩を持し、よく其の心理狀態に對照して、其の發音の緩急を觀察するにあらざれば、成功し得べきものにあらざるが故に、今は確言すること能はず。「ただに發音の緩急のみにて其の性質を判定し得べきにあらざること、觀察上の便宜ある今の英獨佛等の國語にても、言ひ續けの緩急、必しも、理論上の性質の合はずして、其の發音の關係が、理論上然るべきが如く、一文中、文素文素の間最隔り、語々の間之に次ぎ、語根根辭間音節間の間隔漸次之に次ぐが如きものにてはなき實際に徵して、之を知るべし。」なほ、この系統の言語につきては、本論たる第二部に於いて、實例につきて多少具體的の說明を試むることあるべし。

二一

次ぎに、ABの關係に於いては、Aすなはち、分示組織の言語は、文につきての純正なる構想的結合の關係的區別概念の表白機關を具備し、又、心理的に最自然なる範疇的樣式を有する點に於いて、最統正的の優秀性を示すものなれど、この種の言語の現存するものは、わが國語を主として、其の近親語として附帶する琉球語朝鮮語を存するのみ、其も代表的のものは、わが古代語のみにして、其の上、この種の國語とても、物象の概念につきての關係的區別概念をあらはすものは、やはり根辭に依るものにて、其の日本古代語に特有なる純正なる構想的結合の關係的概念の表白機關も、また、主として根辭の添加に依るものなるが故に、既に二なるM系及びをDを除きたる、あらゆる國語の系統は、添成組織を中心として其の性質の出入を考慮することとせざる

べからざることと成るを以つて、勢、添成成語組織の國語系を、分裂上の大局より見ての中心に置きて説明せざるべからざることと成るなり。されど、この系線に屬するものにして、B′に屬するもの、すなはち、所謂ウラル、アイタイック語族を代表とする各語族は、全體にていへば、西人の研究頗ぶる多きが如くなれど、一つ〳〵に取りて見れば、資料の不完全と共に、其の研究の度もいまだ甚淺く、今の吾人の用に堪へず、暫く、西人の所見に追從して、廣義に於いての添成成語組織の諸語族の存在を認むることとするのみにて、其の内の比較的縁遠きものをば、心ならずも度外に附し、單にウラル、アルタイック語、其も、資料と共に西人の研究比較的に多きものを以つて考慮することとする外なきを歎ず。〔廣義の添成成語組織に置くもののうちには、鼎立時代以前の分系もしくは傍系のものの、持續もしくは變移したるものにして、實は、この系統に屬せしむべきにあらざるもあるべく、又、何れとも所屬の分明ならざるものにて、甚早き時代よりの庶流孽子を以つて目すべきものの、其の發展甚幼稚なるまゝのものも、所々に介在伏存するが如くなれど、――（連結團成組織のものも、亦之に準じて思念せらるべきものあるが如きを感ず）――今は暫く、度外視して、この系線に關せしめず、又、談らむともせざることとしたり。此等の事、實に、學界の幼稚なるにも由ることなれども、主としては、余の不敏が、特に其の原因を成すものなるを愧づれども、今に於いて、如何ともすること能はず。〕

ウラル、アルタイック語族に屬するものにしても、土耳古語を除きては、資料たる文献の空乏なるに依り、西人が貢献したる若干の研究ありといへども、なほ甚粗略なるものにして、かゝる方面に於いて、すべて其の足跡を蹈み其の糟粕を嘗むるに止る外なき吾人は、大に其の微細を究むること能はざるを憾みとす。然れども、其の系統の今に遺留するものを以つて、古今に通じての其等の國語の組織を推せば、其等は、皆、添成組織、すなはち、文典上の樣式を成す、關係的區別概念を、根辭の添加にてあらはす性質を有し、其の述定の主要部を成す語に添加して其の述定を完全ならしむる用を成すものは、其の根辭の添加が、恰も、印度歐羅巴語の文典上の樣式を成す根辭――（この語族は、固より訛成轉形組織として見るべきものなれど、元來、添成組織より訛成したるもの故、其の間、部分的には、なほ、添成組織の俤を存するものあるが故に、かくいふなり）――例へば、英語の所謂規則動詞（Regular Verb）の第三人稱の單數にそふるSの添加に近くして、やゝ之より緩く、されど、補助の單位語、例へば"I have not"のnotの如きものよりは密なる氣分を以つて添加することに依りて文典上の樣式を成し、位格（Case）等の關係をも、又、斯くの如く、英語名詞の複數をあらはす爲のSの添ふに近くして、やゝ、之より緩く、わが國語の「太郎を」「次郎に」の「を」「に」の如きもの――（西人がPost-position〔後置詞〕と呼ぶもの）――の添加よりは、やゝ密なる氣分を以つて添加することに依りて、其の文典の樣式を成し、其の緩急の氣分の程度、ほゞ、英語slowにlyをそへてslowlyといひ、truthにfulをそへてtruthfulといひ、whiteにnessをそへてwhitenessといふ、其の根辭'ly''ful''ness'に似たるものともいふべきなるべく、勿論、所に依り、人に依り、場合に依りて、變化しつべきものなれば、必しも、機械的には言ひ難き性質のものなるを、況して、其の發聲機微の呼吸に習熟し難き外國語にていふは、何と説明しても當らぬことなるべければ、まづは、わが國語の「われら」（我等）の「ら」と、「甲、乙、丙、丁、ら」の「ら」との間に彷徨するものと知るべきなり。〔但し、このウラル、アルタイック語族のものは、履性根辭を以つて文典上の

樣式を成すのみにて、冠性根辭の適用なきものとして認めらる。」

さて、連結團成組織のものの條にもいへる如く、一般に言語の大成完結期にありては、すべての關係的區別概念は、其の根辭起源の性質上より、構想的結合に關するものは勿論、概して後代に於いて漸次密接するに至る傾向を示す、物象に關する關係的區別概念の根辭なりとも、心理上、分解的に之を思念して、同種の他の區別概念と對照したりしこと明なるを以つて、——（もし、然らずとすれば其の根辭の發生すべき理由なきが故に）——其の根辭の意味が、そが添ふべき幹部より分明に識別せられたるは論なきことなれど、（甲）大成の事終りてよりは、上述の如く、たゞ之を利用するのみにて、差し當り、之を展開せしむべき注意と努力とを起す必要なく、且つ、自然的に習得し直感的に會得することと成る傾向を起すべき關係より、其の意味が、必しも、一々嚴正に分解して識別せらるゝことなかるべきに至る趨勢を成し、自然、根辭を密着せしめ行く趨向と成り、意味上よりも發音上よりも、其の區別概念をして、後日に混亂轉移せしむべき情狀を養ひ行くと共に、（乙）他の一方には、或る程度に既成の或る範疇と相契合せざる心理狀態を起すことありて、最初に發展したる文典上の樣式に或る缺陷ある時に於いては、特に、其の不契合の間隙を大ならしむべきこと、上述の如くなる上に、兎にも角にも、言語大成完結時代よりは、人智の發展が、刺激に觸れて、緊張したる氣分を以つて精力を集むる場合に於いて、順次に其の度を增し行くべきと共に、觀察力工夫力制作力も彌々展開し行くべきものなれば、かゝる調子が、自然の心理狀態と契合せざる其の最初の文典上の範疇的樣式の上に加はる時は、益々、自然の心理狀態と嚴格に契合せざる、時としては、寧ろ、大なる差異を存する、不自然極る加工性の文典上の範疇的樣式を發展せしめ行くこととと成り、諸民族の使用する言語の、性質上の特性が、多くの年月の間に、非常なる懸隔を生ずることと成るは、免るべからざることなりとす。

かくの如くにして、上章の本註にいへるが如く、純正なる構想的結合の關係的區別概念を早く發展せしめたる方より、最自然的の文典上の範疇を有するに至れる（一）の言語系統と、然らざりし方より、述定に「人稱」「數」等をあらはすに至れる、やゝ不自然なる文典上の範疇を有することと成れる言語系統とが、漸々に分離し行くに從ひ、上圖中のAとBとの分系線は起りしにて、其のB、すなはち、やゝ不自然なる文典上の範疇を有するものの內には、又、特別に加工的の工夫を言語に加ふるものと、さまでの程度ならざりしものとに分裂し、後者はB′と成り前者はCと成り、其のCは、更に、C′とC″との如き分系線を成すに至れるものにして、このB′すなはち添成成語組織のものは、ウラル、アルタイック語族其の他の、其を使用したる民族が、餘りに注目すべき自發的の文化の展開を成し得ざるものとして後世に遺り、其のCすなはち訛成變形組織のものは、印度歐羅巴語族セミティック語族ハミティック語族等の、そを使用したる民族が、自發的或は準自發的に、アッシリア バビロニア埃及、及び、印度波斯、さては希臘羅馬の文化、降りては、近代の科學的文化を發展せしめたりしよりいへば、其の最初に不十分なる言語發展の地位に立ちし方より、やゝ不自然なる範疇を有する言語を領有することと成りたる民族の內にありては、騎虎の勢、其の加工的の努力を以つて進まざるを得ざることと成りしにて、かく成りし以上、其のなかに、特に加工的の制作を言語に加へし程のCの民族は、然らざる程度を守りて其以上に進出せざりしB′の民族よりも、比較的智能の敏活なりしを見るべきものといふべく、其の關係上、

かゝるものの内にては、比較的、心理上に純正なる文典上の樣式を成す範疇概念を有する者は比較的に純正ならざる文典上の樣式を成す範疇概念を有する民族に立ち劣る奇觀を呈する現象と成りしにて、其の言語の範疇概念内容上の性質に於いては、部分的には、互に長短優劣あるなれど、全局の上よりは、劣者はやはり劣者丈貧弱なる性質を、其の文典上の範疇に存するを認むるなり。就中、上文の如く、便宜上添成成語組織の代表者とするウラル、アルタイック語族が、冠性根辭を欠如するものなるが如きは、まづ、其の一端を示すものなり。「添成組織のもののうちにも、ウラル、アルタイック語族の外には、却つて、冠性根辭を有するもの、マレー語の如きもあれど、其の發展十分なりといふべからず。」

二二

今、Cの訛成轉形組織のものが、如何にしてBの系線中より分裂したりしかをいはむに、上にいへる如く、自然の趨勢にて根辭を密着せしめていふ習慣をつくる時は、もし、其の間に或る聲音の轉訛を起すに至ること多きことと成れば、意味上の關係に從つて、之を其の原形に歸すること困難と成るが故に、おのづから、其の根辭を帶有せるまゝの單位語の種々の場合を、其のまゝに、語形の變化と見て、或る關係的區別概念を、其の語形變化にて表現することと心得ることと成るは、自然の勢なるべし。今、之を、今のわが國語の例に取りて類推せしむることとすれば、「言ひたり」――（此は二語なれど）――の如き文語の訛轉にて、其の「たり」の語形も「た」と成り、意味も廣く過去の意味に通用することと成り居る口語にて、「花を見た」の如き用例を成す場合には、なほ、之を「見」と「た」とに區別し、意味をも、其の通りに二つに分解して認むること容易なるべけれど、「言つた」「知つた」の如き場合には、語形をも意味をも二つに分解して認むること、難かるべし。かくして、「言はむ」より來れる「言はう」などと取り合せて、「言ふ」「言つた」「言はう」等を列べて見れば、此等につきては、「言ふ」といふ動作につきての關係的區別概念が、一々分解的に觀察せられずして、「言ふ」「言つた」「言はう」の如き語形の變化に依りて、其々の意味上の區別を成す文典上の範疇をあらはすものと認めらるゝことあるは、甚自然なるべし。更に、「見る」といふ語につきても、「見た」は、二つに分解して味はひ認むること容易なれど、同じ「見る」に關係的區別概念のそふ場合にて、「見む」より轉訛せる「見やう」の如きものにありては、――（「見やう」の如き形は、「言はう」「往かう」「推さう」の如きものゝ擬推にて、「あ」音を「む」の音便の「う」の上に添加して發聲するに方つて、上の「み」音の尾韻の「い」、其の「あ」に加はりて「やう」と成れるなり）――上例に準じ「見る」「見た」「見やう」を一列に連ねて、其の語形の變化にて、其々の意味上の區別を成す文典上の範疇をあらはすものとして認むることを得べし。又、此等と同樣に、位格に關して、「わたし（私）が」は二語なれど、「わたしは」「わしを」「わたしに」と各二語にいふべきを、訛音にて「わたしやあ」「わたしよを」「わたしん」の如くいふ場合をも、語形の變化に依りて關係的區別概念をあらはす文典上の樣式と認むることを得べし。これ、すなはち、訛成變形組織の成立狀態なり。かくの如き、わが國語の例は、近き時代に起りたる轉訛にして、わが國語の本性にはあらざれども、かゝる狀態を、分示組織ならぬ、添成成語組織の語根根辭の間に起して、遠き史前時代に、關係的區別概念を表白する特性たらしめしものが、B中に起りて、B′に對して訛成變形組織の樣式を成して、さ

る方に大に榮ゆるに至りれる、これすなはちC′の起源なり。「其の語系のもの、特に印度歐羅巴語の訛成轉形組織が、添成成語組織の訛轉より來れりしものなること、今は全く、西人間の定論なり。」

かゝる語系が一分系として發展し、加工的の工夫を加ふる心理狀態を持する時は、種々に曲折したる訛成轉形組織を之に混入するを得べく、近代のものにて例ふれば、英語の man が men にて其の複數をあらはすことと成れりしは、元來、man の末に根辭を加ふる代りに、其の中間の母韻の所に e にを加へて mean としたるが、men と成れるにて、獨逸語にて所謂名詞にも所謂動詞にも、「ウムラウト」に依りて文典上の範疇的意義を區別する樣式を有するも、全く同じ性質のものにて、かゝる方法にて關係的區別概念の區別をあらはすも、亦、往古に於いて訛成轉形組織の間に起りし、やゝ新式の加工的制作法たりしなり。凡そ印度歐羅巴語族の訛成轉形組織は、發展上、この後接挿音二種の方式、すなはち外轉法（External method）內轉法（Internal Method）の二樣式を以つて、其の主たる手段として、訛正――（其の正なるものは、なほ、添成の餘を存するなり）――並び交るものとして之を認むべし。これすなはち、C′の分系なり。

然るに、かくの如き加工的手段を執つて關係的區別概念をあらはす方に進み、一々其の原形に復すべき氣分を忘れむとすることと成る時は、おのづから、所謂子音（Consonant）母韻（Vowel）の結合なる音節（Syllable）の變化に依りて、其の關係的區別概念をあらはすと認むるが如き心理狀態をつくることとも成り、かくの如き趨勢は、更に曲折一番して、子音を主とし母韻を變化せしめて其の區別概念をあらはすといふ氣分をつくり、其の心理狀態よりして、更に深く加工的の工夫に進入したる民族は、一聯三個の子音を骨子として、其の子音に伴なふべき母韻を變化せしむることに依りて、種々の文典上の樣式を成す關係的區別概念をあらはす特性を其の國語に附與すべき特殊なる加工手段を弄び、以つて言語につきての民族心理の一極端の例として立ち、且つは、甚古き時代の人間が、如何に言語の制作方面に努力奮鬪したりしかの痕跡を後世に遺すことと成りしなり。今に於いて、希伯來語を中心として考察すべき、セミティック語族、及び、其の類族として觀察すべきハミティック語族の言語は實に、この類にして、C′の系線を成す部屬なり。この部類に屬する民族の事業として存する、埃及及びアッシリア、バビロニア等の巨大なる物質的遺物につきて、世に之を驚歎する者多けれど、其等は、古人の事業としては、寧ろ憫笑すべき些事にして、言語に於ける、この曲折したる制作こそ、――（其の得失問題は暫く別として）――其等民族の事業として、數等を拔きたる奇觀といふべきなれ。「此等の國語の事につきては、第二部なる本論に至り、必要に應ずる具體的の例をば示すべけれど、こゝには、却つて讀者の紛雜を路すべきが故に、勉めて實例を避くるものと知るべし。他語族の國語につきても、わが國人の耳目に普通なるものの外、之に準ずるものと知るべし。」かくて、上圖のC（三）中、印度歐羅巴語族のC′とセミティック語族等のC″との分裂展開し來れりし所以、知るべきなり。上圖中、AがAxの分岐を出し、BがBxの分岐を出し、C′が$C_x^{\prime}$の分岐を出し、C″が$C_x^{\prime\prime}$の分岐を出したる關係につきては、第二部にいふ場合あるべけれど、後代に及んで、A′B′の系線にして、訛成變形語法を交へたる混成組織を成すものを生じたるが、Ax, Bx にて、C′C″の系線に屬するものにして、反對に、分示語法を蘊生し、之を交へたる混成組織を成すものを生じたるが、すなはち、$C_x^{\prime}$、$C_x^{\prime\prime}$なりと知るべし。

二三

今、A、すなはち、わが國語を主とする分示組織の分系につきていはむに、西人の臆斷を好む者、妄に玉石を混淆して、わが國語を以つて、添成成語組織の國語と成ししは、大なる錯誤なり。今は故人と成りたるWhitney (W. D.) 氏が、わが國語を以つて系統の解し難きものとして、無理なる斷定を避け、今も、いまだ分類せられざる國語 (unclassified language) として之を見る者あるは、信に、分を知る學者の態度なり。然るに、わが國の學者にして、みづから自國語の性質を觀察することを解せず、妄に前說に雷同するが如きは、甚愼重の態度を欠く者といふべし。わが國人に蒙古人種の血を混ずること多きを以つて、早計速斷、言語も、亦、當然ウラル、アルタイック語族に屬するものと盲推し、わが國家を開きたる吾人の祖先は、蒙古人種の一系の、朝鮮半島を經てわが國に進入し來りたる者なりと迷信し去り、古傳說上の高天原をも、漫然、亞細亞大陸の東北方面に置くべき豫想と頑信とをつくり、之を以つて、人種問題並びに上古史問題解決上の、自明的不可抗的の公理天則なるが如くに考へて毫も省ることを知らざるが如きは、言語學理の論理的解釋より見、又、傳說研究の合理的觀察より見て、蜃氣樓にも似たる膚淺浮薄の見解なりとす。「言語の學理につきては、漸次に本稿に論述する所を見るべく、以外の事につきては、別著に於いて詳論するを待つべし。」

わが國語は、既に一言したるが如く、純正なる分示組織の國語なり。わが國語の物象につきての關係的區別概念は、固より、添成組織に依りて其の語を成す。此は、かの印度歐羅巴語族其の他も、同じ事なり。「之を以つて、わが國語を添成組織の語族に列せむとならば、其の印度歐羅巴語族等も、亦然せざるを得ざることと成るべし。」構想的結合の關係的區別概念に關するものにつきても、其の純正なる構想的結合の關係的區別概念が、また、添成組織を存することも、事實なり。然れども、純正なる構想的結合の關係的區別概念の表白法の發展は、殆ど、わが國語特殊のものとして、他國語の上に超然たるものにして、創古に於いて如何にわが國家の中堅民族の智能の優秀なりしかを、能辯に談る徵証たるは、自明の事なれど、そが他に比類なきものなる點に於いて、——(又、必しも、添成組織のみならず、分示組織を成すべきものをも併用する「例へば、「明に知る」「長の日」の「明に」「長の」の如きものある」點に於いて)——他の民族との民族心理の差異をこそ示せ、他のものと類族たるべき徵証を成すものにあらず。學界上一般に認められ居る言語の性質上の異同を判する準繩たるものは、——(既に上にも說明したる如き關係にて)——西人に依りて、所謂「文典上の樣式を成すものとして認められ居る、構想的結合——(すなはち、文の構成的結合)——に關する意味上の關係的區別概念、すなはち、位格 (Case) 働勢 (Voice) 述法 (Mood) 時化 (Tense) 及び單複數 (Number) 男女性 (Gender) の如きものの表白につきての、樣式上の性質にして、——(所謂名詞の單複數「國語によりては一對數を含むこと、既にいへるが如し」と、男女性「國語によりては中性を含むこと、既にいへるが如し」とは、其の自然的に認得すべき必要を感ずるものの外、元來、物象につきての關係的區別概念として思ひ浮べらるべきものにあらず。然るに、述定に、「人稱」より起りて單複數を添加し、更に男女性を添加して、文主に對する述定關係を示すことと成れる國語にありては、上文にもいへる如く、更に、逆樣に、之に對する文主に必らず或る數及び性を添加して相契合

しむべき必要を感ずることと成り、施いては、名詞其のものに、必ず其の數性の樣式を領有せしむるものと成し、以つて、一種の民族心理を成し、わが國語の如く、述定に斯くの如きものを添加することなき言語を有する民族心理より推して、たゞ物象につきての關係的區別概念の必要上自然に誘起せらるゝ單複數男女性のみが、意味上の關係的區別概念として思念せらるゝものとして認むべきに對し、其の間に民族心理の要求全く相同じからず成りたりしなり。）――此等は、大體上、――（すなはち、單複數男女性につきての或る例外を以つて）――大概の國語に共通的に存在するものなるに依り、其の共通的に存在するものにつきての表白法の異同を比較して、添成成語組織訛成轉形組織其の他分示組織總示組織などの對照を注意して言語につきての所謂形態學的分類（Morphological classification）を起したるが、かゝる方面の研究の權輿にして、其が、確に實際的に國語分類上の要術に立ち準繩を成すべきことは、分明の事なりとす。されば、かゝる方面のものにつきて、わが國語を觀察することとすれば、わが國語は、實に、位格働勢述法時化に於いて、全く、補助の單位語としての廣義の「てにをは」――（すなはち、靜辭〔＝所謂助詞〕動詞〔＝所謂助動詞〕）――を以つて之を表現する特性を有し、――（勿論、全く後世に生じたる訛成轉形組織なる國語の語法の、既に例示したるが如きもの、すなはち、Ax は、こゝにいふが如き國語本來の性質上の系統論に關與すべきものにあらずと知るべし）――其の位格に屬するものは、補助の單位語としての「を」「に」「より」等を、所謂名詞代名詞の類にそへ、働勢に關するものは、同じく、「る」「らる」等を所謂動詞の類にそへ、述法に關するものは「なり」「む」「らむ」「めり」「らし」等を、時化に關するものは「き」「つ」「ぬ」「たり」等を、同じく所謂動詞の類にそへて之を表現するなれば、明に、西人の所謂、Postposition（後置詞）Auxiliary verb（助動詞）に當る地歩を占むるものなり。たゞ、其の間に存する差異は、所謂助動詞が、元來 Principal verb（本動詞）たりしものが後代に轉用せられて補助の役に當るものと成りしにて、實に、其の國語の訛成轉形語法の部分的の凋落を補充せむが爲の權宜に起りし――（このことは、今は、西人の一船に許す所にして、こゝに辨ずる迄もなし）――に對し、わが國語の其の用を成すものは、全く補助用の單位語として、本來的に其の種の語として發展成立したるものなるにあり。――（「なり」の如きは、「あり」ありて後に起りしものなれど、「あり」が「なり」と成りしにはあらで、「に」と「あり」とを併せて新に作られたるものにして、「なり」といふ語としては、本來的に補助の單位語として生産せしめられたるものなること、學理上實際上、何の異論を挿み得べきものにあらず。）――西人の所謂 Auxiliary verb が、其の附屬すべき Principal verb の上にある方より、多少の異同を感ずるが如きは、Postposition と Preposition との差異の如く、其の國語の性質に伴なふ、位置上の特性が、或る氣分を疎密緩急の消息につくらしむる迄にして、この論に與るべきものならずと知るべし。かばかり明確顯著なる事理事相を、在來、わが國人の間に認むることのなかりしは、如何に、わが國の言語學的研究が、幼稚の境にありて、毫も、實際の性質を執つて歸納的に論結すべき獨立的思索の門に入らず、空しく權威を西人の言說に求めて、附加演繹せむとの心構へのみする法懦の情に捉はれたりしかを知るに足る。慨歎すべきなり。

二四

かくて、上來章を重ねて說明したる所に依りて、ほゞ其の要領を攬り得べきが如くにして、抽象的言語時代に入りて、語彙の(最初の)發展時代なる第一紀、語根の(最初の)發展時代なる第二紀、根辭の(最初の)發展時代なる第三紀より、言語大成完結時代なる第四紀としての言語の鼎立時代は來り、更に推移して、言語の頽敗時代なる第五紀としての言語の四分時代は來り、其の分裂の勢と其の蕩逸の情とを持して、轉展して今日に到れるにて、之を月の盈虛消長に例ふれば、其の第四紀が七八日より十五夜に達する迄の時期にも當るべきものなること、上章にいへるが如し。もし、其の例を以つて推せば、第五紀は、十六夜より二十二三夜迄の月にも當るべきものなれど、これは、たゞ消長の機運をいふのみにして、人間の人間たる所以の發動的加工力を失はざる以上、固より機械的に盈虛消長の勢を持するものにはあらず、また、極端より極端に移り、更にまた其の元に復る自然的循環の、月の視運と同一なるべきものにあらざるは論なく、すべてに於いて、加工的生活の人事の消長は、其の氣分の緊張し其の精力の集注せられむ場合には、條理のあらむ以上、何處迄も進展して、殆ど造化を壓する思ひあらしむるに能ふべく、氣分弛緩し精力消耗せる場合には、保障なからむ以上、何處迄も衰退して、殆ど禽獸昆蟲にだも劣る思ひあらしむべきものなるが故に、すべてに於いて、一揆一律を以つて推すべからざるものあり。況して、言語大成の事業そのものが、――(其の外的言語の場合のみにつきていふも)――人間の社會的生活と主伴を成して、人間の事業をして、横に同時代の人、縱に前代累世の人の思想と營爲とを集成し得べきものたらしむる機關として、人をして人たらしむる所以の貢獻を致しつゝあるものなれば、言語が一度大成の事を終へたる以上、苟くも或る程度の加工的營爲を行ふべき發動力を失はざる以上、時に取つての自然の勢に乘ずることに依りて、容易く其の言語の利用と展開とを起し得べき傾向を有するものなれば、其の自然の勢に乘じ、聲音を越えて文字と提挈し、日用を越えて文學を成し、常識を越えて學問を樹つるに至ることと成るは、自然蹈むべき順路を成すものにして、大體の機運は機運として、其の文字文學學問といふものの耕耘に從事すべからむ刺激の存せむ以上、其等の或る程度迄の進歩發展は、制作せられたる言語大成の遺德に依りて、容易く興起し得らるべきことなれば、毫も異とすべきものにはあらざるなり。然るに、近視眼的視察を以つて、目前の苟安に耽り、其の小波瀾に游泳して、遠大の觀を知らず、みづから今を過大にし、みづから今に甘心するが如きは、偶以つて、其の想界の小なるを見はすのみ。一般的に之を觀ずるに、事物の行動、物質的にも精神的にも、社會的にも個人的にも、苟くも動力のある所、こゝに必ず消長盈虛の運あり。消長盈虛の運ありといはむよりは、寧ろ、萬事萬物、皆、消長盈虛の形式を以つて進退するものといふべきなり。消長盈虛の形式とは、すなはち「りずむ」の形式なり。陰陽消長の形式なり。現代の人には、他語は舊臭かるべし。「りずむ」といへば、現代的なるべし。其の現代臭き語にていへば、あらゆる事相につきて、「りずむ」の形式を除けば、力の發動なかるべく、力の發動を認むる所、必ず「りずむ」の形式を伴なふにて、あらゆる事物あらゆる行動、いづれも「りずむ」ならざるはなく、世相人事の複雜なる、大波小波無限無數なりともいふべけれど、「りずむ」の線によりて經緯せられざるはなしといふべし。人事、氣分の緊張精力の集注如何に依るといへども、或る一時

代に於ける一時の緊張と集注と、また、大「りずむ」系線中の小「りずむ」たるに過ぎざるなり。言語の機運また斯くの如し。言語の消長推移に關する大なる「りずむ」、豈に考慮せざるべけむや。

既に、其の一端は上章所々に繰り返したることなるが、言語大成の事、一度遂げらるゝ時は、よし、理想的に完全ならずとも、時に取つて、思索研究の用に堪へ思想交換の器たるに適すべきを以つて、最早、一度は、更に之を展開せしむべき必要を感せず成り行き、精力集注の衝點は他に移り、言語は、たゞ使用するのみのこととなり、自然的に傳襲相承し、時代の疊累と民族の繁殖分裂の關係とは、往苒と之を持ち崩すのみにて、其の言語の短を察し長を揚げて之を改善すべき衝動――（少くとも、言語の大成を誘起したるが如き自覺的反省的の耕耘を起すべき動機を成す衝動）――に接せず、轉訛頽敗、たゞ、時に取つての實用に堪ふるものたるに甘んずべき、大體上の潮流を成す。然れども、其の間、やゝ其の頽勢を支持すべきものとして見るべきものの存するは、文學の興起なり。文學といへども、艸創時代の文學は、後世の文學の如く、專々しく構へて、特に製作するものにはあらず。感情の激越する所、勢歌はざるべからずして歌ひ、情意の懇切なる所、聽く者に容れられむが爲に語を盡すが如きことに始まり、後遂に殊更に構へて制作する氣分とも成り、其を愛翫する氣分をつくることとも成り、以つて、漸々に、今日の意味に於いての「文學」らしきものに展開し來りたるものにして、其の愛翫といふ氣分、從つて、他に愛翫せられむとする氣分は、成功したる既成の文學を推し、之に倣ひ之を擴むる所あるべき必然性を有するが故に、文學語には、自然保守性統一性を有することと成る傾向を存す。これ、其の言語の頽勢を支持すべき多少の勢力を成す所以なり。然れども、日常の會話語は、臨機に實用を濟する方を主とするより、自然、自由性分裂性を有することと成る傾向ありて、特に、よく之を調停すべき制作的手段を施すにあらざれば、兩者の適當に融和せられむこと難く、時代と共に轉輾變易し易き、日常使用の比較的親近なる會話語は、比較的親近ならざる文學語を、破毀もしくは變改せしめつゝ言語を繰り、民族の繁殖分裂に依りて居住の地域擴大せらるゝに從ひ、年月と共に、彌々言語の分裂轉訛の度を進め、一國語を使用する者の間にも、統一を難からしむることと成り、特に、現代の如く、進出自由を好み保守服從を嫌ふ情狀を呈するに到りては、言語の問題に於いて、文學の保守性統一性も、漸々と其の勢力と光輝とを失はむとしつゝあるものなり。夫れ、人、自覺ある者は自主の精神を起し、實力ある者は、獨立自由の欲望を懷く。其の抑壓制肘を悅ばざるべき氣分をつくるは、必然にして、また、優良なる資質の發揮なりといふべく、從つて、大に支持せらるべき理由あることなれど、其の自覺の氣分をつくり得らるゝに至れるも、人間の社會的國家的生活の賜にして、而も、社會的國家的の生活には、其の氣分を極端に支持することを許さず。之を極端に支持すれば、其の社會國家は、覆滅に歸着することと成る外なく、社會國家の覆滅は、飜つて、其の自覺自主獨立自由の、人間らしきあらゆるものを奪ひ去つて、禽獸昆蟲的の生活狀態に復らむとするものにして、而も、加工的生活に依りて遺傳的につくり上げられたる吾人の體質性情は、今更に禽獸昆蟲的の生活狀態に復ることを得ざるなり。こゝに於いて、今の、所謂醒覺したる現代人は、今や正に、其の問題解決の琴線に觸れむとして、いまだ其の歸趣を見出すことを得ざるが如く、やゝ同一なる傾向は、言語其のものの上にも向ひ來り居るなり。「此等の言語問題と其の解決法とは、本稿の第三部に於いて論辨すべく、其の他は「人間本能論綱」の餘論として、之を詳論

すべし。」

文學の外、言語の大成より、自然に、時機に應じて展開し得べきことと成り居りし文字の制作は、また、人文の複雜なると共に、利用せられ、たゞに文學の發展を助けたるのみならず、學問發展の必需の機關たりしなり。學問といふものも、言語の大成に加ふるに文字の制作を以つてしたる以上、時機に應じて自然に展開し得べき順序と成り居りしものにて、後世刺激に接し要求に應じて、漸々に發展し來れるなり。かくて、「學問」として、特に一つの組織的體系を成す抽象的知識體出で來ること相次ぐ時、もしくは之を應用したる物質的社會的の現象大に起る時は、一見、人の思考及び生活は、隔世の進歩を成したるかの觀を呈することと成り行き、其の知識及び變化し行く生活狀態の複雜に伴なふ必需なる語彙の增殖は、固より自然の事にして語彙饒多の意味に於いて、言語は後世に豐富と成りしには相違なかるべし。されど、かゝる知識の發展言語の豐富は、人間其のものの根本的質量に於いての智力の進化にもあらず、言語其のものの根本的性質に於いての機能の進化にもあらず、人の根本的の智力、否、「本能的の理性」ともいふべきものは、人情の極致すなはち「人間としての本能的の性情」――（人間本能論綱に於いて別に論ぜらるべきもの）――ともいふべきものと共に、寧ろ、日に暗黑の色彩に覆はれ行かむとする觀あるのみならず、言語其のものの根本的性質に於いての機能の進化にもあらず、人の根本的の智力、否、「本能的の理性」ともいふべきものは、人情の極致すなはち「人間としての本能的の性情」――（人間本能論綱に於いて別に論ぜらるべきもの）――ともいふべきものと共に、寧ろ、日に暗黑の色彩に覆はれ行かむとする觀あるのみならず、言語其のものの根本的性質の機能は、之を完全に利用する能力と共に、日に晦澁に趨かむとしつゝありて、皆、醒覺せる志士仁人の力に依りて、時代を區劃すべき大業を振起完成せしむることを得て、始めて救はれ行かむとするものなりとす。勿論、人間として、みづからを進化せしめ來りし其の人間は、醒覺したる場合に於いて、又、適當なる方向に、人間そのものを回轉進化せしめ行かむことは、自明的に心證し得らるべきのみならず、大體に於いて頽敗の運を辿り居りながらも、行き詰りと成りし折々は、其々に其の窮境を打破して、部局的ながらも、適當なる制作力を發揮し來りしこと、人生其のものの上にも、言語其のものの上にも、其の例常に存せり。たゞ、其が機運の關係上、部局的にして一般的なること能はず、補綴的にして徹底的なること能はざりしなり。今の機運は、すなはち、根本的一般的に、人生問題と共に、本稿の題目なる「言語」其のものの徹底的の解決變通の方策を要求しつゝあるなり。この要求に應じて起る運動の結果が、首尾よく、理想的の制作を言語に加へて變通の途を開き、以つて、大に言語本來の功用を全うするものたらしむる所、こゝに第六紀の理想時代は發現すべきものなるを夢み、正に條理のある所を推して遠大の長計を立つるを期しつべき、この有爲の秋を逸せしめむは、先識の士の爲べきことにあらず。

讀者、今、眸を放つて世界の大勢を觀せよ。世界萬國は皆比隣の如くにして、政治上社交上經濟上知識上思想上、凡百の事、皆互に交接取捨せられつゝありて、又、孤立して樹つこと能はざるにあらずや。然れども、其の間の大なる障礙と成るものは、相互の國語が、互に、容易に修了すべからざる外國語として――（民族心理と共に、之を各方面の極端に引張支持し居る、其の符徴的約束の關係に於いて）――了得し難きものと成り居ることなり。わが國語の歐洲の國語に於けるが如き、懸隔の大なるものは、言ふ迄もなし。歐洲人等の、同じ印度歐羅巴語末裔の分枝として、其の間、五十歩百歩の差はあれど、全く近親關係の國語を有する者の間にも、亦、斯くの如き障礙は、大に其の交接交通の便を欠く。こゝに於いて、所謂「世界語」の企圖の如きもの起りて、其の欠陷に應じたる一種の補充案を成しつゝあるなり。其は、勿論、各國語を拋棄せしめて之に代へしめ

むとするものにあらず、全く、公私の國際語として、現代の欠陥を補充せむとする理想に立つに過ぎざるなり。——〔わが國の一部の識者(?)中、其の企圖の一つなる「エスペラント」を以つて、わが國語に代ふるものたらしめむとする氣分を持して、其の宣傳に勉め、或は、英語を以つてわが第一國語(!)たらしめむといふが如き主張を持して、後進に接する者あり。民族心理と言語との關係をも、言語其のものの性質をも、歴史をも、また、人間と文學、もしくは、國民と國文學との關係をも知らざる、猪勇一片の豪氣、吾人は「あさましく、ゆゝしき」迄に、其の自覺なきに惘れ、却つて、西人の思はくを愧づ。〕——歐人の立脚地より見て、比較的穩當なる手段として、かゝる加工語の制作者は、羅典文典系の骨子に據りて其の組織を簡潔にし、彼等近親語間の共通語を以つて目すべき關係のものを主として語彙を選採したるものにして、すべての彼等民族に於いて、全く無緣不知ならざる性質を有するものなれど、其の所謂世界語は、彼等の間にだも、容易く豫期の成功を見るべき光明を認め難きは、暫くさて置き、之を異種異性なる、言語及び民族心理を有する國民に、普く遵行せしめむが如きは、——(歐洲人以外の民族をして、皆、自覺なく自主の抱負なき猿猴的民族ならしめむには、いざ知らず)——殆どあり得べきことにあらず。何となれば、歴史ある自國語を排して他國語に就かむは、——(其の得失は、假に暫く別として)——現代的氣分として認むべき自己本位の群衆心理に支配せらるゝ潮流の下に立たむ以上、——〔今の社會主義を唱ふる者を見るに、多くは、自己本位の群衆心理、言ひ更ふれば、個人主義の社會的群衆心理を主持するものにして、社會其のものの性質に依り、社會其のものの繁榮を主とし、個人の私を捨てて社會其のものに献身することに依りて、適當に人權を全うせむが爲に其の主義を執る者として認め得べからず。其の極端なる系統に屬する者に於いては、特に其の徴候の著しきを認むべく、社會主義の名を持すれども、却つて、社會の何ものなるかをも知らざる、立脚地上の浮浪者なるが如く、この觀察よりすれば、彼等は、名目上の社會主義者にして、寧ろ、事實上の反社會主義者なりともいひつべく、主義上、甚根據なきものにして、たゞ之と背照せらるべき他方面の奬賞を塞くべき藥物とも見るべきものなるが、〔社會及び國家と人間の本能との關係につきては、「人間本能論綱」に於いて論述すべきなり〕かゝる方面の所謂主義者ならずとも、世界一般が、今正に更新期を誘起すべき過渡時代に屬する、必然の趨勢として、又、今の世界の指導者の他位を占むる西洋諸國の、基する所ある個人本位式民族心理が、中心的勢力として、思想界の牛耳を執り、世界に跳梁する時代的現象として、一般の人心、自己本位の群衆心理に風靡せられ支配せられ居るが如し。〕——まづ、到底、望み得べきことにあらざるのみならず、——〔この關係につきては、自己自國に執着すること甚しき、狹量(?)なる、かの歐米人に私淑しながら、其の師とする所に反して、自國固有の事物を捨つること弊履の如く、心を空うすること兒童の如くにして、歐米人の尻後を逐ふ點に於いて、餘りに公明純潔(?)なる一部現代のわが國人が、空しく豫想し理想する所とは、必然に背反する結果を見るべきなり。〕——今の所謂世界語の候補たるものは、たゞ、部局的民族間の便宜といふことの外に、「世界語」(international language)の世界語たる所以の內容的根據を成す資格を具備するものにあらざるを以つて、西人を崇拜し之に隷屬するを榮とする狂熱ある者の外、其の便利更益の條件を異にする、異種異性の言語と民族心理との領有者たる諸民族が、各自の利便に逆らうて迄も、世界語として無資格なる今の所謂世界語を受容せむが如きこと、決してあり得べきものにあらざれ

ばなり。然れども、かゝる加工語の設計せらるゝこと一再ならずして、多少の注意を世上に惹くことのあるは、偶以つて、時代的要求の如何なるものあるかの一端を解するに足らむ。さるにても、外國人間の事よりも、自國民間の言語の合法なる統一だにも、殆ど望み無きに近き、現時の狀態は、如何に之を所理すべきものなるか。所理せずして放任すべきものなるか。果して、所理すべきものなりとすれば如何。自國語の統一だにも絶望なるべくして、世界國語の統一、もしくは、國際語としての世界語の成功が、果して、期し得らるべきか、期し得られざるべきか。此等の談、豈一朝一夕の事ならむや。――〔すべて此等に關したる條理は、第三部に於いて論述すべきなり。〕――諺に曰はく、「急がば廻れ瀬多の唐橋」と、吾人は、まづ、言語研究の本に復らざるべからざるなり。

○附　錄

(一) Incorporating Language について

左の文は本稿内容の大意につきて、同題目の下に、齋藤報恩會時報に六回に亙りて、掲載せしものの一節なり。本稿第二部を出さざる内は、本稿一九の補充として參觀せらるべきものなれば、こゝに抄出して附錄とす。

Incorporating Language(抱括團成語)すなはちPolysynthetic Language(連結團成語)の事につきては、W.D. Whitney 氏が其の著 Language and the Study of Language に"It is highly polysynthetic, incorporating into its verbal forms a host of pronominal relations which are elsewhere expressed by independent words. と言つたやうな工合に、他國語では、別に單位語(すなはち代名詞)であらはさうといふ人稱的關係のものを、動詞に帶有せらるべき Affix (根辭(ネアニチハ)、接辭、Prefix, Suffix 等を總括した稱呼)であらはすので、其がまた其の方に特別の發展をして居る方から、一種形態論上の特徵を起したもので、この人稱的關係をあらはす Affix、寧ろ Affix 的のものといふべきものは、印度歐羅巴語にもある動詞帶有の人稱的語形變化の起源と同じ心理作用で起つたものでありますが、其の方に特別の發展をして居るところに、自然、大に違つた所が出來て來ましたもので、――(或る意味からいくば、Inflectional System 中、印度歐羅巴語の比較的單純な Inflectional system に對して「セミ

ティック」語族などが、甚複雜なる Inflectional system を發展せしめて、其の特徴ある性質を成したやうな區別を、其の人稱的の表白法に起したのでありまして）――此につきては、自分も、其等の國語がよく手にはいつて居らぬ上に、適當なる參考書もありませぬので、解りよく自由な説明をすることがむづかしいのでありますが、まづ Omaha 語で「矢の長いのを（自分が）手で折つた」（I broke by hands long arrow）といふのを

Mo" ke bthi xo" ha

といふ、之を Francis La Flesche 氏の解説に依つて説明すると、其の Mo" が Arrow で ke が long で、b か I で（別に文主が無いから此が文主の譯ではあるが、一種動詞に帶有せらるゝ人稱形と成つて了つて居るやうな譯で）、thi が action with the hand or hands（すなはち、「手で」といふ意味で、此で、Instrumental case の名詞が動詞の文典形式範圍に抱括せられて居ることと成つて居るやうな譯で）、xo" が broke（すなはち break の過去形）で、最後の ha が masculine termination of a sentence として動詞に添ふ人稱的形式の一つでありまして、この ha は、この文を言ひあらはす人すなはち此の文中の I であらはさるゝものが男性の人であることをあらはすのであります。斯樣にして、こんな例で考へたら、簡單に Whitney のしたやうな説示の大體も解りませうかと思はれます。

其から「アメリカン、インディアン」語族では、動詞の文典形式に、文主の人稱的形式を表白するのみでなく、所謂 Direct object すなはち Accusative case に關係したる人稱的形式をも帶有せしむる特徴あることにつきては、Bancraft 氏が Each active verb includes in one and the same word one pronoun representing its subject and another representing its object also と言ひたる類は、Trumbull 氏が其の On some Mistaken Notions of Algonkin Grammar に於いて、Cree 語にて、ne-sâkehewan の I love someone (indeterminate) なるべきに對し、ne-sâkehewâywissin の I am loving なるべきを、Howse 氏の Cree Grammar に之を分解して、I am love-someone-ing と直譯したのを表章して擧げたるやうな例で、ほゞ見當がつくことと思ひますが、他にいろ〳〵と此の語族の國語の説明を試みたものも流布して居りますが、其がどれ丈信用が出來るかよく解りませぬし、勿論苦心して集めた若干の文典上の著述にも直接當つて見ましたが、どうも記述が不完全で、――（此方の會得の不完全なのかも知れませぬが）――また、細い性質を立ても入つて説明し得べき材料を見當てることが出來ませぬので、實は、一寸困つて居るのであります。けれども、兎に角、上述の如き形態論上の性質關係より、他の語族の國語の如く、單位語（すなはち構文上の原基としての單位）と單位語を組み立つる一段下の原基としての造語法上の單位（すなはち、Root や Affix としての單位概念に立つもの）とを、用語上の心理に思ひ浮べて、言語につきての二重の單位を立てずに、word とも Root ともつかず、Particle（助詞、助辭）とも Affix ともつかぬ、單一なる單位を取り合せて、直ちに文もしくは文の一部分たるべきものを構成するといふ心理狀態を持して居るもので、其の間に、文典上の形式を成す種々の範疇的概念が、こぐらかつて居るのであることは、斷言し得るのであります。

（二）形態論上の事につきて

左の數節は、上節の附錄と同じものの抄出なるが、本論と出入ありて、多少、或る種の讀者の參考とも成るべきかと思ふがまゝに、こゝに添附す。

形態論上の分類は、西洋人の手で開けたものでありますから、まづ、彼等の眼に映じた所の分類組織の大要を批判的に一口談しにして見ますと、所謂西洋人自身の言語は、所謂印度歐羅巴語系に屬するもので、其が世界中に延蔓したのは近代以來の事故、其の近代現代の分を度外に於いて見ますと、東は前印度より西は歐洲一圓に亘つて居る民族の使用する言語であるといふことに成りますので、其の意味で、その古代語を標準として印度歐羅巴語とは名づけたもので、「サンスクリット」「ゼンド」「グリーク」「ラティン」「リスアニアン」「スラボニアン」「ケルティック」「テュートニック」等を其の語族の代表とすることは、皆さん御存じの通りでありますが、之に古代の「バビロニアン」「アッシリアン」さては今の「アラビアン」等の言語を含む、所謂「セミティック」語族、古埃及び今の「コプティック」等を含む所謂「ハミティック」語族を併せて、此等は皆、大體より見て一つの形態論的組織を持つて居るものでありまして、其の組織を Inflection と申します故に、之を名づけて Inflectional language と申すことに成つて居ります。この Inflection と申しますのを、一般に「屈曲」とか「曲折」とか譯して居りますが、其は、ほんの直譯で、眞正の性質を表しませぬ。Inflection Language を、意味を成すやうに譯すれば「訛成轉形語」とでもいふべきでありまして、「くらゐ」「數」「性」「述法」「時化」等の類をあらはす爲に、語の幹部たるべきものに、或る音に意味を持たせたものを附け加へて、其の形態を變化せしむる方法を取り、その手段によりて、其々の構想上構文上等の關係的意義の區別を表白したのが、訛り着いて、一々原形に復して見ることが出來なく成つたもので、其の一部分には、ほゝ原始時代の性質を傳へて、原形に分解して見ることが出來るものを交へて居ても、全體からいふと、意味の區別をあらはす音の添加といふよりは、意味の區別をあらはす語形の變化といふべきものと成つて了つたのであります。（其故 Inflection を起すといふこと、すなはち to Inflect を譯すのなら、正に「訛轉する」とでも譯すべきものでありませう。）この訛成轉形の組織すなはち Inflectional system には、二つの手段がありまして、一つは「內轉法」（Internal method）といひまして、語の幹部の中心の音の變化轉形（主として母音の變化）でありまして、——（英語などの例で申せば、write が wrote と成り、man が men と成る類でありまして）——元來を申せば、此も幹部固有の母韻に他の母韻を添加する、內部への添加法に起つて、遂に訛成したる一種特別の轉形を成すことに成つた譯でありまして、——（何も、Inflection のすべてが、皆或る添加式の原形より訛成したといふのではありませぬ。かゝる方法の起源が、かやうにして出來たのであるといふので、今も其の通りを傳へて居るのもありますが、もう、かういふ方法が慣例習性と成つては、必しもさうといふ氣分でなく、始めつから語形を變化せしむる氣分で音を變化せしめて造つたものもあるので、此は、この內轉法に於いて特に注意して置く必要があるのであります。）——他の一つは「外轉法」（External method）と申しまして、幹部の外側に意味の區別をあらはす音を添加

することで、この方も、添接の都合で或る程度まで原形を訛轉せしむることは勿論あるのでありますが、明に訛成なき添加のまゝのもありまして、大體上、原形に溯り易く分解し易いものであります。——（英語などの例で申しますれば、love が loved と成り、home が homes と成る類であります。）

この名前は、西洋人が、廣く世界に手を延ばし、諸國語に接觸するにつけて、自分等の國語と異國語との組織上の異同を注意し出しまして、希臘語羅典語の文典などで名詞の位格の變化を表白する方に使用し來つた Inflection の語を取つて、之を推し擴げ、名詞の Declension と動詞の Conjugation とを併せたものを對象として、異國語の形態上の性質に對して自分等の國語の性質を區別する標準名として、こゝに Inflectional Language といふ名を立てゝ之を呼ぶこととしたものであります。——［この「動詞」といふ譯語は、實に意味を成さぬものでありまして、Verb の直譯ならば、上文にもいつたやうに、たゞ「詞」と譯すべく、「動作をあらはす語」のつもりならば「動作詞」、「活用ある語」のつもりならば「活用詞」でなくてはならず、又、predicate し assert するといふ、其の本性をあらはす定義的譯名ならば、「述定詞」とでもいふべきものでありますが、今は暫く世俗の稱呼に從つて置きます。］

この訛成轉形の仕方にも、其の內轉法の方で、印度歐羅巴語以外のものにては、なか〳〵込み入つた手段が行はれて居りまして、三つの子音の間に挿む母韻の變化で關係的の意味の區別をするといふ樣な、特に加工的の心理作用を發現して居る組織などがあつて、言語の民族心理上、こんな方に最緣の遠いわが國人の、手輕に會得し又暗記し得べきものでないのもありますが、それ程でなくとも、すべて訛成轉形の語法は器械的に記臆を勞する必要が多くて、自然的訓育法、すなはち、子供の時から知らず〳〵實際的に覺え來つた場合の外、覺え惡く忘れ易く、厄介千萬なものでありまして、印度歐羅巴語であつたとて、既に立派な訛成變形語を成して居る以上、一々其の形式に伴つた關係的意義の區別上の範疇を頭に浮べて、其の形式と合せて讀み別け使ひ別けをせねばならぬのみならず、其の或る關係的意義の範疇に當るものが、其々にたゞ一色の形式を持つて居るのならばこそあれ、形式上からの歷史的の發展で、種々雜多の種類を持つて居る其が、少しも合理的の成り立ちでなくて、すべて習慣的に推移凝成した沒條理のものと成つて居るのでありますから、とても容易く手にはいるべきものではありませぬ。まあ、希臘語なり羅甸語なり「サンスクリット」なりの、少し麗りた文典を擴げて見れば、どんなに複雜なものであるかゞ、直わかる筈です。比較的簡單な形式を持つて居る現代語でも、英語や獨逸語に、今の天下の英才が手を燒いて居るのは、誰も現在に認めて居る事で、此等の國語にでも、まづ、我が國人の民族心理としては、全然頭に受け附け難い思想上の範疇が、其の形態と提携し表裏して居りますので、大ざつぱの事を一口申さうなら、Grammatical Gender といつて Natural Gender と伴はぬものや、日本人では、どう考へても、自然的には思ひ浮べらるまじき、Verb にくつついて居る Person や Number やの概念が、其の複雜なる形態上の樣式と提携して居つて、此等が Idiom や Vocabrary や Spelling や Pronunciation やの複雜なる事以外の、根本的の困迷條件と成つて居るのであります。談しが少し脇道に流れるやうでありますが、さうでなくとも、古來、外國語に精通するのは、信仰か、名譽か、生活の必要か、戀愛の

熟かで、精力を其の目指したる國語に集中する場合にのみ成功したもので、今の日本の外國語教育の如く、たゞ、後日の研究の基礎の知識として、無趣味殺風景に、爲ねばならぬものだからするといふ漠然たる主義主張の下に、多年器械的に詰め込ませて居る樣なことをして、其の語學教育が成功の境に導かるゝものでは、斷じて無からうと思はれます。現代の情實上、或る程度迄は外國語が現代及び次代の一般國民に必要だとしても、少しは、教育上の方法があるべきものだと思ひます。少くとも、(一)こゝにもいふ形態論上の知識を本として民族心理の異同を考へ、無理ながらも、心理上からは順序よくはいるやうに語學教育の基を建つることと、(二)出來るとすれば此丈は出來得べきだ」といふ、無理のない注文を立て、其を規模として目的を定め、其の目的に無理なく進ましむることとし、徒らに萬能を期する無理な注文をせぬこととする丈の用意は、是非〳〵必要だと思ひます。

さて、西洋人が自分等の國語を抱懷する大團體の諸國語を、形態論上 Inflectional Language といふのは、何に對していふのかといふと、其は、彼等の語族か、所謂「ウラル、アルタイック」語族すなはちウラル山アルタイ山を目標とする地方民族を中心としたる國語の系統に屬するもの、すなはち、亞細亞の中部より北方に懸けたる殆ど全部と、歐羅巴に入り込み居る「トルコ」「ハンガリー」「フキン」等の國語とを包括したものと對照して考へられたのに始まるので、此等の國語は、皆、印度歐羅巴語族では Inflection であらはすところを、其の關係的意味をあらはす符徴としての音を語尾に添加する方法、言はゞ、Inflection の一手段なる上述の External method に似寄つた方法を用ゐるのでありますが、大體上その語法から訛成的の氣分を抜き去つたものでありまして、西洋語の合法的に Suffix（接尾根辭、履性根辭、意味ある音の下にそふもの）をそへて Grammatical form を成す奴と殆と區別の出來ぬものであります。(事實に於いて、其の客觀的性質を一つにして居るのであります。)之を Inflectional Language に對して Agglutinating Language といひます。之を譯したら「添成語」とでもいふべきで有りませう。要するに、Inflectional Language も、元來は、Agglutinating system を成して居たのが、Internal method から起つて、訛成の度を進めて、構成法上、Agglutinating の概念で統一的に考へる事が出來ぬやうに成つたまでのものであります。この事は、既に西洋の學者にも認められて居る事で、曾て、Inflection の起源論が闘はせられたことがあつて、其が Agglutinating から來つたといふことに歸着したのであります。

この添成組織の國語には、Prefix（接頭根辭、冠性根辭、語幹の上にそふる意味ある音）としての添成方法を取る國語もあるのでありますが、「ウラル、アルタイック」語族が、まづ代表的のものと成つて居りますから、一通り添成語といへば、suffix をそへるものとして會得せられて居ります。西洋人がまづ此の二つの形態論的樣式を見出して、その次ぎに之に配合せさせた他の對照的樣式が、漢語（及び其の屬類）と「アメリカン、インディアン」の諸國語とで、漢語の方を Isolating Language（單獨語寧ろ獨成語とでも意譯すべきか）といひ、又は、Monosyllabic Language（單音節語）といひ、「アメリカン、インディアン」諸語の方をば、Incorporating Language（抱括團成語とでも意譯すべきか）又は Polysynthetic Language（連結團成語とでも意譯すべきか）と呼んで居ります。

漢語を Isolating Language と呼びますのは、漢語には、西洋人の所謂 Grammatical form に當るものをあらはす符徴が言語の上に備はつて居らなくて、西洋語の語根語幹にも當らうといふものが、單獨に立つて居るといふ意味でありまして、Monosllabic Language といふのは、syllable（音節）を重ねて語を組み立てずに、一語は一音節であるといふ意味であります。（複成語すなはち Compound word は、勿論度外に置いていふのであります。）この單語としての構成法が一音節であるから Monosyllabic といふ名を命ずるといふことは、其の通り合理的なことでありませうが、Isolating といふのは、西洋人の Grammatical form として見るものを本位として主觀的の觀察をする場合にこそ、成程其に當るものが無くて、語根的の單位語が單獨で立つのに相違あるまいが、西洋人の立脚地を離れて廣く言語の理法より見れば漢語とても、所謂助字の内に、Grammatical form を成すものが無いのではないのであるから、其が本統に當つて居る見方とも言はれませぬ。漢語には西洋風の Grammatical form は缺乏して居りますが、助字中の構想構文の關係的概念をあらはすもののあるのを指呼して、之を承認する方より、其の性質を擧ぐれば Analytic system（分示的組織すなはち分解的に文典上の樣式を表示する組織）を成して居るものであることは、「不」「於」「焉」「矣」等の用法について見ても、明である筈であります。

Analytic と言ひますれば、歐洲の現代語を始めとして「セミティック」も「ハミティック」も、現代語は、皆著しくこの分示組織を帶びて來ましたので、――（所謂助動詞や前置詞が Inflection に代つて其の場合に用立つて居るのは、皆其であります）――西洋人は、之を Analytic Language（分示語すなはち分解的に文典上の樣式を表示する國語）といひ、之に對して、古代の Inflectional Language を Synthetic Language（總示語すなはち總合的に文典上の樣式を表示する國語）と言つて區別して居りますが、此は當りませぬ。なぜなれば、古代語にも分示組織が多少混じて居りますが、これは少いから、必しも Synthetic といつて惡くもありますまいが、現代語に分示組織が多くはいつて居るからといつて、やはり Inflectional system を中心として居ることは動かないのであります、たゞ Analytic とは、斷じて言はるべきものでありませぬ。Impure Inflectional とか Mixed Inflectional とか Analytic Inflectional とかいふべきものでありませう。西洋人などにはよく解りませぬが、――（否、日本人も此迄 Morphological system の事を一向に注意して居りませなんだので、ちつとも解つて居りませぬが）――純正の分示組織の國語は、わが日本語であります。日本の古語、及び今の文章語であります。わが國語を Agglutinating Language だといふ西洋人がありますが、此は非學術的の臆論でありまして、其を受け賣りして居る日本の學者のあるのは、體面上頗ぶる恥かしい次第であります。日本語の單位語の組織といふことなら、それは、成る程添成組織でありますが、其の事なら、Inflectional Language の西洋語でも同じ事でありまして、今の Morphological classification には、所謂 Grammatical Form に當る文典上の關係的概念の表白法上の組織を論ずるものでありまして、見當が違つて居ります。日本語の文典上の樣式は、皆、補助の用を成す別の單位語、すなはち、辭（俗にいふ「助詞」）動辭（俗にいふ「助動詞」）を以つてあらはすものでありまして、純正なる分示組織であります。分示組織の國語は、わが國語を代表として朝鮮語などが之に附屬し

て居るのであります。但し口語では、其の補助の用を成す單位語が訛りついて Inflection のやうに成つたのを交へて居ります。例へば「往かむ」「往きたり」を「ゆかう」「いつた」といひ、「往き了ひたり」の如き叢語を之に準じて「いつちやつた」といひ、「其を」「其は」を「そりよお」「そりやあ」といふ類でありまして、之と並べられる「ゆくだろ」「ゆかない」「それに」「それより」の類を、添成組織かと誤解する人もあるかも知れぬが、其を混雜するやうでは、始めより Morphological system の事など談しにならぬ頭を持つて居るのであります。西洋人の日本語の口語文典など書く人が、其の文典上の樣式の說明に Inflection の名を用ゐるなどは、却つて、西洋人の立脚地として「ウブ」な可愛い所であります。

さて、こゝに申したやうに、分示組織の日本語の口語に Inflection を交へ來つたやうに、「ウラル、アルタイック」語にも、Inflection を交ふる傾向が出來て居りまして、此は、口語では、(甲)早口にいつたり何かする方より音韻の訛りを起し易いのと、(乙)兒童時代より實際的自然的に覺え込んで、其のまゝ實際的にのみ使用し居り、國語の分解的會得を試むべき訓育を經ぬ場合には、其の原形に合せて、一々心理的照合を試みぬのとの結果から來るのでありまして、かの Inflectional Language を使用する民族の現代語が、この(乙)の事情を主として Inflection の意味上の區別に關する風味を忘れて濫用する方より其の Inflection の或るものの存在を冗長視して其の一部を頽敗死滅せしめ、更に、其の缺を補はむ爲に他の Principal Verb (本動詞)を補助的に添用して Auxiliary Verb (助動詞)として文典上の樣式の補助をすることと成つたのと、面白い對照をして居るのであります。さて、この Auxiliary Verb の起源は、斯樣のものでありますが、此は、其の國語の本來的に分示組織でなかつたことを示すものでありまして、日本の、俗に助動詞といふ動辭は、此と違つて、全く生へ拔きの補助用單位語であります。「なり」が「にあり」より來り、「たり」が「てあり」より來つた類は、此とは全く別で、原料と成る語には Principal Verb はありましても、其の「なり」「たり」の形と成りたるものは、其の生產の始めより補助的の單位語として成立したのでありまして、決して「なり」「たり」といふ Principal Verb は無いので解ります。日本語で西洋の助動詞と同じ歷史を持つて居りますのは、「給ふ」「侍り」「候ふ」の類の所謂敬語卑下語の部類のみで、此は比較的後世の發展に屬するもので、日本語の成立に關する歷史の中軸に觸れぬものであります。

機關不調分示組織の言語（すなはち Language of Analytic System of incomplete organization）なる漢語の類が、人間の言語發展の歷史よりして、自然的に展開せしめられたものとは認められぬと言ふのは、何故かと申しますと、其の機關不調分示組織の代表者としての漢語につきて見ますと、其の機關不調といふ點が、如何にも、言語發展の初期を表示する原始狀態のものゝやうでありますが、此には、さう一概に申されぬ譯がありまして、大なる疑問が其の間に潛んで居ると言はうよりは、寧ろ、斷じて原始的狀態の言語でないと言ひ得らるべき理由があるからであります。其は、次ぎの三ケ條に歸するのであります。

（甲）信に微々たる文化を持つて居る所謂野蠻人にても、或は添成式に或は抱括團成式に、頗る微妙なる思想上の範疇を成す文典形式の發展して居るのが、世界一體の現象であるのに、

漢民族の如く、文化の展開が最古く最高くあるものとして承認せらるべき、堂々たる大民族にありて、殆ど全く文典上の形式の發表法を缺如する樣な不完全なる狀態を成すに止るといふこと、言ひ更ふれば、思想を支配する最大權威の言語の範疇形式が一向に發展せぬといふことは、最大なる不思議で、其では、優秀なる民族の思想狀態として、其の民族の思想標準の均衡を成す水平線の存在を認め難きことと成ること。

（乙）　さるにても、兎にも角にも、言語方面につきては、思想標準の均衡を保ち得ざる迄に、漢民族は、果して、言語につきて能力の低劣性を示すものなるかといへば、其の言語につきての能力の低劣ならざること、所謂六書の法によりて、緻密なる概念の建設法と表白法とを發揮し、或る意味に於いては、殆ど世界無比といふべき程度に於いて、言語につきての能力上の優秀性を示して居るのでも解ること。（もし、其は文字の事で、言語の事でないといふ人があらうなら、其は違ふ。漢語は、一語が一字を成し字形に意味をあらはす意字として發展した特別の言語であるから、かゝる場合の論に、文字と言語とを取り離して見ることは出來ぬのである。）

（丙）　言語そのものにつきても、古來「文」を以て內外を眩惑さする迄の光輝を發揚し、みづからも、古來「文」を以つて誇りとし、語彙の如きも、複成語（Compound Words）を以つていへば、殆ど無盡藏にも近い國語でありながら、どこ迄も一音節一語たる一音節語（Monosyllabic Language）としての本色を維持して居るのは、殆どすべての他の國語が、必然的に皆二音節以上多音節のものをも發展せしめ居るのに對して、餘りに異常の現象たること。

この三ヶ條の餘りに不自然なる狀態は、自然の發達をしたるものとしては、解釋のしやうがないものでありますので、そこには何か特別の理由があつて、特に、この特殊の狀態を維持して居るのだと言はねばならぬのであります。

古き西人の說に、之を Language of Root Stage と呼んで居りますが、此は甚當らないことで、この Root Stage（語源階段すなはち語源時代）といふにつきては、組織的に說明したものが此迄無かつたやうでありますが、兎にも角にも、かゝる概念は、Inflectional Language が Agglutinating System の訛成であることを認むる立脚地より見て、單位語より其の Affix（根辭）の類を取り除けば Root が殘る譯であるし、また、Root に Affix が添はつて單位語を成す以上、其の Affix は Root に後るゝもの、Root は Affix に先立つものといふ想像は、自然に起り易いものでありますから、既に Root, Affix の結合にて語彙を成し居るを認むる以上、まづ Root の時代があつて、Affix が之に次いで發展したるものなるは、自明の理として心証し易い所から來た臆說でありまして——（勿論、この臆說も一つの洗禮を加へらるれば、立派に學問上に取り入れ得らるゝ說と成るべきであることは、直次ぎにいふやうな譯でありますが）——漢語に、其の Affix に當るものの發展を認め得すして、單位語が、皆、一語一音節である方より見れば、此は必ず其の Root Stage 其のまゝに殘つた國語であらうといふ推定をしたものでありませう。

然しながら、其の實、人間の言語に Root ばかりの時代といふやうな言語時代は、實社會の上に成り

立ち得べきものではないので、其の考へは、まるで夢を見て居る樣なものであります。人間の言語が、其の原始に於いて、具體的の言語と言つて然るべきである言語から發展して、段々と概念本位の抽象的言語と言ふべきものに移り變つて來た事は、第三章にも言つて置いたやうな譯でありますが、言語が具體的の言語であつて、完全なる抽象作用すなはち間接抽象の作用及び概念作用が利用せられなかつた時代には、單位語單位文間の單位關係は朦朧として限界が明でないものであつたのでありまして、其の言語の狀態は、犬の吠ゆるが如く鳥の鳴き囀るが如くであつたものが、概念本位のものと成るやうに成つて來て、始めて、分解的に符徵化せられ、明確なる聲音的表象として規定せられたる語彙を有つことと成り、又、構想的有機組織の表象法をも有つことと成りましたものでありまして、その代表的の符徵化せられたる聲音的表象を、擬似のものとの間に區別する其の區別的關係、又は、構想的有機組織につきての區別的關係をあらはす方法も、また發展して來て、こゝに造語法上の形式及び文典的形式の成就と成つたものであります。——（此等のことは本稿に詳にしてあります。）——さうして、其等が、——（主として、添成法もしくは訛成轉形法で出來て居る言語を本位としてゐる立脚地より申さうなら）——始め具體的の言語として云ひ慣らしたものを粉本として、意義の概念化と共に、或は改造し、或は延長し或は短縮して、之を、建設せられたる概念の符徵とするなかにも、屬性表象の符徵と成るものは、同時に、其が、新しき概念建設の基礎と成るべきである方より、所謂 Root の地位に立つことと成るにかゝはらず、一方には、獨自的の立脚地を有する傳統的なる日常實用の語彙を成すものでありますから、かゝるものは、其の始めに於いては、決して Root の Root としての概念を以つて立つものではなく、たゞ、高級なる抽象作用の成果としての概念の符徵としての單位語を成すものであつたのであります。

然るに、これが、Root すなはち語根といふ氣分を以つて迎へらるゝことと成るのは、種々の區別的關係をあらはす符徵としての Affix すなはち根辭が添はりて單位語を成すやうに成りて、其の新成の單位語より見て始めて其の單位語の語根として其の原基を成すものの存在が認めらるゝのでありまして、既に語學的學術的の思索に慣らされたる人が、敎養上自然修得の知識として豫め抱持して居る語根の概念を標榜して、之を考へ、語根ありて根辭之に加はるもの故、語根は正に根辭に先立つべく、從つて、正しく、根辭の時代に先立つて語根の時代ありしものと考へ了りては、其は誤謬と成るのであります。其故に、そんな意味に於いての語根時代といふものはあつたのではありませぬ。

さりながら、この根辭——（始めは、根辭といふよりは、根辭的のものといふべき程度のものであつたでありませうが）——のそはりて新しき語彙を生產する方より、語根的氣分が成就すると共に、其の造語法の發展は、語根的概念の生產を盛ならしむべき催進作用を成すは勿論の事でありまして、之に次いで、根辭の發展もまた大に起りしものなることも、想見するに難へる事でありますから、語根の發展と根辭の發展とが互に主伴を成すといふ關係であつたらうなかにも、——（其の發展の導火線が上述の多く根辭もしくは根辭的のものであつたらうにかゝはらず）——造語法的性質より見て、語根の大に發展したるは、大體上、根辭の大に展開したるに先立つべきものでありますから、具體的言語が概念本位の抽象

的言語に移行したる後に方つて、まづ語根發展の時代（Epoch of Root Developing Stage）といふべきものの成立を思念し、次いで根辭發展の時代（Epoch of Affix Deveioping Stage）の到來を思念して、人間言語の發展の時代的區劃をすることの適當なること、否、動かすべからざることなるべきは、異論なかるべきでありませう。

さて、兎に角、人間の言語發展の曉天時代に於いて、語根發展の時代のあつたことは確實であると言はねばならぬにかゝはらず、語根のみの時代などいふ、日常實用の現象と脫離した時代が、原始の時代にあつた譯がないことより推せば、漢語を語根時代といふことの謬想であることは、全く明白である筈であります。

そこで、漢語は、どうも常律で推すことの出來ぬ展開を經て居るので、どうしても自然に發展し來つたものとは取られぬ以上、其相當の特殊性の起つた所以を考へねばなりませぬが、私は、之を、上古に於ける所謂「中華」中心の極東天下の所謂「世界語」（International Language）で、支那の古帝王一流の者の制作語であると信じます。少し細く申せば、かういふことであります。支那は、今も、其の通りのあの尨大なる土地で、餘りに尨大なる土地故、常に分裂せむ〳〵としつゝあるにかゝはらず、自然の山海で之を別世界別國家として區劃すべきものがないので、又、混同しやう〳〵として居るので、古來その必然性を辿つて分合集散しつしつ居るので、其のなかに、主柄を把るべき優秀なる漢民族が、高き文化と高き理想とを以つて化を施き國を成したのでありますが、廣大なる土地に亘つて雜多なる民族を支配するには、何分、疏通を缺き易き意志の疏通を謀るのが大事でありますけれど、その意志の疏通には先づ言語の問題が先に立ちます。然るに、由來異國語の修得といふことは非常な難事でありまして、なかにも、造語法上文典形式上の委細は、異人種に取つて特別の困難を訴ふべきものであることは、學問本位の生活、語學本位の教育を持して居る今の時代でも、實にさうである程でありますから、こゝに、國家の成立存在上言語問題の注意せられざるべからざることが、異常の偉人に依りて注目せらるゝ事と成つたのであつて、そこで、一切の根辭的造語法と文典形式上の曲折とを拋棄したる、ぶつきら棒の語詞を其の實際的の使用語のうちより撰定し、一種政治上の世界語として之を使用し、繼續し行くべき同一事情の連絡は、其の實用的の言語を立派なる文學語として鍛へ上ぐることと迄成つたのであることと信じます。但し、かゝる言語も、面と向ふ時の場合を除きては、大なる功用を奏することが出來ぬものである方より、自然の必要は、象形文字としての工夫を其のぶつきら棒の言語と結合せしめて、六書的方法に依つて大なる表白法方面の雄飛を試み、遠隔又は隔世の後人にも、よく意志思想傳達の用を成し遂げ得らるゝこととしたのでありまして、この大成せられたる六書的造字造語法は、勢、複成語以外皆一音節たらしむる必要と成り又必至の勢と成りて、其の國語の性質を凝結せしめたものであります。さうして、傳說に遵つて言へば、黃帝の時蒼頡が文字（すなはち漢字）を造つたといふのが、ほゞ之に當り、かゝる政治的世界語の雄大なる建設も、恐くは、その黃帝時代の事であつたらうと想像せられるのである。

かやうな譯でありますから、漢語は、普通の言語發展の歷史からは、暫く取り除けものにして見ることとせねばならぬものと思はれるのであります。さうして、同語族と考へらるゝ西藏安南暹羅等の國語

の起源につきては、其が果して漢語の餘響として出來たものか、又、元來文典上の形式等に疎略なる國語の民族がこの邊にあつて、其等より思ひつきて上述の世界語が企てられたので、此等の民族は、その古代語の衣鉢を守つて居る遺蘖であるのだか、どうか、此等の事につきては、もつとよく研究して見なくては、迂濶なことは申されませぬが、暫く、漢語と共に、假に埒外に置いて見るべきでありませう。

財團法人齋藤報恩會
仙臺市東二番丁八十五番地

學術研究總務部
仙臺市大聖寺裏門通三番地
部長　畑井新喜司
主事　小倉博

産業及社會總務部
仙臺市大聖寺裏門通三番地
部長　木村匡

昭和四年七月十八日印刷
昭和四年七月二十日發行

編纂兼發行人　財團法人齋藤報恩會學術研究總務部
右代表者　仙臺市北四番丁五番地　小倉博

印刷者　仙臺市教樂院丁六番地　山本晃

印刷所　仙臺市教樂院丁六番地　東北印刷株式會社
電話　八六〇番　二八七番